

平成28年度

# 日本文化特別演習 報告書

第6号



上段：清水寺／下段：[左] 神泉苑、[中] 知恩院、[右] レストラン NINJA KYOTO

北海学園大学人文学部

第2日 2月27日  
[団体研修]

立命館大学、平安女学院大学の先生と巡検  
二条駅界隈～神泉苑～清水寺～高台寺公園  
～双林寺～知恩院～白河南通  
～四条大橋東詰～レストラン NINJA KYOTO



# 第3~5日

2月28日~3月2日

[個人研修]

## 私の ベストショット part2



嵐電嵐山駅はんなり・ほっこりスク  
ウェアにて 長谷川耀子



産寧坂 秋場美愛



貴船社にて 佐藤圭佑



竹林での一枚 北市楠乃葉



千本鳥居 粟 真聖



治療中 伊東梨那



伏見山山頂へ 吉川圭祐



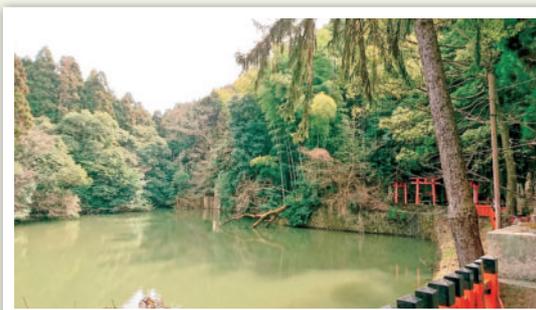
滋賀近江神宮にて 保木本結菜



治療中の鞍馬天狗 松田莉那



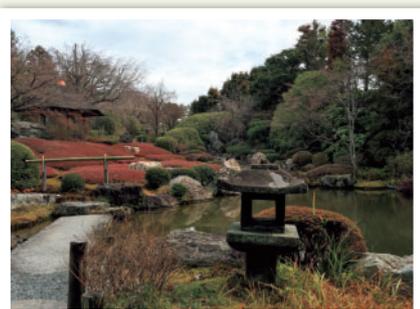
鼻の折れた鞍馬天狗 横田健太郎



新池 岡村知昌



八坂神社前にて 山田凌也



妙心寺退蔵院 空 健太



清水寺にて 藤橋大雅



東寺五重塔 手島慈英



OSUSHI 央戸浩起



嵐山駅にて 千葉萌子



随心院にて 福島沙希



八坂庚申堂にて 高橋優花



東映太秦映画村にて 大西雪乃



八坂神社にて 及川凜華



龍安寺に行く途中のお好み焼き「克」にて 平尾優作



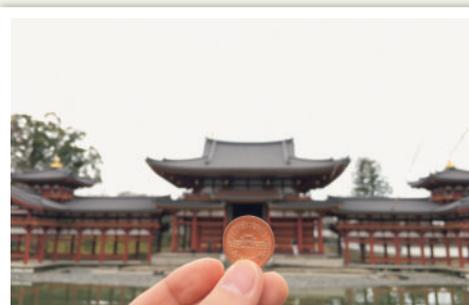
平等院 前川史帆



八坂の塔 八木一馬



八木邸宅 井鳥有紗



平等院鳳凰堂 佐藤実和子



平安神宮鳥居前 奥村活弥



嵐電嵐山駅キモノ・フォレストにて 大場愛永



本能寺跡の石碑 森川日菜子



銀閣寺にて 大森 俊

第6日 3月3日

最終日～  
プレゼンテーション  
を終えて帰路へ



1班の皆さん



1班の皆さん



1班の皆さん



2班の皆さん



2班の皆さん



3班の皆さん



3班の皆さん



3班の皆さん



4班の皆さん



4班の皆さん



4班の皆さん



4班の皆さん



5班の皆さん



5班の皆さん



6班の皆さん



6班の皆さん



6班の皆さん



7班の皆さん



7班の皆さん



8班の皆さん



8班の皆さん



8班の皆さん



8班の皆さん



9班の皆さん



関西空港のお雛さま



関西空港にて



村中先生、丹治さん、井野先生

# 平成28年度 日本文化特別演習 報告

引率教員 村中亮夫

平成28年度の日本文化特別演習は、9月～1月にかけて3回の事前ガイダンスを実施した後、2月26日(日)から3月3日(金)の5泊6日の日程で京都にて実地演習を行いました。事前ガイダンスでは授業の目標や計画、テキスト等の説明を行った後、各自で実際に京都にて取り組む研究計画を立案しました。その後、ここで計画された研究テーマに基づき便宜的に分けられたグループごとに、各自の研究テーマについて情報共有を行うとともに、実際に京都に訪問した際に個人で訪問する場所とグループで訪問する場所とを決める作業を行いました。

ここ数年は、団体研修として京都御所を参観していましたが、平成28年7月より京都御所の通年公開が開始されたことを受けて、自主研修の間に各自のスケジュールにあわせて京都御所を参観するよう改めました。これで、これまで確保してきた2日半の自主研修を半日延長することが可能となり、現地での自主研修の自由度が高まりました。宿泊施設は地下鉄東西線東山駅からのアクセスも良く、周囲に文化財建造物が多く立地する岡崎の京都トラベラーズ・インを利用しました。実地演習の具体的な行程は下記の通りです。

1日目：新千歳空港→伊丹空港→〈貸切バス／公共交通機関〉→京都

2日目：団体研修「京都歴史探訪—二条駅から東山界限へ—」

JR二条駅周辺→神泉苑→〈昼食〉→清水寺→高台寺公園→双林寺→知恩院→円山公園→白川南通→四条大橋→レストランNINJA KYOTO

3日目：自主研修

4日目：自主研修

5日目：自主研修

※いずれかの日に必ず各自で京都御所を参観

6日目：プレゼンテーション→〈貸切バス／公共交通機関〉→関西国際空港→新千歳空港

本年度は例年になく多くの学生が受講し、総勢48名の受講生での特別演習となりました。そのため、伊丹／関西国際空港と京都との行き来の貸切バスに乗車しきれず、公共交通機関も併用しての移動となりました。ただし、受講生が多かったこともあり研究テーマが多彩となり、プレゼンテーションも大いに盛り上がったことも事実です。本報告書には、受講生たちの多彩な研究成果が収められていますので、ご高覧いただければと思います。

本年度の演習も、例年通り底冷えのする冬の京都での実施となりましたが天候にも恵まれ、大きな問題もなく無事に終わることができました。本年度共同で本演習をご担当くださいました井野葉子先生、団体研修での講師を御引き受け下さいました平安女学院大学国際観光学部の井上学先生、立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員の谷端郷先生、立命館大学大学院文学研究科大学院生の森田耕平様、谷崎友紀様、旅行業務をご支援下さいました株式会社日本旅行北海道札幌支店の丹治愛美様(米坂ゼミOG)には感謝申し上げます。

# 神社と寺の景色 —一人々が訪れる理由—

1 部日本文化学科 2 年 2715102 秋場 美愛

## 1.はじめに

私は今回の研修旅行では多くの神社やお寺を巡ることができた。北野天満宮や上賀茂神社、下鴨神社、三十三間堂、伏見稲荷大社、八坂神社など他にもたくさんの場所を訪れることができた。そしてそれぞれの神社や寺の景観の素晴らしさを体感することができた。今回のレポートでは私が特に感銘を受けた高山寺と龍安寺のそれぞれの素晴らしさと共通する事について考察していく。

## 2.高山寺

高山寺の創建は奈良時代に遡るともいわれ、その後神護寺の別院であったのが、建永元年（1206）明恵上人が後鳥羽上皇よりその寺域を賜り、名を高山寺として再興した。国宝「鳥獣戯画」や日本最古の茶園があることで有名である。しかし、今回私は、初めて高山寺に実際に訪れたことでわかった高山寺の鳥獣戯画以外の素晴らしさを知ることができた。

高山寺は京都駅からバスで 1 時間ほどの梅尾山にある。有名な観光地なのでバス一本で行くことができるが、京都の中心からはだいぶ離れている。そのため、あたりはとても静かで空気が澄んでいる。バスを降りたところにある裏参道は大きく空に向かって真っすぐと伸びる杉木が生い茂っている。一本一本の杉木に力強い生命力を感じることができる。そして金堂に続く道はとても狭いうえに急であり、石の階段は一段一段が高く段数が多い。しかしあえてその石の階段を上って金堂まで行くとお寺で修行をする僧侶の気持ちがわかる気がする。なぜならば、力強い生命力を宿す杉木に囲まれている中きつい階段を上るとそれだけ天に昇っていくように感じる。普段の生活の中では感じることのできない体験である。

次に、私が感じた高山寺のもう一つの魅力は国宝・石水院についてである。石水院は明恵上人が後鳥羽上皇により学問所として賜った建物で、上人時代の唯一の遺構であり、鎌倉時代の住宅建築の最高傑作である。中に入るといくつかの国宝も展示しており、それを実際に見ることで学べることも多くあったが、私は、石水院南縁から見える景観にとっても感動した。石水院の南面は清滝川を越えて向山をのぞみ、中から外を眺めると風景が柱と薜戸、広縁によって額縁のように切り取られる。自然が一つの芸術のように見えてくるのだ。私はその自然の芸術を見たことで改めて自然の美しさや植物の生命といったものを感じることができた。

### 3.龍安寺

龍安寺は1450年に足利将軍の官領職にあった細川勝元が徳大寺の山荘を譲り受け、妙心寺第五世の義天玄承禅師を開山に迎え創建した。龍安寺は石庭で有名である。この石庭は南北10メートル、東西25メートルの空間に白砂を敷き詰め、15個の石が配置されている。しかしその庭をどの方向から眺めてみても14個の石しか見ることができない。極端なまでに象徴化されたこの石庭の意味は未だ謎に包まれており、見る人の自由な解釈に委ねられている。私はこの石庭には物事や人の本質が投影されているのではないかと考えた。石の一つ一つは「本質」を表している。そして、人はすべての「本質」を見ようとするが「本質」は見方や考え方、立場によって見えなくなってしまう本質があるということはこの石庭は伝えているのではないか。同じくこの石庭を訪れた人はどのような考えを持ったのかぜひ聞いてみたいと思った。

また、龍安寺のもう一つの魅力は石庭鑑賞の帰りに見ることができる鏡容池である。この池は大徳寺家によって、築かれたもので池の堤防からは龍安寺全景の山々が古来の姿のまま眺望することができる。眺めていると水の効果なのか何かしらほっと心が和むことができる。石庭は人の手で造られた「美」であり、この鏡容池は自然の「美」であるように感じてくる。

### 4.まとめ

京都にあるたくさんの神社やお寺に多くの人が集まるのは普段の生活の中では感じることもできない世界を体感するために訪れているのではないだろうか。神社やお寺の世界では私たちが普段感じているストレスや緊張感を無くし、心を穏やかにしてくれる。このように神社やお寺を訪れるというのは歴史や文化を学ぶとともに普段とは違う空気に触れるためなのだろう。そのように神社やお寺が私たちに与えてくれる影響は今も昔も変わらないのではないだろうか。昔の人も神社やお寺を訪れて神や仏に近付き、普段の生活とは違う空気を味わうために訪れていたのではないかと今回の研修旅行で気づくことができた。

私たちが生きるインターネットが普及した社会の中では簡単に検索をすれば、私が今回紹介した高山寺や龍安寺の画像がたくさん出てくる。それらの画像から学ぶこともあるかもしれない。しかし、やはり実際に自分の足で訪れてみてその場所まで行くことの大変さや空気感、匂いや感触など五感で感じるということは画面越しからでは知ることができないのだ。実際に行くことの大切さを今回改めて実感した。

## 京都の街を歩く

1 部日本文化学科 2 年 2715113 伊東 梨那

今回の日本文化特別演習を受講するにあたって、『小説「少年陰陽師」ゆかりの地を巡る』というテーマを掲げていたが、それと同時に今若い女性の間で人気となっているオンラインゲーム『刀剣乱舞』に登場する刀剣男士たちと縁のある寺社などを巡るため、2月28日から3月2日の自主研修の期間、御朱印を集めつつ京都の街を歩いて散策した。

2月28日、自主研修初日は最初に京都御所を訪れた。敷地面積がとても広く、紫宸殿などの建造物や庭園も見事な美しさだった。ただ、猿ヶ辻の猿には網がかけられており、保護のためとはいえよく見ることができなくなって残念であった。次に伏見稲荷大社を訪れ、そこから歩いて藤森神社に向かった。ここには学問の祖神「舎人親王」と勝負の神様「素盞鳴命」が祀られている。また、「しょうぶ」にちなんでいるのか、ここは菖蒲の節句発祥の場所でもある。季節外れのため菖蒲は一切咲いていなかったが、『刀剣乱舞』のキャラクターのパネルが設置してあり、特別御朱印の販売などもおこなっており若い女性達で境内は賑わっていた。次に訪れた豊国神社では丁度フリーマーケットがおこなわれており、地元の人たちが会話に花を咲かせていた。その後、六道珍皇寺へと向かい、そこから三条大橋を渡り京都文化博物館へと向かった。三条大橋の擬宝珠という柱の飾り部分には池田屋騒動の時の刀傷がついており、自分も含め観光客はチラチラとその傷跡を探しながら渡っていた。京都文化博物館では日本刀というものを初めて見た。先ほどの擬宝珠というのは金属であるのだが、その金属に傷をつけるだけあってとても鋭い刃をしており、短刀であってもかなり重量があるであろうことが見ていて伝わってきた。この日の探索はここまでである。歩行総距離は約8キロほどであった。

自主研修2日目、この日は朝から貴船神社へと向かった。神社へと続く道には清く澄んだ川が流れており、この水が鴨川の水源となっている。そして道を一步外れると木々が鬱蒼と茂り、朝にも関わらず暗闇が広がっていた。この地には「宇治の橋姫」による丑の刻参りの伝説が残っており、『少年陰陽師』においても結婚を誓い合った男が公家の姫に奪われたことを恨んだ貴族の女性が貴船で丑の刻参りをするシーンがある。「きふね」は「気生根」とも書くように、不思議なパワーに満ちた土地である。だからこそこのような呪いの話が生まれたのではないかと現地を訪れて思った。貴船神社の参拝後、神社の目の前にある西門から鞍馬寺を目指して山を登った。上りは木の根っこが地面からむき出しになっており、大変険しい道となっていた。魔王殿に着いた時、たまたま出会った地元の登山客の方にお話を聞く機会があった。鞍馬山の土のすぐ下には硬い岩盤が広がっており、そのため木の根が地表に出てきてしまいボコボコな道になっているのだと教えて頂いた。鞍馬山には天狗伝説が残っており、源義経が幼少期に修業を積んでいた場所としても有名である。

足腰を鍛えるにはもってこいの場所だと自身で登ってみて感じた。山道を抜けて鞍馬寺に着くと目の前には開けた景色が広がっており、まさに絶景であった。『源氏物語』において、光源氏が若紫と出会ったのもこの鞍馬寺であるとされているのだが、男女がときめくのはいつの時代も高い場所なのだなとこの時考えてしまった。鞍馬山を下山した後は上賀茂神社を訪れ、そのまま船岡山公園にある建勲神社に向かった。この神社には織田信長公が祀られているのだが、彼の愛刀であった宗三左文字が奉納されており、藤森神社や豊国神社同様『刀剣乱舞』のキャラクターのパネルが設置されており、女性参拝者で賑わっていた。この日は帰る前に『少年陰陽師』のヒロインが住んでいた東三条院跡の周辺を散策したのだが、当然のことではあるが藤原氏の邸宅があった平安時代の雅な面影などまったくなく住宅、ビルが密集しており少し残念に感じた。この日の歩行総距離は約 23 キロであった。

自主研修 3 日目は粟田神社から始まり壬生寺、二条城、清明神社、北野天満宮を巡り、鴨川デルタから祇園まで川沿いを歩いた。壬生寺には新撰組隊士たちの御墓などがあつた。寺の隣には新撰組発祥の場所である八木邸があり、そこでガイドさんの新撰組の始まりについての解説を聴いてきた。屋敷内には芹沢鴨がつかずいたという文机と、彼を切りつけようとした際についたとされる柱についた刀傷が今でも残されていた。二条城では二の丸御殿の中を見学する事ができ、絢爛豪華な障壁の絵などを見つつ驚張りの廊下を歩いてきた。足を踏み出すたびに鳥の鳴き声のような甲高い音が鳴り楽しかった。北野天満宮では丁度敷地内で「鬼切丸」など重要文化財である刀剣の展示展をおこなっていた。京都文化博物館の時と同じように、やはり、どの刀も重そうであると感じた。太刀になると刀身が長くなり、ドラマなどのように一気に抜刀するのは容易なことではないと思った。また、人を切り、何百年も経っているにも関わらず光を反射し、鏡のようにとてもきれいなことに驚いた。刀は実用性だけを重視したものではなく、美術的にも大変価値があるものなのだと改めて感じた。北野天満宮をあとにし、等間隔に座るカップルたちを眺めつつ鴨川沿いを歩いた。『少年陰陽師』において鴨川が氾濫するシーンがあるのだが、正直川は穏やか過ぎて氾濫するというイメージがわかなかつた。この日の歩行総距離は約 25 キロであった。

今回歩いた距離は約 55 キロ程で札幌から新千歳までの距離を歩いた。その中でわたしが思ったことは、京都市内には有名じゃない、小さい神社がたくさんあり、そう言った神社は地元の人たちと密接な関係にあるということだ。100 メートル歩けば一つは神社があると分かつた。観光の際はバスなどの交通機関を使うのもいいが歩いて散策しないと分からないこともあるのだと今回の研修で感じた。また、『刀剣乱舞』など、ゲームやアニメの力を借りることで人を呼び込もうとする神社やお寺の苦勞も、少し分かつた気がする。しかしこういったブームの力を借りるだけでは長く続かないため、次なる戦略を考えなければならぬのもまた事実である。

私は今回の研修を通して小説への理解を深めることができた。高校の時も修学旅行で一度来た事があるのだが、行くたびに魅力を増していくのが「京都」なのであると感じた。

## 新選組の生きた京都を巡る

1 部日本文化学科 2 年 2715114 井島 有紗

私は今回の京都の自主研修で、新選組ゆかりの地を訪れた。自主研修のテーマを新選組に決めたのは、もともと彼らについて興味があったからである。そのため新選組が大きな活躍を残した京都で、ゆかりの場所を訪れさらに彼らについての理解を深めたいと思いこのテーマにした。

はじめに、西本願寺へ向かった。新選組は、隊士が増え手狭になった壬生の屯所を西本願寺に移した。太鼓楼と北集会所という場所を使用していたが、北集会所は姫路市の本徳寺へ一部移されたため、新選組に関する建物は太鼓楼のみとなっているようだ。西本願寺の中を歩いて太鼓楼を探していると、敷地内の隅の方に建てられていた。まるで寺の一部を申し訳なさ程度に借りたかのような立地であるように見える。しかしそれと同時に、もともと長州とつながりがあったという寺であったため、ここから動向を監視しているかのような重々しい雰囲気も感じた。

続いては、島原大門へ向かった。島原とは、江戸幕府公許の花街として発展した場所である。新選組も実際にこの門を通過して花街へ訪れたようだ。地図通りに進んでいくと民家の中に門が突然見え驚いた。大門というぐらいであるから大きなものを想像していたが、瓦屋根の比較的小規模な造りのものであった。京都市登録有形文化財と標識が掲げられており、そこには慶應三年建築の昭和六十一年登録と書かれていた。慶應と昭和という全く違う年号を見たことによって、古い歴史を感じる事ができた。

輪違屋は島原の中にある<sup>おきや</sup>置屋である。輪違屋の入り口には、筆で「観覧謝絶」と書かれた木札がかけてあった。調べたところ、一見さんお断りの店だという。京都では一見さんお断りのお店があると知ってはいたが、ここまではっきりとお断りを入れている光景を初めて見たので、とても興味深く感じた。

角屋もてなしの文化美術館も島原付近にある<sup>あげや</sup>揚屋である。ここでは興味深いお話をたくさん聞くことが出来た。角屋は一階が台所となっている。台所には料理を運ぶ時につまずいて転ばないように段差がない造りになっていたり、現在では当たり前となっている床下収納があったり、煙を外に出す窓が付いていたりと目に見える工夫が施してあった。揚屋と呼ばれる理由は、台所で料理を作りお客様を二階へ上げてもてなしたことからこう呼ばれるようだ。角屋は昼間から宴席を設け酒を飲み食事をするための場所で、宿泊を受け付けない店であったという。そのため、入り口から入ったときに庭が美しく見えるように、あえて廊下をずらしていたり、富士山の掛け軸と共に、庭に富士山の形を模した石を置くといった視覚も楽しませもてなす工夫が見られた。新選組の隊士が残した刀傷も実際に見ることが出来た。角屋は支払いをつけ払いとしていたが、隊士の増加によって新選組の財政が圧迫されたため、新選組調役が角屋に現金で支払わせるようにという文書を出したのだ。ついで食事が

出来ないことによる腹いせから、傷をつけたそうである。新選組も実際に出入りしたという店の雰囲気を感じ取ることが出来て貴重な体験であった。

壬生寺では新選組隊士の墓や近藤勇の胸像が置いてあったが、墓の側に池があつてどことなく落ち着かない印象を抱いた。新選組の人物をモデルにしたアニメの看板の様なものが立ててあったり女性の参拝客がよく目につくことから、壬生寺は新選組ゆかりの地として有名な場所であるために観光地化していると感じた。

旧前川邸は敷地の入り口付近に古い地図を載せてあり、当時の雰囲気を感じ取ることが出来たが、実際に建物の中の様子を見ることが出来なかった。進徳寺は門が閉鎖され、寺も塀で囲まれていた。しかし、浪士組が結成された当時ここで演説が行われた逸話を調べて訪れたため、ここから始まったのだと実感することが出来た。どちらも一般公開していなかったため、外観しか見ることが出来ず非常に残念であった。

八木邸は、新選組の最初の屯所であった場所である。新選組局長であった芹沢鴨暗殺の現場であり、その際に着けられた刀傷で有名な場所でもある。天井が低くなっていたが、江戸時代の平均身長がそれほど高くなかったために低くなっているのかとはじめは思っていた。天井が低くなっている理由は、刀をむやみに振り回せないようにしているからだそうだ。芹沢鴨が暗殺された際につまづいた文机と刀傷を実際に見ることが出来たが、写真で見るとよりも実物を見た方が出来事の重みを感じ取れた。家の中を歩くことによって、実際にここで生活していた雰囲気を味わうことが出来た。最後にはお菓子とお茶をおいしくいただいた。

光縁寺は山南敬助の墓があるということで訪れた。観光目的の寺ではない印象で、少し入りづらい感じであった。中に入ると、住職さんが出てきて新選組に関する逸話をたくさん話してくださった。入り口の入りにくさとは違い、とても話が面白い方であった。住職さん曰く、あまり観光客が訪れない場所でほとんどの人が通り過ぎてしまうそうだ。新選組のゆかりの地として有名な壬生寺とは違い、あまり知られていない場所であるのか、それともやはり入りにくいという印象が先立ち人が訪れないかのどちらかだと私は感じた。墓参りをしたあと、住職さんが寺の本堂に入れてくれ、山南敬助の位牌も拝むことが出来た。「南無阿彌陀仏」という言葉の意味を教えてください、日々の行いを改めて見直す機会を与えられたように感じた。

最後に訪れたのは、池田屋事件があつた池田屋跡地である。現在は池田屋という宿屋は存在せず、池田屋という居酒屋となっている。実際に存在していたという石碑と池田屋事件に関する説明がされた看板しかその形跡を見ることはできない。しかし、ここで新選組が活躍し名を京都に轟かせた歴史的現場だと考えると、深い感動を覚える。

新選組ゆかりの地を回っていったが、今回の研修で新選組について多くの知識を得ることが出来た。また新たに本を読んだり、新選組関連の番組を見たりする際に新鮮な気持ちで見ることが出来るだろう。本やインターネットではわからないことを見て聞けたため、大変勉強になった研修であったと思う。

## 歩いて感じる小説の世界 —森見登美彦の世界を知る—

1 部日本文化学科 2 年 2715115 植松 満衣

2月26日から3月3日にかけて5泊6日で日本文化特別演習が行われた。その中でも自由行動の3日間について述べていきたい。私は今回、「森見登美彦の世界を知る」というテーマで京都の研修に臨んだ。理由は単純に私が森見登美彦という作家の小説が好きで、彼の作品は京都を題材にしたものがほとんどだからである。彼の小説の世界観を実際に京都の町を歩くことで感じたいと思ったのだ。自由行動をするにあたって、特に好きな『有頂天家族』(幻冬舎、2007年)と『四畳半神話大系』(太田出版、2005年)という作品に出てくる場所を中心にめぐった。物語の中に出てくる場所を実際に見て歩いて感じたことを述べていく。

その前に前述の作品について、軽くあらすじを述べる。『有頂天家族』は狸と天狗が人に紛れながら暮らす京都を舞台に繰り広げられる狸たちの生活を描いている。主人公の下鴨矢三郎とその家族は父が狸鍋にされて人に食べられたことをきっかけに、狸界の頭領決めや父を食べた人間たちに狙われたことなど様々なことに巻き込まれながら父の死の真実に迫っていく。一方、『四畳半神話大系』は京都大学に通う大学3回生の「私」が1回生の時に選んだサークルでいかにバラ色の大学生活を送ろうとするかを描いたそれぞれ独立した4つの話から成り立っている。

まず、1日目は祇園にある八坂神社へ行った。八坂神社は『有頂天家族』で主人公の下鴨矢三郎一家が初詣におもむく神社である。小説の中で矢三郎たちが訪れたのは初詣のためであるので、年始のあまりの人出の多さに圧倒された描写がある。八坂神社には高校生の頃、修学旅行でも訪れたことがあり、観光客が溢れている印象があった。今回も人はいたものの時間が夕方に近かったこともあって、歩くのが難しいほどではなかった。そのため、矢三郎たちと同じような状況は体感できなかったが、人ごみのなかに人に化けた狸たちがいるかもしれないと考えると、ただ神社の中を歩くだけよりも楽しむことができた。また、暗くなった頃に四条大橋を通り、木屋町や先斗町付近を歩いた。四条大橋からは『有頂天家族』で弁天が踏み台にして夜空へ飛び立つ「東華菜館」や矢三郎が模型細工に見えたと述べる「レストラン菊水」という店を見ることができた。中には入らなかったものの、近くで見るとその建物の高さに驚いた。『有頂天家族』はアニメも見たことがあるため、建物の外観の雰囲気は覚えていたが、実際にその建物を見てみると、この高さを弁天は天狗の力を使って軽々上ったのかと弁天の能力の高さを実感できたような気がする。これは実際に建物を目にしないと感じられなかったことであろう。木屋町は『四畳半神話大系』の怪しい占い師の老婆が現れる場所だ。暗くなってから夕食を取るために歩いていたため、道の狭さや店の明かりなどから醸し出される真っ暗なところと明るいところのギャップに不思議な雰囲気を感じ

た。主人公の「私」が老婆の占いを当たりそうだと言っていたのも老婆本人の気質のみならず、町の雰囲気もあってなのかもしれない。

2日目は一緒に回った友人のテーマに沿った場所を中心にめぐったため、割愛する。3日目は昼食に京都大学のすぐそばにある「進々堂」という喫茶店に行った。ここは『夜は短し歩けよ乙女』(角川書店、2006年)という作品にも登場し、様々なドラマが描かれる場所だ。喫茶店で構想を練るのが憧れだったという森見おすめの店でもある。入ってみると、薄暗い店内に長テーブルがいくつもあり、勉強する学生らしき人や新聞や本を読む人など各々自由に過ごしていた。コーヒーの香り、人々のうるさすぎない話声などすべてが心地よく混ざり合った空間で、1日中過ごせるほど居心地が良く、森見が構想を練っている姿を容易に想像できた。その後、森見作品に多く登場する鴨川デルタを歩いた。『有頂天家族』で矢三郎がくすねた赤玉ポートワインを飲むのも、『四畳半神話大系』で「私」と小津が花火を放つのもこの場所である。特に、『四畳半神話大系』における鴨川デルタは、高野川と賀茂川の2本が集まって1本の鴨川になる地理的な様子が、いろいろなサークルに入った場合を考えた物語の中の並行世界がひとつに収束していくことと重なっているため、重要な舞台となっている。『四畳半神話大系』の樋口師匠がデルタの突端に立ったように私も実際に立ってみると、両脇から流れる川がひとつにまとまって鴨川になっている様子になんだか壮大な気分になると同時に「どこか遠くへ行きたいな」と言った樋口師匠の気持ちがなんとなくわかったような気がした。鴨川デルタを抜けると、『有頂天家族』の狸たちが暮らしている糺の森と下鴨神社へ向かった。下鴨神社も森見作品に多く登場する場所だ。下鴨神社には『有頂天家族』のテレビアニメの2期が4月から放送されることもあいまって、矢三郎のキャラクターパネルが置いてあったり、グッズが売られていたりもした。周りに木が多く、日差しを遮っていたため、独特な雰囲気があり、そのあたりに矢三郎たちのような狸がいるのではないかと少しわくわくしながら、神社そのものはいたって普通にお参りをした。また、時期的に今回見ることは不可能であったが、『四畳半神話大系』の明石さんが店番を務めた、下鴨神社の古本市にも参加してみたい。

今回の研修を通して、小説のなかに出てくる場所を実際に訪れることで、情景を具体的に思い浮かべることができ、内容の理解が深まった。森見登美彦の作品はかなり独特な世界観の中で描かれているように感じていたため、その世界の一片を知ることができて良かったと思う。京都の静かで何かの底知れぬ力を感じる独特な雰囲気を醸しているような場所を舞台にしているのだから、余計に森見作品は不思議な魅力を感じるのかもしれない。また、今回は日程や時間的に訪れられなかったけれど、行ってみたい場所がまだまだある。特に、食べ物に関することはあまり回れなかった。『四畳半神話大系』で登場する「猫ラーメン」のモデルとなった屋台や『有頂天家族』の「偽電気ブラン」「赤玉ポートワイン」、『夜は短し歩けよ乙女』のバー「月面歩行」のモデルとなった店などが挙げられるだろう。もし次に京都へ行く機会があれば、森見作品に出てくる食べ物や飲み物を中心にめぐるとも面白いかもしれない。

# 京都の神社と御朱印巡り

1 部日本文化学科 2 年 2715120 大場 愛永

## ■ はじめに

私は「京都と神社と御朱印廻り」テーマに自主研修を行った。

テーマにある御朱印とは、元々は参拝者が写経を納めた証として寺が渡していたものだが、今ではそれが広まって、神社でも行われるようになり、参拝した証としていただけるようになった。御朱印はスタンプなどではなくその場で書いてもらえるもので、神社や書き手ごとに個性があり、とても魅力的なものである。

今回の研修で私は、粟田神社、平安神宮、岡崎神社、下鴨神社、上賀茂神社、八坂神社、建勲神社、北野天満宮、伏見稻荷大社、豊国神社、安井金毘羅宮の 11 社を参拝した。そのなかでも印象に残った神社について述べていこうと思う。

## ■ 神社について

**平安神宮**は立派な佇まいや、その有名さから古くからあるように思っていたのだが、実は明治時代に創建された神社だそうでとても意外に思った。御祭神は平安京最初の天皇である桓武天皇、と最後の天皇である孝明天皇である。たしかに御祭神のことを知ると明治創建は納得がいく。(余談だが、神宮とは、天皇や皇祖神を祭っている神社のことである。北海道神宮は、明治天皇が御祭神のなかの一柱として祀られているから神宮なのだとか。他には、天照大神を祀った伊勢神宮などが挙げられる。) 平安神宮の御朱印はとってもシンプルなデザインである。

**岡崎神社**はうさぎ神社としても有名で、境内はうさぎにまみれていた。神社といえば狛犬だが、ここでは狛兔もいる。おみくじもうさぎの焼き物のなかに入っている。なぜこんなにうさぎまみれなのかというと、境内一帯が野うさぎの生息地だったことから、うさぎが氏神様の使いとされ、またうさぎは多産であることから安産・子授けの神として信仰されているとのこと。うさぎが好きな方にはぜひオススメしたい神社だった。岡崎神社の御朱印は神社名ではなく、東天王と書かれている。これは岡崎神社が平安京遷都の際に東西南北の四方に建立された社の一つとして創建され、都の東に鎮座することから東天王と称されているからだそう。は岡崎神社と書かれていると思って見たため、とてもびっくりした。こちらの御朱印にも、もちろんうさぎの朱印が押されている。

**下鴨神社**は、正式には賀茂御祖神社と呼び、鴨川の下流に祀られていることから下鴨と呼ばれているそう。御祭神は賀茂建角身命、玉依媛命で、賀茂建角身命は古代の京都をひらかれた神様で、平安京ができるずっと前から鴨川周辺を支配していた賀茂氏の氏神で、また、賀茂建角身命は上賀茂神社に祀られている賀茂別雷命の祖父、玉依媛命はその母にあたるらしく、両社は深い結びつきがある。このことから分かるように、とても

歴史のある神社で、上賀茂神社と合わせて京都で一番古い神社らしい。また、本殿は国宝にも指定されており、君が代にもあるさざれ石が境内にあったりなどいろいろとすごい神社である。いただいた御朱印には賀茂社の象徴である二葉葵の印章が緑色で押されているのがとてもいいなと思った。朱印というように基本は朱色の印章が押されるものなのでこれは斬新だと思う。

**上賀茂神社**、正式には賀茂別雷神社。上述したように賀茂別雷命が祀られているのだが、ただ一柱を主神として祀り、神様の名が神社名に入っている神社はとても珍しいのだとか。また初穂料 500 円という価格破壊もいとお値段で特別参拝ができ、賀茂神話などといった上賀茂神社についての話や上賀茂神社のシンボルとも言える「立砂」の説明があり、また国宝である本殿と権殿を間近で参拝することができるので、ぜひ上賀茂神社に訪れたときは特別参拝をすることをオススメする。下鴨神社同様にこちらもすごい神社である。上賀茂神社の御朱印は下鴨神社と似たデザインになっているが、こちらは朱色の二葉葵が押されている。

## ■ まとめ

京都には多くの神社があり、ご由緒や、御祭神について、そしてその神社の雰囲気など、それぞれを知り、そして感じながら巡ることができてとても良かったと思う。観光地であるため、伏見稲荷大社や八坂神社など有名な神社の境内は観光客で溢れかえりとても、にぎやかであったが、下鴨神社と上賀茂神社では早い時間に行ったため人も少なく、静寂に包まれ、とても雰囲気のよい清らかな空気を味わえたことも思い出の一つである。靈感などがあるわけではないが、そういった雰囲気は神様の力を感じているような気分になりとても清々しい気持ちになれてとてもよかった。

もうひとつのテーマである御朱印巡りについては、元々私の趣味の一つであったが、研修中に短期間でたくさんいただくことができとても満足である。さすが京都。御朱印は、参拝した神社の神様との縁の証として大事にしていきたいと思う。

また、御朱印集めが最近流行っており、御朱印ガールと呼ばれる女子などが増えているらしいが、御朱印をきっかけに観光地になっている神社や、その他の神社などに人が訪れるきっかけになっているのはとてもいいことだと思う。最近では『刀剣乱舞』という刀剣を擬人化したゲームが人気で、それにあやかって登場するキャラにゆかりのある粟田神社、建勲神社、豊国神社、藤森神社が期間限定で刀剣の御朱印を渡すなどの動きがみられる。私もそのゲームが好きなため、藤森神社以外を参拝して、その御朱印もいただいてきたが、行く先々でそういった参拝客も見かけることができた。ゲームなどがあまりメジャーではない神社に来るきっかけになることはとてもよいことであると感じた。

今回の研修を通して、多くのことを体感し、考えることができとても充実した研修を行うことができた。また、まだまだ行ききれなかった神社がたくさんあるため、神社と御朱印巡りをしに京都へまた行きたいと強く思った研修であった。

## 漱石が愛した古都を巡る

1 部日本文化学科 2 年 2715121 小野寺 沙弥

夏目漱石は、生涯四度に渡って京都を訪れていた。一度目は 1892 年、二度目は 1907 年、三度目は 1909 年、四度目は 1915 年のことである。その時の経験をもとに綴られた作品もいくつか見られる。今回の研修の目的は、作品に登場する地を巡り、作品の场景描写に対する理解を深めることである。

自由行動一日目は、伏見稲荷大社への参拝と祇園見物、八坂神社への参拝に参ったが、実はこの日の行き先に漱石について語れることはない。伏見稲荷は、高校の修学旅行で頂上まで登りきれなかった、リベンジのような意気込みをもって臨んだ、個人的に行きたかっただけの場所である。研修の目的とは関係ないが、頂上まで登った時の達成感は格別であった。祇園については漱石が何度か訪れた場所であるのだが、事前の調査不足でそのことを知らないまま、ただふらふらと歩き回るのみになってしまった。大変惜しいことをしてしまったが、祇園と漱石のエピソードについて述べておこうと思う。

御池大橋西詰に、漱石の句碑が立っている。

「春の川を隔てて男女哉」

かつて祇園巽橋の手前にあった「大友」という茶屋の女将、多佳に送った句である。漱石が多佳に出会ったのは、持病の保養を兼ねた四度目の京都旅行の際、宿にしていた「北大嘉」に多佳がやってきたときのことであった。体調を崩して二日間寝込むことになった漱石を多佳はかいがいしく看病し、回復した漱石は北野天満宮に梅見をしに行こうと多佳に声をかけたのだが、当日になっても多佳が天満宮に現れなかったため、立腹した漱石が多佳に与えた色紙がこの句である。腹を立てる気持ちがありつつも、親身になって看病をしてくれた多佳に感謝の気持ちをこめて送ったのではないだろうか。

二日目には嵐山本線に乗り、嵐山を訪れた。桂川にかかる渡月橋を眺め、川沿いを登っていくと竹林の小径へと至る。そこを抜け、天龍寺を拝観した後は「嵯峨とうふ 稲」というお店で湯葉御膳を堪能した。一つ残念だったことといえば、天龍寺法堂の天井に描かれた雲龍図を拝めなかったことだろう。また京都に来たときには、是非とも日程を合わせて拝観したい。

嵐山は、漱石が東京帝国大学をやめ、朝日新聞社に入社して執筆した新聞小説の第一作である『虞美人草』で、主人公の甲野とその友人である宗近が訪れた場所である。本文中で「天龍寺の門前を左へ折れば釈迦堂、右へ曲がれば渡月橋である。京は所の名さえ美しい。二人は名物と銘打った何やらかやらをやたらに並べ立てた店を両側に見て、停車場の方へ旅衣七日余りの足を旅心地に移す。出逢うは皆京の人である。二条から半時ごとに花時を空にするなど仕立てる汽車が、今着いたばかりの好男子好女子をことごとく嵐山の花に向かって吐き送る」と描写されている。二人は嵐山を散策した後、舟で保津川を下る。漱石は二度目

の京都訪問の際、実際に保津川下りを体験しており、その体験がこの場面の素材になっている。漱石がその流れを「碧油の趣をなす」と評した通り、保津川の水は鮮やかな青緑色をしていて、見ている者の目を癒す。現在でも保津川下りは行われており、今回は時間の都合上実際に舟に乗ることはかなわなかったが、丁度舟が川を下っていく様子を見ることができた。

自由行動三日目は京都御所を見学の後、そのほど近くにある「とらや」にて休憩を取った。この「とらや」は、長年御所の御用を勤めてきた老舗の和菓子店で、美しい庭を眺めながら甘味を楽しむことができる。また、日本文化に関わる書籍が多数閲覧できるので、御所を訪れた際には立ち寄っておきたい場所だ。

さて、小休止を挟んだ後に向かったのは、鴨川デルタを北に進んだ先に広がる糺の森である。下鴨神社の鎮守の森であり、森を含めた神社全域が世界遺産として登録されている。漱石は、二度目に京都を訪れた際、糺の森に居を構えていた京都大学の教授、狩野亨吉のもとに滞在していた。その間に執筆されたのが『京に着ける夕』である。おそらく、あまり知られていない作品であろう。漱石が七条駅で降り、人力車で糺の森へ向かうさなか、亡くなった友人、正岡子規について思いを馳せる様子が美文調で綴られた短い作品である。季節は春寒と本文中にあるため、今回の研修とそう変わらない時期であったと考えられる。空虚にも感じられるほど飾り立てられた文章で描かれる京の町は、淋しく、寒々しく、どこか異界じみている。その町よりよくよく寒いところと、漱石は糺の森について述べた。一般的な鎮守の森は暗く神秘的な森が好まれるため、針葉樹が献木されることが多いのだが、実際に訪れた糺の森は、落葉樹を中心とした明るい、穏やかな森であった。漱石と違い、昼間に訪れたとはいえ、作品から受けた印象とは随分と様子が違うように感じた。漱石が最初に京都を訪れた時、季節は夏で、子規とともに京の町を見て回ったという。真夏と春寒の京都、そして友人であった子規の不在。これらの相違がもたらした哀切が、漱石の見た京都に表れたのではないかと思った。

『虞美人草』も『京に着ける夕』も、漱石が実際に京都を訪れた経験をもとに執筆された作品であり、どちらも美文体が用いられている。修辞の尽くされた文章は、日本語の美しさを感じさせるが、こちらの想像力が追い付かないことがあるのも事実だ。百年前のことなので、当時と現在とでは様子の違うところもあるだろうが、漱石が訪れた場所を実際にこの目で見ることで、情景描写への理解が深まり、また行って初めて分かることも多かった。座って本を読むことばかりが大事ではないのだとあらためて感じることもできた。今回は漱石ゆかりの地を巡るという観点で京都を歩いたが、また違う目的をもって京都を見たいと強く思う。こうして一度訪れた者に、また来たいと思わせる魅力が京都にはある。漱石もそう思ったからこそ、こうして京都を訪れていたのではないだろうか。

## 京都研修を終えて

1 部日本文化学科 2 年 2715122 折目 汐音

2 月 26 日から 3 月 3 日の 6 日間私は日本文化特別演習に参加した。私は京都を訪れるのが初めてであったので京都の定番の観光コースをまわり京都がなぜ日本有数の観光都市であり続けるのかを考え、また観光都市のひとつであり自身が住む北海道と比較してみる。をテーマとした研修を行った。6 日間の研修で印象に残ったことをまとめていく。

私が京都についてホテルを飛び出すと最初に目についたのは、近くのガソリンスタンドとコンビニであった。瓦屋根と木を模した黒の柱、白い壁、北海道であれば駐車場があるべきコンビニの前にはベンチや傘が置かれフリースペースとなっていた。このように景観を守るための工夫が様々に気をくばられているのだな。と今回の旅で感じるが多かった。二日目の研修でも学んだが、外観は古風な町屋がカフェやショップに生まれ変わるリノベーション町屋も多く自主研修中にリノベーション町屋のカフェを訪れた。外見は瓦屋根と黒を基調とした古風な建物であった。中に入ると板の間と畳敷きのフロアがあり、せっかくなので畳の席へと案内してもらった。従業員に話を聞くと、中の壁、畳は張替を行ったが、間取りなどはそのままであるという。私たちの他にも主婦らしき女性グループや同年代らしき女の子たちが静かにおしゃべりを楽しんでいた。そこでおすすめであるというパンケーキをいただいた。店は肌寒い気がしたが美味しくいただけた。

また、祇園近辺を歩いていると街灯が異常に少なく感じた。そのため一本中道に入ると暗くコインランドリーの明かりが眩しく思うほどであった。これも景観維持の為なのだろうか。疑問に思った。景観的なことでいうと北海道とは違い京都市内は道幅が狭く大きな通りでも片側二車線で車と車の幅はギリギリで車間距離も狭く何度もひやひやした。また歩道と車道の距離も近く、歩くすぐ傍を車が普通のスピードで走ることに驚いた京都に景観保護条例があることは知っていたが、内容をあとから調べてみると京都市の景観条例に京都市内全域は五重の塔以上の高さの建物は建てることできないという条例まであり、市全体で観光地としての街を作り上げていることが分かった。

一日目八坂神社に入った。研修の前に散々読み込んだパンフレットに八坂神社には縁結びのご利益があると書いてあったので入ってみた。もともと「祇園神社」などと呼ばれていた八坂神社は 656 年に創建されてから地域一帯の神様として広く信仰されてきた神社である。八坂神社ではたくさんの神様が祀られており、境内には複数の摂末社が存在する。その中で私が気になったところをピックアップする。大国主神社は八坂神社でも人気がある縁結びの神様が祀られている摂末社である。

次に気になったところは美御全社である。この摂末社は美の神様が祀られてあり、美容に効果がある美容水という手水舎があり顔につけると良いとされており、女性たちがたくさん参拝していた。私ももちろん強く参拝させていただいた。

玉光稲荷社はもともと豊作のご利益があると信じられていたが、農業より商業が盛んになった現代では商売繁盛のご利益があるという。時代の変化によって変化を遂げていた撰末社もあった。

今回一番印象に残ったのは金閣寺である。京都観光の定番中の定番であるが三島由紀夫の『金閣寺』を読んだときからずっと行ってみたいと思っていたのである。金閣寺が目に入った時、素直に単純に、きれいだ。と思った。そんな簡単な感情しか出てこないほど美しく厳かであった。風が無く天気が良かったので鏡湖池に映る逆さ金閣もきれいに見えた。また金閣寺を周りながら三島由紀夫の『金閣寺』のシーンを思い出し主人公の目線になることができ、この作品をより身近に感じる事ができた。

私がこの研修で一番楽しみにしていたのが伏見稲荷大社である。映像で見た千本鳥居がとても綺麗だったので直接見たらどうなのだろうかと楽しみにしていた。伏見稲荷大社は「外国人に人気の観光スポット 2016」で日本国内三年連続第一位を獲得している名所である。着いてみるとやはりたくさん観光客で混雑していた。外国人も多かったが日本人観光客もかなりの数いたように感じた。本殿でお祈りをしてから千本鳥居をくぐった。密集した鳥居の隙間から陽の光が入りなんと幻想的であった。混雑した鳥居は騒がしいはずであるのに静寂に感じた。この幻想さが異次元のように思えこれが外国人観光客にも人気の理由なのかもしれないと思った。伏見稲荷大社で私の目当てのひとつであった「おもかる石」もやってみた。「おもかる石」とは1~99 kgの石で自分が思っていたより軽ければ願いが叶い重ければ成就しないというものである。私も願いをしてから石を持ち上げた。「うっ」と息がつまるほど重かった。想像の何倍も重かった。残念である。

この研修でわたしはたくさんのお話を学べた。京都の魅力に直に触れ、文化に触れ、考え、楽しむことができた。もっと京都の魅力に触れたい、もっといろんなところに行きたい。と思えば同時に自身の街も見つめなおしたいと感じた。そして何よりこの旅を経てもっと勉強をしてみたいと思えた。こんな経験は正直初めてである。今度は京都の歴史を学びなおしてから訪れたいと思った。本当に来てよかったと思えば有意義で満足な研修であった。

# 日本文化特別演習レポート —おのぼりさんの京都散策記—

1 部日本文化学科 2 年 2715125 金木 健

## はじめに

私は、今回の演習の目的を「歴史を学ぶにあたって、机上でのみ学ぶのではなく実際に事件事象の発生した場に赴き、理解を深める」こととした。しかし、実際に行ってみれば、京都に毎年訪れている数千数万の観光客と変わらない、とても学習者と呼べる態度ではなくなってしまう。このことについては、後に詳しく書くが、そのような状態であったため、本稿の主題も「初上洛での気づき、京都と北海道の違いを考えつつ、来期の演習受講生への紹介（忠告と勧誘）」と、およそ大学生らしからぬ内容だが、一生懸命まとめるのでご容赦願いたい。

## 第一日目から二日目

私は、今回の研修旅行が人生において初めての上京であった。したがって、正真正銘のおのぼりさんであったわけである。京都の気候や風土は、義務教育課程の九年間と高校三年間のうちで、一度は受けたはずである地理の授業で得た程度の知識があっただけである。何が言いたいかというと、それは、ほとんど予備知識がなかったということである。このような状態ゆえに、京都についてからは何もかもが珍しく、自動販売機を見ては色が違うことに驚嘆（景観への配慮ということは知ってた）し、民家を見ればへの字屋根や融雪屋根でないことに違和を覚え、しまいには、雪がひとかけらもないことに心の底から驚いた。田舎者ここに極まれりである。二月の末から三月初めの京都の気温は、私の感覚から行くと、さながら北海道でいう初秋と言ったところか。いくらか肌寒さを感じるが、不快なほどではない。このように感じ、北海道より暖かいと判断してしまった。これがもともと、風邪をひき、自由行動二日目はほとんど動けなかった。さて、第一日目は北海道からの移動に費やされ、疲れ切った私は宿舎の外に出るのも億劫になってしまい、三日目からの自由見学の予定整理と、二日目の他大学の教授による出前講義に対する準備をして終了した。ここで、次回演習を受ける学生に一つ助言をしたいと思う。それは、「京都での行動予定を宿舎に到着し次第、再度確認すべし」ということである。皆さん、各自で京都での行動予定を胸に秘め、心躍らせていることだろう。しかし、予定というのは実際を知らずに立てるものゆえに、現実と相違することが多い。たとえば、京都市内の寺社仏閣に徒歩にて詣でたいと考えていた場合、頭で考えている距離の十倍は距離がある。それゆえに、地下鉄やバスの路線を確認しておいた方がよいだろう。研修中に一日だけ早起きして、同室の二人に内緒で御所まで参詣したのだが、想像以上に遠かった。辿り着けることには辿り着けるのだが、そのあと見学するには、叡山の修行僧が行う苦行に勝るとも劣らない苦痛をとまなう。「僕の足は無事ですか」と謎の質問を道行く人に投げかけたくないのなら、現地到着後に予定の再考をお勧めする。

二日目は、平安女学院大学の井上学教授、立命館大学の谷端郷教授、同・森田耕平教授、同・谷崎友紀教授の四名の先生による出前講義であった。井上、森田両先生には、JR 二条駅界隈の市街化や再開発についてご説明頂いた。谷端先生には、京都の災害史と文化遺産防災について、谷崎先生には、近代から現代までの観光の変化についてご教授頂いた。この二組の先生方から共通してご指導いただいたことは、普段何気なく受け入れているものを一度身を引いて考えてみるということである。なぜそうなるのか、疑ってみることが大学生としての基本姿勢であると説かれた。日頃、学園の先生方にも指導されていることながら、改めて意識していこうと思いを新たにした。講義の内容は、井上先生組では、都市の再開発にしても、企業における企画にしても時代の流れを予測して柔軟に作らないと、良いものはできない。柔軟な対応力を身に着けることが重要である。谷崎先生組では、京都は古くから災害に悩まされてきた。現在では、文化遺産の保護の観点からのより一層、防災システムについて考えなければならなくなったが、未だ十分ではない。等々の内容をご指導いただいた。

### 第三日目以降と終わりに代えて

三日目からは自由行動となり、私は同室の二名のうちの一人と市内を回った。二日目の先生のお話を思い出し、小さなことでも疑問を大切にしようと思って回ったが、京都の魅力に抗しきれず、すぐに観光客のようになってしまった。境内の立て板の説明文を読んで感心したり、景観に感動して写真に収めたりに終始してしまった。聡明な学生諸子は、このような子供じみた失敗は犯そう筈もないが、一応、助言するならば、興奮しても冷静になって、深呼吸をして落ち着き、本来の目的を思い出すことだ。自由行動初日で気付いたことは、京都のバスの運転についてである。京都のバスは、急発進急停車が多いことに気付いた。北海道のバスでは、基本的に発進は緩やかに加速していき、揺れることもあまりない。しかし、京都の市営バスはアナウンスこそ物腰柔らかで、お淑やかだが運転は東男も驚くほどに荒っぽい。右左折時は、立っていると放り出されそうになるのだから、乗っているだけで疲れてしまう。北海道と比べてなぜ、運転が荒いか考えてみたが、雪が降るか降らないかが関係している気がする。それは、車の免許をお持ちの方はお分かりだろうが、雪道において急発進や急停車は事故に直結する。そのため、教習所ではそれらを危険行為として教える。しかし、雪の降らない京都ではそのようなことはない。これが原因ではないか。その他、外国人観光客の寺社仏閣等観光地での鑑賞の対象についてである。寺社仏閣や御所の建物よりも、石庭や御苑などの庭園の風景を写真に収めていた。もちろん、建物に興味を示す人も一定数いたが、目についた多くの方は、庭園や風景を背に自分を写していた。このことから、多くの訪日客は、日本独特の景観を目的にしているのかもしれないと考えた。他には、物価のことがある。北海道と比べて数百円高い。浅ましいことを言うようだが、事実高いので、記念に物を買いたい人や、お土産を考えている人は多めに持っていくと良いだろう。今回の演習は、予定通りはいかなかった。体調を崩して貴重な一日を失ったからだ。しかし、得る物は多かったのだ、これを今後生かしていく積りだ。

## 平安文学ゆかりの地を巡る旅

1 部日本文化学科 2 年 2715130 北市 楠乃栞

私は、今回の研修旅行で、平安文学にゆかりのある場所を巡るという目的で旅をした。特に平安文学の中でも、小倉百人一首や源氏物語にゆかりのある場所を巡った。旅の途中、天候に恵まれない場面もあったが、おおむね計画通りに目的の場所を訪れることができた。このレポートでは、自主研修の3日間で訪れた場所を中心に、振り返ってみたい。

自主研修1日目は、まず初めに京都御苑を訪れた。蛤御門をくぐって御苑の中へ入ったときに、どうして蛤なんて名前が付けられているのだろうかという疑問が浮かんだ。ちょうど門の近くにあった立て札を見てみると、御所の火災のときにこの門が開いたため、それが火にあぶられて開いた蛤に似ていることから付けられた名称だということが書いてあって、なるほどと思った。御苑の中は想像以上に広大で驚いた。一通り御所の中を見て回って、休憩所に入ると、そこに置かれていた複製の屏風に目を引かれた。この屏風にはたくさんの中行事がびっしりと書かれていて、平安時代の貴族にとって毎年の行事は重要なものだったということが窺えた。

次に、御苑のすぐ近くにある盧山寺を訪れた。ここは、紫式部の邸宅跡とされている場所である。このお寺には蓬莱豆といって、紅白で色付けされた砂糖で固めた大豆があり、これを紅白一粒ずつ食べると寿命が延びるとされているものである。寿命が延びるという言葉に興味を惹かれたので、私もこの蓬莱豆を一袋購入した。

そこからしばらくバスに乗って、上賀茂神社へと向かった。ここには、藤原家隆の歌に詠まれているならの小川がある。小川は想像していたより小さなものだったが、草木が多く空気が澄んでいて、気持ちのいい場所だった。その後は下鴨神社にも訪れ、下鴨といえはみたらし団子ということで、みたらし団子を食べに行った。加茂みたらし茶屋というお店のみたらし団子は、甘さ控えめで、噛むとお米の味が口の中に広がってとても美味しかった。あっさりとした味だったので、何本でも食べられそうだった。

2日目の初めは、小野小町ゆかりの地である随心院を訪れた。随心院が所在している山科区小野は、平安時代に小野一族が栄えた場所といわれ、小野小町の実家があった場所だと伝えられている。小野小町は宮中から退いた後に、ここで余生を過ごしたといわれている。随心院はこの実家跡に建てられているため、小野小町にゆかりのある史跡が残されているのだ。ここでは、本堂を拝観して、文化財である狩野派の障子絵を見たり、小野小町が描かれた屏風や歌碑を見たりした。境内を出て、すぐ近くにある小野梅園にも訪れてみたが、時期がずれていたため、残念ながら梅の木はつぼみばかりだった。機会があれば、梅が満開の時期に訪れてみたいと思った。

次に、電車に乗って宇治へ向かった。ここには源氏物語ミュージアムがある。私がここ

で興味を惹かれたのが、「源氏香」というものである。香道の世界には和歌や物語文学を主題として数種類の香木を炷いて、香りの異同を判じる「組香」というものがある。そして、その「源氏香」は代表的な組香のひとつだ。私はそれまで香道そのもの自体をよく知らなかったが、文学作品と香木の香りが結び付けられているという点に魅力を感じたので、機会があれば香道にも挑戦してみたいと思った。

その後は、宇治上神社を訪れた。この神社には、可愛らしいうさぎの形をしたおみくじがある。なぜうさぎなのだろうと疑問に思ったが、宇治はもともと菟道（うじ）と称されていた場所で、うさぎと深い関わりのある地域であるため、いたるところにうさぎのモチーフが散りばめられているそうだ。そして、宇治上神社を訪れた後は、伝統的なお茶の店である福寿園で昼食をとった。ここで飲んだ抹茶は、苦みが少なく、まろやかでとても飲みやすかった。お腹が満たされたところで、次は平等院へ訪れた。私は平等院を実際に見るのは初めてだったので、荘厳な雰囲気のある建物にとっても感動した。そして特に、ミュージアム内で展示されていた雲中供養菩薩像が気に入っている。全部で 52 体ある木の像で、あまり大きいものではないが、細部まで精巧に作られていて、いつまでも眺めていられる美しさだった。

3 日目は、嵐電に乗って嵐山へ訪れた。電車の内装がレトロ調だったのが印象に残っている。嵐山駅に着くと、駅構内には友禅染が用いられたポールが林のようにたくさん並んでいた。駅には足湯もあったが、今回は残念ながら入ることができなかった。また機会があれば入ってみたいと思った。そして、嵐山での最初の目的地である大覚寺へ向かった。ここには日本最古の庭池である大沢池がある。そして、池の周りを歩いていくと、藤原公任の歌に詠まれている名古屋の滝跡を見ることができる。歌が詠まれた時点で滝は枯れていたが、この歌が有名になったことでこの枯滝は名古屋の滝と呼ばれるようになり、後世まで名を残す滝となったのだ。

大覚寺を一通り見て回った後は、バスに乗って時雨殿へと向かった。しかし、バスを降りて渡月橋を渡ったところで、人力車の勧誘を受けて、私はどうしても乗りたくなくなってしまい、当初の予定にはなかったが人力車に乗ることになった。私は人力車に乗るのは初めてだったが、自動車に乗るより視線が高く視界が開けているので、街並みを見渡すことができるとも楽しかった。人力車の車夫さんは、観光名所を歴史的な解説を交えて紹介してくれるので、聞いていて勉強になることばかりだった。

この後訪れた時雨殿は、百人一首に関する展示がされている施設だ。ここでは、着付け体験に挑戦した。これは、平安時代の衣装を実際に着ることができるというもので、私は女性用の衣装を着付けてもらった。想像以上に重たい衣装で、裾も長いので、歩くのが大変だった。衣装を身に付けて記念撮影もできて、楽しい体験だった。

## 京の歴史を巡って —百人一首ゆかりの地を中心に—

1 部日本文化学科 2 年 2715144 佐渡 由以佳

### はじめに

今回の研修旅行において、事前レポートでのテーマは『百人一首を中心とした平安文学ゆかりの地を巡り平安文化を学ぶこと』であったが、研修旅行を通して『百人一首ゆかりの地の歴史』をテーマにしたいと思うようになった。そこで、このレポートでは、『百人一首を中心とした平安文学ゆかりの地を巡り平安文化を学ぶこと』ではなく、『百人一首ゆかりの地の歴史』、また、実際に訪れて感じたことをテーマとする。

百人一首は、京都の至る場所とゆかりがあるため、研修旅行で訪れた場所だけでも全てみることは難しい。そのため、2月28日から3月2日までの自由行動日であった3日間で実際に見学した場所をピックアップしてみたい。また、ゆかりの地の歴史等は『百人一首で京都を歩く』（河田久章、2016）を参考にさせていただいた。

### 藤原定家の嵯峨山荘

嵯峨は、平安前期には嵯峨天皇の離宮（現在の大覚寺）が造営され、多くの貴族や歌人たちが平安京から千代の古道といわれた現在の新丸太町から山越街道、一条通りの広沢池を経て、観月や詠歌を楽しみに訪れていた。山荘も此処彼処にあり、百人一首の選者のである藤原定家も、山荘を所有し度々訪れ、病を癒したり浩然の気を養い歌作にも励んでいたのである。現在、嵯峨ではこの山荘のあった場所が三カ所目され、一つは「厭離庵（えんりあん）」、二つ目は「二尊院」、三つ目は「常寂光寺」となっている。

二つ目の「二尊院」に私は訪れた。二尊院は、本尊に釈迦如来と阿弥陀如来の二尊を祀るため、「二尊院」といわれる。平安初期、嵯峨天皇の勅願で慈覚大師円仁が承和年間に建立。応仁・文明の乱で焼失したが、1500年代に三条西実隆によって復興された。背後の小倉山中腹にある時雨亭跡は定家が百人一首を選定したところか、色紙を染筆したところかは定かではない。百人一首の多様な世界を体感できるミュージアムである小倉百人一首殿堂「時雨殿」は、この時雨亭にちなんでいる。

天皇の離宮であったため、もっと行きやすい場所にあるかと思っていたが、嵐山の竹林を抜けた山奥にあった。本堂にやっと着いたと思ったのもつかの間であった。元々時雨亭跡に行きたいと思っていたため、本堂のある場所からさらに急で長い階段を上った。時雨亭に着き、そこから眺める景色は京の町が一望できて素晴らしかった。山の中にあることで、どこか神聖であり心が引き締まるようにも、心も落ち着くようにも感じた。定家も、この場所でそのように感じながら百人一首を選んだのかと思うと、百人一首は名歌中の名歌が選ばれたのであると感銘を受けた。

## 上賀茂神社と下鴨神社

上賀茂神社と下鴨神社は、天武天皇の白鳳五年(671)頃の造営で合わせて賀茂社という。

上賀茂神社は賀茂別雷神社と称し、祭神・賀茂別雷神を祀る。本殿は東西に立ち(西が権殿)共に流造として国宝。1994年には境内全域が世界遺産に登録されている。一の鳥居をくぐり二の鳥居に至るまで4月中旬に見ごろとなる垂れ桜の東方にあるのが、通称「ならの小川」と言われるもの。百人一首にも詠まれたものとされ、藤原家隆の「風そよぐならの小川の夕ぐれは みそぎぞ夏のしるしなりける」という歌の歌碑がある。しかし、歌そのものは屏風歌で実景ではなく、三の鳥居の東にある奈良神社の前を流れる御手洗川を指しており、ならの小川は実存しない。

上賀茂神社を訪れた際、特別参拝を受けて様々なお話を聞かせていただいた。現在、上賀茂神社は式年遷宮中で、21年一度行われ、御神体を除く全ての建物を新しくするという遷宮方法だそう。有名な伊勢神宮の宮地を改めるような遷宮方法ではない。また、社殿が国宝や重要文化財に指定されてからは、建物を新しくするのではなく、傷んでいる箇所を修復という形をとっている。私が訪れた時はちょうど檜皮葺屋根の葺き替えを行われていた。特別参拝時に首に掛けた浄掛には檜皮の古材が含まれていたそう。今ではマイナーになってしまっている賀茂別雷神だが、日本が終戦を迎えるまでは伊勢に次ぐ神様とし有名であったらしい。特別参拝の話の内容は、なかなかネットなどでみれるようなものではなく興味深いものであった。

下鴨神社は賀茂御祖神社と称し、上賀茂神社の祭神・賀茂別雷の母、玉依媛命とその父である建角身命を祀るがゆえに御祖という。上賀茂神社・下鴨神社のどちらが優先する優先するものでないとしている。下鴨神社の境内は「糺の森」と呼ばれ、広さは36,000坪に及び、全体が国の史跡に指定され、世界遺産に登録されている。古代の山背原野の名残をとどめる、数々の社殿をも配し文化財と自然が調和されている。

下鴨神社では、時間の関係で特別参拝は受けることができなかった。糺の森が光源氏の歌に取り入れられてることから源氏物語ゆかりの地としても有名であった。また、君が代の元となった『古今和歌集』歌で詠まれている「さざれ石」や御手洗川など由来や元となったものが多かった。百人一首というよりは源氏物語や古代日本にゆかりがあるように思った。

## おわりに

まず、事前に決めたテーマと変わってしまったことについて、自分のテーマ設定が甘かったと不甲斐なく思う。つぎに、頁数の関係で紹介できた場所が二つだけであったのが非常に残念だ。様々な土地を自分の足で見て聞いたので余計にそう思う。そして、百人一首というテーマだけでも回り切れない数のゆかりの地があり悔しかった。他にも百人一首とは関係ないが観光スポットが沢山あり、観光でも京都を回ってみたいとも感じた。京都が長きに渡り観光都市であるのは「また来なくては」と感じさせるところにあるのだろう。

## 日本文化特別演習を終えて

1 部日本文化学科 2 年 2715152 空 健太

この 2 月 26 日～3 月 3 日までの 6 日間にわたり行われた研修において、私は主に「宗教的美を学ぶ」ということと「五感を使って散策する」ということを目的に京都散策を行った。その結果、自らの目肌で感じ取りながら回ったため、この研修の目的はもちろん、日本文化を学んでいくということに関してとても力になった。ここからは最終日の報告会にて説明が不十分であった点を含め、6 日間で回った神社をいくつか述べる。

### <教王護国寺 一東寺一>

またの名を東寺と呼ぶ教王護国寺は、1200 年前に平安遷都とともに建てられた現在唯一残る平安京の遺構であり、東寺真言宗の総本山である。平安京の鎮護のために羅城門の東に建てられたことが歴史の始まりであり、その後は嵯峨天皇より真言宗の宗祖である空海に下賜されたことによって真言密教の根本道場にもなった。世に広まったのは弥法大師信仰が広まったことにあり、火災で焼失したのちも豊臣・徳川にて再興されるのであった。

まずは弥法大師が創建着手した、東寺の象徴である五重塔であるが、やはりその外観は圧倒されるほどの高さを誇るものであった。日本一の高さを誇る仏塔なのだが、やはり「高さ」を意識するということは、権威を誇るということに加えて、総本山として遠くの人にも拝めるようにと高く建設されたのではないかと思う。また通常非公開なのだが五重塔の 1 階内部が期間限定で特別公開されていたため、そちらも拝観してきた。木材でできた外観に対し、中は金箔で覆われた仏像が 12 体中心柱を囲むように並んでいた。さらに壁には真言八祖が鮮やかに描かれていた。

最も印象的であったのは、五重塔を出て少し歩いたところにある講堂である。通常金堂と合わせて作られるのが講堂なため、私は失礼ながら期待をあまりせずに行ったのだが、入った瞬間心拍数が急上昇するほどに驚嘆した。そこには先ほどの五重塔の大きさを忘れるくらい大きく感じる仏像が同じ方向を向いて何体も置かれていた。その前を通るたび自分が大仏に睨まれている感覚に陥り、いつもより背筋がピンと張るほどであった。

### <西本願寺・東本願寺>

親鸞の、「仏に成るためには修業はいらず、ただ感謝することが必要だ」と説いた他力本願思想の本願寺を拝観した。そもそもなぜ東西に分裂しているのか、その比較も目的である。まず本願寺派の歴史は古くからあるので、ここでは省略する。簡単にいうと、石山戦争に敗れ、各地に移転を数回繰り返し、豊臣秀吉の計画により立てられたのが西本願寺で、東本願寺はその内部分裂により、徳川家康が建てたということである。したがって教義はもとより、阿弥陀堂や御影堂などのつくりも同じように感じ取れた。もちろん仏壇や仏具の少しの違いはあったものの、大きな違いといえば建てた人物の違いなのだと思う。しかし東本願寺は歴史的な紹介する看板やミュージアムが建設されていて、西本願寺は大きなカフェが建

設されていて、そこはビジネス的に分けているのだろうと思った。

#### <妙心寺>

次は、日本にある臨済宗寺院 6000 のうち半数を占める臨済宗妙心寺派の大本山である妙心寺の中の退蔵院の庭園を拝観した。そもそも「退蔵」とは、「価値のあるものをしまっておく」という意味があり、人に知られないように良い行いをすることを積み重ね、外に知られないように布教していくことを示している。この意味合いになんとなく私自身共感を呼ぶものがあり、惹きつけられた。しかし残念ながら本堂には入ることができず、それにより「元信の庭」と呼ばれる史跡名勝も脇の方からしか見ることができなかつたため、堪能することはできなかつた。

本堂と庭園の一つを見ることができなかつたので途方に暮れながら進んでいると「陰陽の庭」が現れた。ここは左に白い砂が敷き詰められた陽の庭があり、右には灰色の砂が敷かれた陰の庭が広がる、枯山水の庭園であった。陽と陰が白と灰で対比されており、物事や人間の二面性を表しているようだった。また、陰の庭の岩が、陽の庭の岩の数より若干多かつたのだ。ここには説明文のついた看板がなかつたため、これは私なりの解釈だが、やはり生き抜くうえで嫌なこと、つまりマイナスな出来事の方が多く人にとってやはり希望となるのはプラスの感情だろう。マイナスとプラスの比率というものは私たちには知りえないが、その 2 つの比率はそこまで変わらないのであるということ岩の数を用いて表しているのではないだろうか。

#### <龍安寺>

こちらも臨済宗妙心寺派の禅寺であり、枯山水の石庭を拝観しに行った。15 個の石があるはずなのだが、やはりどの角度から見ても 1 つが見えないような造りになっていて面白かつた。また白色の砂で敷き詰められていたため、ずっと見ていると目がチカチカしたり、白い砂の影響なのかはわからないが、石庭の中央が山なりになっているように感じたりした。これは人間の目の錯覚なのか、本当に山なりになっているのか、またはただの勘違いなのかは謎のままで終わってしまった。

#### <最後に>

私はまとめるという作業が苦手なため、この濃厚な 6 日間を 2 枚の A4 用紙に凝縮するのは非常に難しく、現にまとまらないレポートとなってしまった。逆の意味で考えると大学生活において 6 日間でこのような濃厚な経験が積めたことは私にとって貴重であり、確実に今後の人生で役に立つだろう。平安神宮の神苑や京都御所、伏見稲荷大社や北野天満宮などどれも私にとって初見な名地であり、各地でさまざまなものを感じ取れた。それだけではなく、京都の車の運転の荒さ、クラクションの多さ、それと対比するかのよう街の人々の温かさにも触れることができた。今回得ることができた経験を生かすとともに、6 日間では回れなかつた地域もあつたので、いつか訪れてみたい。

## 観光都市としての京都

1 部日本文化学科 2 年 2715154 高橋 優花

京都は、アメリカの有名な旅行雑誌「Travel + Leisure」の世界人気観光都市ランキングで、2014 年、2015 年と 2 年連続で 1 位を獲得しており、2016 年も上位にランクインしている。ここからわかるように、京都は世界が認める観光都市なのである。そこで私は、「観光都市としての京都」というテーマのもと、京都を散策した。散策してみると、そこには観光都市としての様々な工夫や魅力、課題を発見することができた。

自主研修では祇園周辺を散策し、清水寺や地主神社、知恩院、八坂神社、平安神宮など様々なスポットを巡った。事前調査によると、京都市はその優れた景観を守り、育てながら未来へと引き継いでいくために、平成 19 年に「新景観政策」を実施していた。そこでは建物の高さやデザイン、広告物などが厳しい基準によって定められた。そのおかげで京都を散策していると、茶色の自動販売機や消火栓、瓦屋根のコンビニ、木材で囲まれている換気扇など、京都の景観に合わせた数々のものを発見することができた。同時に、木材の建物と鉄筋コンクリートの建物が混在して立ち並んでいる街並みや、人力車とタクシーが行き交う風景も特徴的だった。京都は私が思っている以上に、昔ながらのものと現代的なものが混在している町だった。

祇園散策の際には着物体験をしたが、お店の人に聞くと祇園周辺だけで約 65 件もの着物レンタル店があるそうだ。そのレンタル店では学割プランやカップルコースなど、多様なプランやコースを選ぶことができ、幅広い層の観光客が着物体験を楽しめる工夫が施されていた。店員さんは祇園内のほかのお店もたくさん紹介してくれて、帰り際には提携しているパンケーキ屋さんの割引券をいただいた。このように祇園では、周辺のお店同士が協力し合っていて、祇園が一体となって観光地としての地域づくりや、町の活性化を行っているという印象を強く受けた。また着物体験は、体験する側が楽しめることはもちろんだが、着物を着た人が京の町を行き交うことによって、観光地もまた、より京都らしい雰囲気演出することができるというメリットがあると感じた。実際に私たちの班が着物を着て京都散策をした際は、海外からの観光客の方に写真を撮られたり、一緒に写真撮影を頼まれたりした。この意味で着物体験は、観光客にとっても観光地にとっても、お互いにメリットのある体験であるという見方をすることができる。

また私はこの研修で、京都では京カレーうどん、わらび餅、京料理、レモンラーメン、きな粉パフェ、お蕎麦屋さんなど、大阪では、お好み焼き、焼きそば、たこ焼き、明石焼き、串カツなど、たくさんのお店に行った。それらのほとんどは行き当たりばったりではなく、Twitter や Instagram などの SNS で人気があり、あらかじめ目星をつけていたお店である。特に、祇園四条駅を降りてすぐのところにあるラーメン屋さん「祇園麵処むらじ」はそれを代表する一例である。私は数あるメニューの中でも、鶏白湯スープにレモンが浸

されたラーメン「レモンラーメン」を食べた。一風変わったラーメンだが、私が想像していた味とは違い、ほのかなレモンの香りがアクセントとなっていてとても美味しくいただいた。他にも、実際に散策していると、看板の横に「食べログで話題のお店！」と書いてあるお店や、「SNSに載せたら煮卵サービス！」など、SNSをうまく活用しているお店も多くあった。SNSの普及によって観光客の動きや行くお店も変化し、それに伴ってお店側も、呼び込みや宣伝の仕方を変化させているのだ。

このことは食べ物屋さんに限ったことではない。今まで観光スポットとしてはそこまで有名ではなかった小さなお寺が、「かわいい写真の撮れるフォトスポット」として主にInstagramで広まったことで、行ってみると行列ができていたところがあった。東山にある「八坂庚申堂」である。ここには、カラフルで変わった形のお守りが境内にたくさん奉納されている。ピンクや黄色、青など様々な色のお守りがお寺の壁につるさされていて、その壁をバックにすると鮮やかな写真を撮ることが出来た。撮影しているのは私たちと同じ世代の、若い女性の観光客が圧倒的に多かった。また「八坂庚申堂」は、地元の方からも親しまれるお寺で、年に6回の「庚申待ち」と呼ばれる行事も行われるそうだ。このように、時代や社会の変化に合わせて観光地は変化していくことを知り、そして観光客のニーズに答えるための観光地の工夫や、努力も実感することができた。それは、京都に対して「昔ながら“を守り続ける町”という固定的なイメージを持っていた私にとって、とても新鮮に感じる事だった。

しかし京都を歩いていると、道には頻りにゴミやゴミ袋が落ちているのが目に入った。さらに、有名な観光スポットは観光客であふれかえっていて、公共交通機関もとても混雑していた。また、祇園周辺にはたくさんの警察や警備員がいた。京都が観光都市としてあり続けるためには、やはり京都らしい景観を守り続けることが最重要だが、観光客の増加と、それに伴う警備によって、かえって景観を損なってしまっているのではないかと感じた。景観を守りながら、同時にそれを汚しているような印象を受けた。この問題は京都だけに限らないのかもしれないが、観光都市として考えていかなければならない課題であると感じた。

その他にも私は研修旅行全体を通して、若い世代の活躍にとっても刺激を受けた。特に英語や中国語など、語学力の面で大きな力となっている若者をあらゆる店頭で見かけ、学んだ言葉が実際に生きる現場を目の当たりにした。また、同じ観光都市として、京都と札幌の違いもたくさんあり、京都を見習うべきところだらけだったと感じた。これから札幌の街づくりを担っていく世代として、自分自身に不足していることや必要な力、そして札幌市をより活気のある、人がたくさん行き交う観光都市にするために、大切なことや必要なことが自分の中で前より圧倒的に明確になった。6日間たくさんの発見があり、この旅行で得られた収穫は大きい。多くの事を体感することで自分自身の成長にもつながり、さらに存分に観光や食を楽しむことができた、私にとってとても充実した研修旅行となった。

## 京都研修にあたって

1 部人文文化学科 2 年 2715161 手鹿 玲那

二月二十六日から三月三日までの六日間にわたって、京都研修を行った。今回のレポートでは、印象に残ったことをいくつか時間軸にそって記していきたいと思う。

まず初日の二月二十六日は移動日となっていた。夕方から夜にかけてが自由時間だったので、宿泊施設からほど近い平安神宮へとグループで足を運んだ。朱塗りの大きな鳥居や門、緻密な細工が施された本殿が美しかった。また平安神宮付近の茶屋で、抹茶わらび餅をいただいた。甘すぎず苦すぎずな抹茶の味わいと、ふわふわでもちもちな独特の食感がとても印象に残った。夕食後には、友人の買い物についていき京都を散策した。三条大橋を通ったり、夜の鴨川を眺めたり、地下鉄に乗ったりと個人的には面白い経験をした。夜でも人が多く、観光客はもちろん地元の人と思われる人も多かった。

二日目は先生方の引率のもとでの研修だった。特に午後からの清水寺や知恩院などを回って説明を受けた内容は興味深かった。清水寺の飛び落ちや知恩院の七不思議、京都の災害についてなど多岐にわたる内容は、知らないことばかりだった。事前にその場所を歩いてから、または歩きながら説明されたので理解が深まったし、一方でこの日学んだことをどれくらいの人知っているのかということも考えた。

三日目は自主研修の一日目だった。まず最初に京都御苑を見学した。無料で京都御所を見学することができたので見学してきたのだが、派手に見せるべき場所となるべく隠すべき場所のメリハリがされていたと感じた。広大な敷地にいくつもの建物が広々と作られていた。魅せるためと思われる開けた庭や、たった一つのことを行うためだけに設けられた場所などもあり、昔の土地の使い方が少しだけ不思議に感じた。次に伏見稲荷大社を参拝した。千本鳥居で有名な伏見稲荷大社はこの日も多くの人でにぎわっていた。時間の関係上、おもかる石などのある奥社奉拝所までしか行くことができなかったが、今度は時間に余裕を持って参拝し、山の上まで登ってみたいと思った。絵馬がたくさんかけられていたり、お守りを買っていく人がずいぶん多かったのを見て、敷地が広いこともあって本当にたくさんの方が訪れているのだなと思った。蠟燭を立てて参拝する場所には数は少ないものの蠟燭が灯されており、信心深い参拝客がいることを感じた。次に向かったのは、血天井があることで有名な養源院である。血天井、というものを知らなかった私は興味をそそられて参拝することにした。養源院の血天井は伏見城の戦いで自害した人たちを供養するために、城の一番低い場所にあった床を寺の一番高い天井に上げたものだという。敷地面積自体はこぢんまりとしたものだったが、本殿の中を詳しく説明してくれて、期待以上に大満足だった。このようにさほど有名でない場所にふとしたきっかけで興味を持った場所に立ち寄ってみるのも、面白いのだなと思った。

自主研修二日目は、午前中に貴船神社と鞍馬寺に赴いた。バスと電車を使って、まずは貴

船神社に向かった。貴船神社は山にあり、電車を降りてから川沿いに山を登ったのだが、当然のことながらずっと上り坂でずいぶんきつかった。だが綺麗な川を横目に見ながらだったので、涼しいどころか寒いくらいで、水場の好きな私にとってはそれなりに楽しかった。貴船神社の門についてから参拝道でさらに階段を上り、やっと本殿にたどり着く。あまり人がいなかったため、よく紹介に用いられる灯籠を綺麗に見ることができた。水を持ち帰ることができたり、水占いをすることができたりと水に関するものが多くあり、興味深かった。それから鞍馬寺のほうに移動したのだが、鞍馬山を徒歩で越えていくことになった。ずっと足場の悪い急こう配やあまり整備のされていないと思われる階段が続き、先ほどの上り坂の比ではなかった。杖が欲しくなるほどきつい上り坂だったが、鬱蒼とした山の中で大自然に囲まれているのはとても気分がよかった。あれほど高くに見えた木の先端が、とても近くに見えた時は達成感を覚えた。無事に鞍馬山を越え、鞍馬寺に到着することができたが、次に登るならば鞍馬寺から貴船神社に抜けると楽だと思った。夜も近くなってから、錦市場に向かった。時間がいささか遅かったようで、シャッターが下りている店がいくつかあったがそれでも十分に楽しめた。漬物が樽に積んであったり、はちみつや酢、ゴマの専門店、京飴のお店などが軒を連ねていた。今度はすべての店が開いている時間に行ってみたいと思う。

自主研修最終日は、午後に妖怪ストリートと呼ばれる商店街を見学した。妖怪ストリートとは百鬼夜行が行われたとされている一条通にある商店街が、妖怪で町おこしを行っているものである。店の前に手作りの妖怪が佇んでいたり、妖怪グッズを売っている店があったり、妖怪コロッケ、妖怪ラーメンといったように色合いが不可思議な食べ物が売っている。また資料館があったり、アプリケーションが開発されていたりと、精力的に取り組んでいる。だが、私が妖怪ストリートを訪れた時には、人がほとんどいなかった。車や郵便局のバイクはよく通っていたが、観光客と見られるお客さんはほとんど見られなかったのである。一見するとただの商店街だった。夏にはイベントを行ったり、モノノケ市と呼ばれるイベントを行ったりしており、そのときは賑わいを見せると聞いた。行くならば、イベントに合わせていくと楽しめるかもしれない。平時からもう少し人を呼び込めることを祈るばかりである。その後、清明神社に向かった。阿倍清明に関わりがあることと五芒星があることは知っていたが、想像していたよりもおおくモチーフに使われていた。鳥居はもちろん、お札や門にいたるまで。五芒星や陰陽のお土産も多く、御朱印帳も藍色地に金で五芒星の箔押しがされていた。厄除桃や楠などが敷地内にあり、由来が興味深かった。

今回の京都研修では、修学旅行などでは回らないような場所を多く見学できたと思う。それぞれについて歴史があり、いわれがあり、そしてこれからの課題もあるように感じた。向こうから見れば一観光客だが、私としては多くのことを学び、持ち帰ることができた。次回京都旅行に行った際には、今回行くことができなかつた嵐山方面などを訪れてみたいと思う。

## 京の冬を巡る

1 部日本文化学科 2 年 2715162 寺澤 万里菜

日本文化研修は 2 月 26 日～3 月 3 日、5 泊 6 日の旅である。本レポートでは 2 月 28 日～3 月 2 日の自主研修について記録する。

### <自主研修 1 日目>

自主研修 1 日目には、京都御所から拝観し伏見稲荷大社へ、その後は個人行動とし伏見桃山へ行き、日本酒と水について学びに向かった。

京都御所では 1 時間の拝観を予定していたが、予想以上に広く、細部までは見ることが出来なかった。また、京都御所の周囲、乃至は公園部分を京都御苑とよぶが、この京都御苑にはジョギングしている方をよく見かけた。このことから、観光のための場のみではないことを初めて知った。そして、京都御所の鬼門を護る猿も見ることが出来た。

次に伏見稲荷大社へ向かった。伏見稲荷大社は千本鳥居で有名であり、商売繁盛、五穀豊穡の神様として厚い信仰を集めている。境内へ進むと様々な大きさの鳥居があり、朱色の鳥居と青空が相まって美しかった。そこで、なぜ鳥居がこれほどまでにあるのか気になり巫女さんに聞くと願いが通った御礼の意味から鳥居を奉納する習慣が広がった為と教えてくれた。

その後は個人行動となり私は伏見桃山駅へ向かい、通称「日本酒のテーマパーク」なるものがあるそうなので向かった。まずは「月桂冠大倉記念館」へ行き、伏見はなぜ日本酒が盛んになったのか学んだ。それは、伏見は昔、「伏水」と書かれたほど良質の地下水に恵まれた土地であることで、この地下水は適度なミネラルを含み、これにより、きめ細かくふくらみのある伏見の清酒を育ててきたという。実際に地下水を飲んでみましたが、においもなく自然と沢山飲んでしまうような、飲みやすい水だと感じた。訪れたのは平日の昼であったが、利き酒が出来るカフェもあり、行ってみた。伏見夢百姓という所で、すっかりしている豊祝と、お酒であるのに香りが良い桃の滴（芭蕉の句が由来）と辛口だがどこか甘めな慶長を利き酒した。3 種とも辛口であるがあっさり飲みやすい。水が良質であることの現れなのだろう。

夕食にて北海道の牡蠣と、本州で出される牡蠣を比較しようと食べたことにより一晩中嘔吐するというハプニングが起きたが、朝には動けるようになっていた。本州の牡蠣は北海道と値段は同じでも 2 回りほど小さく、味は薄いなと感じた。

### <自主研修 2 日目>

前日は牡蠣にあたったが、胃薬を片手に鞍馬・貴船エリアに向かった。まずは、電車で向かい、30 分ほど歩き貴船神社に到着した。貴船神社は水の神様が祀られていることもあり、道中みかけた川はとても透明度があった。水占みくじは、貴船神社特有で、水の上に浮かべると文字がでる。驚いたことは QR コードで読み取ることにより、多言語に対応し

ているという点である。これは私の知る限り、貴船神社のみ行っていた。

貴船神社の後は鞍馬山を登山し、鞍馬寺に向かった。鞍馬天狗で有名なこの地は、自然がとても美しく、あの木のでっぺんに天狗がいそうだと何度も思った。京都の寺社仏閣は賑わっているイメージがあるが、鞍馬寺は閑静で本堂は暗く、粛々としていた。鞍馬駅には鞍馬天狗のオブジェがあるが、現在は雪で鼻が折れてしまったため絆創膏が貼られ、治療中と書かれていた。日本人の遊び心が垣間見られ、思わず写真を撮ってしまった。

鞍馬寺を後にし、下賀茂神社に向かった。下賀茂神社は世界遺産としても有名で、国家国民の安穏と世界平和を祈禱する守護神であり、そして人々の暮らしを守る神様である。つまり、京都民ではなくとも恩恵を受けられると云いたいのではないかと思った。下賀茂神社といえば楼門前であるが、現実で見る楼門は想像以上に大きく、圧巻であった。境内では梅の花が咲いており、北海道の感覚で言うならば有り得ないものであった。少し咲いているという程度ではなく、3分の2ほど咲いていたのではないかと思う。

<自主研修3日目>

初めに晴明神社に向かった。天候は生憎の雨であったが、3日目にしてシンプルながらも格好良いためという理由で御朱印帳を購入し、11月の紅葉時期に御朱印帳巡りをしようと決めた。晴明神社には、天気が雨ということもあって、どこか妖しい雰囲気があった。境内には厄除桃がある。なぜ桃なのかといえば、立て看板によると桃には陰陽道にて魔除厄除の果物とされているためであり、古事記や日本書紀、桃太郎伝説にも登場している。そして、その足で妖怪ストリートに向かってみた。着いてみると10月のお祭りの時期以外ではお店を開けていないようで、閑散としていた。そのなかでも、妖怪ラーメンというものがあるお店を見つけたため入ってみた。注文してみると。スープは黒く、麺は薄紫、上から真っ赤な粉末がかけられており、妖怪ストリートに訪れてから初めて妖怪感を味わうことが出来た。しかし、味はあっさりした醤油ラーメンで、実はスープに竹炭、麺はクチナシ由来のもの、真っ赤な粉末はパプリカであるため、味は全く魍魎魍魎としてはいかなかったもので、誰にでも勧められるラーメンであった。

妖怪ストリートを後にし、嵐山へ向かった。嵐山に本格舞妓体験処「心」というお店にて花魁体験が出来るためである。他にも舞妓体験や着物レンタル、男性向けに新選組等も出来るようで、日本文化を体感するにおいて合致すると考える。プランはヘアセット、メイク、打掛選び、着物選び、撮影となる。ヘアセットの際に、一番人気は日本髪である理由を伺うと、髪型を大きくすることで、小顔効果があるそう。これは昔の日本人でも同じだったりするのでしょうか。今後の課題です。また、遊女や舞妓のメイクは眉と目尻、唇を朱く、肌には白粉というものが一般的であるそう。現代の女性でも目尻や唇を赤くするメイクは流行しているので日本人に合ったメイクであることが考えられる。花魁はファッションリーダー的存在であったようなので、現代の美的感覚から考えても美しいと思えることに感銘を受けざるをえない。

研修旅行によって関心が高まり、視野が広がったと考える。今後にも活用していきたい。

## 新選組の活躍を辿る

1 部日本文化学科 2 年 2715163 土肥 京夏

私は今回、新撰組の活躍を辿るというテーマで京都の新選組にまつわる場所を巡ってきた。最初に西本願寺の太鼓楼を訪れた。池田屋騒動(1864 年)以降、新選組は隊士が増えて壬生の屯所が手狭になったために 1865 年に屯所を壬生から本願寺に移した。当時は北集会所と太鼓楼を使用しており、境内で大砲を轟かせたり、実弾射撃を行ったりしていたので本願寺からは迷惑がられていたという。現在の本願寺に新撰組の足跡が見られるのは太鼓楼だけであるが本願寺の建物としっかり区分してあるため、門と建物を外から見ることしか出来ない。

次に島原を訪れ、島原大門や輪違屋の外観を見学した。輪違屋は太夫や芸妓さんを抱えていた由緒ある置屋である。現在でもお茶屋として営業しているようで、観覧謝絶の看板が立てられている。近くの角屋おもてなしの美術館は江戸期の饗宴・もてなしの文化の場である揚屋建築の唯一の遺構である。広い座敷で庭の臥龍松を見ながら、ガイドさんがこの建物について説明してくれた。揚屋とは 1 階は台所と住居からなり、お客さんを 2 階の座敷へあげることから揚屋と呼ばれているそうだ。揚屋の条件は大きくて広い台所を有していること、広い座敷を有していること、そしてその広い座敷に面して広い庭を有していること、庭に茶室を有していることの 4 つである。ガイドさんは「よく江戸吉原の遊郭と間違えられる」とおっしゃっていたが、そもそも揚屋は太夫や芸妓さんを抱えずに、置屋から派遣してもらって、お客様に歌舞音曲の遊宴を楽しんでもらうことを目的として建てられたものだという。島原には歌舞練場がいくつか備えてあることから「花街」と呼ばれ、入り口は東西で 2 つ設けられており土塀や堀はなく、老若男女の誰でも出入りが出来たそうだ。それに対して、吉原遊郭は自ら娼婦を抱えて歓楽のみの営業を行う。また歌舞練場や大きな座敷、庭、茶室は一切持たず、ほとんどが小部屋のみで、塀や堀を設けて人の出入りを厳しく管理していた。ガイドさんは「お母さんと宴会できるのも揚屋の特徴」とおっしゃっていて、数々の偉人の親孝行の場になった理由もよく分かった。

新選組と角屋の繋がりとしては、壬生の屯所から近いので隊士たちがよく通っていたことが挙げられる。初代局長の芹沢鴨暗殺に使われたともいうから驚きだ。松平容保に暗殺命令を下された局長の近藤は芹沢を酔わせて暗殺するために角屋で大宴会を催したそうだ。また当時はツケ払い(掛け売り)が主流であったが、池田屋騒動で隊士の人数が増加した新撰組は財政的に厳しくなり、角屋に今までの未払い金を全額返済したうえで掛け売りを禁止させ、隊士たちに現金で払わせるようにした。その後、角屋に掛け売りを無理強いしたが断られた隊士が、腹いせに切りかかった際の柱の傷と掛売禁止の古文書は現存している。角屋は勤皇派の久坂玄瑞や西郷隆盛、坂本龍馬などの密議にも使われ、長州奇兵隊も角屋に通ったと記されている『角屋の主人日記』という古文書が保存してあった。よく敷居の高いお店

へ行くと「一見さんお断わり」と言われることがあるという。これはお店側が最高のおもてなしをしたいと考え、お花・太夫・お料理・お皿・お部屋(襖や棚の飾りなど)・掛け軸などすべてにおいて失礼がないように前もって知るため、このような制度が生まれたそうだ。このことから、角屋は新撰組やその敵の長州奇兵隊がお店に集っても鉢合わせすることないように帳簿もお部屋も全てに気を使っていたのだろうと考えられる。

次は壬生寺を訪れた。ここは新撰組の兵法調練場に使われ、武芸や大砲の訓練が行われたとされている。また 1 番組組長の沖田が非番の日に近所の子どもとよく遊んだとされる場所だ。今では近藤の遺髪が収められ、芹沢や隊士数名らが眠っている墓がある。壬生寺から北に 100m 程歩くと壬生の屯所跡が見えてくる。ここは角屋で大宴会をした後に芹沢が暗殺された場所だ。屯所内の鴨居には刀傷が残されており、事件の凄惨さを物語っている。文献などで事件のことは知っていたが、実際に暗殺が行われた部屋でガイドさんのお話を聞くと当時の殺気が蘇ってくるようだった。壬生屯所は京町屋と武家屋敷の造りが合わさっていて、天井が低いのは刀を振り上げられないようにするためだという。壬生屯所は江戸に帰る浪士組から京都に残った者で新選組が結成されたときに宿所として八木家が貸していたもので、隊士が増えた後は近くの前川邸などにも宿所を当てていた。現在前川邸は一般のお宅のため非公開になっているが、長屋門の入り口には看板やパンフレットが置いてあった。

最後に訪れたのは副長の山南敬介のお墓がある光縁寺だ。見学者・観光客一切お断わりの看板が門に掲げてあり、潜り戸を通らなければならず一見入りづらく感じるが、中に入ってみると住職さんが出てきて新選組と光縁寺の関係についてテンポよくたくさんお話してくれる。山南や複数の隊士のお墓、沖田の縁者のお墓が一般墓地の奥にあり、大切にされてきたのが分かる。お墓は過去 100 年ほど放置されてきたらしく、そのせいもあってちゃんと手を合わせてくれる人にしか公開していないという。住職さんのお話によると光縁寺の瓦と山南家の家紋がたまたま一緒に、住職さんと山南さんは歳も近かったためかすぐに仲良しになったそうだ。新撰組は最初、隊士が亡くなると壬生の共営墓地に入れさせてもらっていたが周囲の村民に嫌がられたため、山南さんは光縁寺の住職さんに頼んで隊士の供養をしてもらうことになったという。本堂には山南さんの位牌があり、拝ませてもらった。山南さんのお葬式の時に沖田が座ったであろう席に座らせてもらい、「南無阿弥陀仏」は量り知れない命のなかに生かされていることへの感謝ということを教えていただいた。

今回の自主研修では、新選組が生きた土地を巡り、当時隊士たちが見た景色や空気を実際に自分で感じられて感動した。新選組というテーマの他に一期一会の出会いを大切に学習してきた。おばあさんから楊枝入れをいただいたり、ガイドさんからとても丁寧な説明を受けたり、写真をもったり、近くの展示会の割引券をもったりとたくさんのお会いがあった。とても親切で優しくて、一期一会とはよく言うが 1 度会ったきりでは切れない縁のように思えた。京都が観光客に「また来たい！」と思われている理由は、建物の魅力だけではなく観光客への対応の仕方もあると考えられる。私も例外ではなく「是非また来たい！」と思ってしまった。

# 百人一首と京都 —京の風土と百人一首かるた—

1部 日本文化学科 2年 2715169 西島 享恵

## はじめに

今回の京都研修で私がテーマとして設定したのは、百人一首の和歌の中で詠まれている自然を直接見ることで学んでくることである。実際に現地では今日の街を歩くことで気候や空気感を感じ、またさまざまな場所に赴くことで歌の背景や当時の文化を学ぶことができた。本稿では3日間の自由行動を通して感じた京都の町の気候や自然、平安時代の文化、百人一首かるた、実際に百人一首に縁のある場所の感想などを中心に論述していこうと思う。

## 京都の風土

自由行動一つひとつを振り返る前に京都にいる間を通して感じていた京都の風土を記述しておく。

まず気候についてであるが、天候の変わりやすさが札幌とは違うものであった。盆地という地形のため曇ってきたと思ったらすぐに雨が降ってきた。百人一首の中でも雨、雪、風は多く登場する言葉である。じわじわと移りゆく自然よりも切り替わるような自然のほうが印象に残り、歌として詠んでみようという気分になる当時の貴族の気持ちもわかるような気がした。

次に京都に住む人々についてである。京都は平安時代より都として栄えていたために昔から多くの人が旅や仕事のために訪れていたと、2日目の清水寺で立命館大学の谷崎友紀先生より解説があった。そのため手に地図やスマートフォンを持って街歩きをしていると、「〇〇に行きたいんですか？それだったらこちらですよ」と向こう方から声をかけ、案内をしてくれるという状況がよくあった。旅行者へのおもてなしの精神が息づいていると感じ、もう一度行きたいという気持ちにする魅力のある場所である。

## 小倉百人一首殿堂 時雨殿

自由行動のはじめに嵐山にある時雨殿を見学した。ここは小倉百人一首の資料を展示し、ジオラマやパネルなど視覚的なものも多くある施設である。常設展のほかに企画展示では百人一首のかるたに関する展示を行っていた。常設展では百首の読み下し文や歌仙人形、天徳内裏歌合の再現などがあった。当時の装束や建築様式を分かりやすく理解することができた。

企画展示ではカルタに関する催しが行われていた。百人一首すごろくや綺麗な絵や木札のカルタも展示されていた。私はお正月に百人一首を親戚一同と行う家庭に育ったため、私にとって百人一首はカルタのイメージの方が強く、この企画展示に大変興味を持った。私が

和歌や古典文学に興味を持つ原点となった百人一首かるたについての企画展示が行われて幸運だと思った。

百人一首かるたといえばカルタの代名詞ともされているがその歴史は江戸時代からの物である。当時は教養として百人一首が必修とされ富裕層の嫁入り道具の一つでもあった。尾形光琳や居初つなによる絢爛豪華な歌仙絵が芸術性も高めていった。

歌カルタといえば百人一首が有名であるが、他の歌カルタとして『源氏物語』『伊勢物語』『古今和歌集』なども存在する。なぜ百人一首だけがここまで普及したかという、「上句札」「下句札」と分けずに「取り札」として全句を記したためである。これは幕末から明治初期にかけてのことである。これにより全首の暗記が不要となり庶民へと普及したのだ。

### 小倉山 二尊院

小倉山は藤原定家が百人一首を選定したとされる山荘「時雨亭」があった定家ゆかりの地である。小倉山は標高 296m で右京区の桂川北岸に位置している。二尊院から奥に進むと時雨亭跡地へ行くことができた。境内には百人一首に登場する「小倉山 峰のみしは ころあらは いまひとたひの みゆきまたなむ（藤原忠平貞信公）」の歌碑がある。これは宇多上皇が小倉山の美しい紅葉を息子の醍醐天皇に見せたいという思いから、しばし散らないうでほしいと歌った句であったという。この説明は麓の人力車夫の方によるものである。この方から時雨亭跡がもう一か所あるというお話も聞くことができたので、次はそちらにも赴きたいと思った。他にも西行法師の「嘆けとて 月やは物を 思はする かこち顔なるわが涙かな」「我かものと 秋の梢を思うかな 小倉の里に 家居せしよ里」や「志のばれむ ものともなしに 小倉山 軒端の松ぞ なれて久しき（藤原定家）」など多くの歌碑があった。

さて、時雨亭後へは石段と山道を少し上がると辿り着く。当時の人々は着物でこ貴族を乗せた車もちで歩いたのかと思うと尊敬してしまう。時雨亭跡からは木が展望を少し妨げるがとても静かで町を見下ろすことのできる自然に囲まれた落ち着いた場所であった。集中してじっくりと百人一首を選定するのに適当な場所であるように感じ、木の音や鳥の声も風情があった。

### おわりに

本稿では嵐山方面での自由行動しか記述することができなかったが、もっと多くの場所を見学し、実際に自分足で回ることによって和歌への理解や当時の歌人の気持ちに一步近づけたように思う。これからも学びを続けていく上でフィールドワークを大切に、また今回見て回ることができなかったところも見てみたいと思う。

## 日本文学の道を歩く 一人の温もりと文化に触れた六日間―

1 部日本文化学科 2 年 2715171 長谷川 耀子

〈はじめに〉

私は今回の研修以前に、二度京都へ訪れたことがある。北海道には無い、土地に根付いた独特の文化と街並みがとても風情があって好みだからである。そのため、今回は「日本文学」というテーマをもって歩いたことにより、過去のものとはまた異なる発見があった。

本稿では、自修研修にて新たに知った異なる発見と、自己分析による見解をまとめていく。  
〈2月28日（火）自修研修一日目〉

初日の最初に訪れたのは、京都御所である。御所内部は四方を塀で囲まれている為、外からの音が全くと言っていいほど入って来ることがなく、京都の中央にある場所ながら隔絶された空間となっていた。御所内には白の砂利が敷き詰められており、庭の岸边は黒の意思が配置され、朱色の門が鮮やかに浮かび上がって見えた。かつてこの場では帝が暮らし歌合せなど娯楽と共に政治の中心だったことは、複雑な形をした建物の造りと畳の縁や襖絵などから読み取ることが出来る。

一通り見終わった私は休憩所の衣川さんにお話を伺った。彼女は「一般公開がされるようになり、外国の方はもちろん日本の方もよく来てくれるようになった。もっと幅広い年代の方々に来ていただきたいが、同時にマナーは守ってほしい」と述べてくれた。同時に、私の所属していた班のテーマが日本の文学ということもあり、紫式部が『源氏物語』を書いた場所とされる蘆山寺を紹介してくれた。また、そこに向かう途中、猿ヶ辻も見に行った。最初は場所が分からず困っていると地元の方が教えてくれた。さらに、「災難がサルゆうてなあ、ほな」と笑いながらその場を離れていった。それを聞いた私は昔の人々もこのような言葉遊びを模していた事を改めて認識した。

蘆山寺を拝観したのちは上賀茂神社に向かった。この神社には藤原家隆が百人一首に編纂された句の「ならの小川」が流れている。小川の割には川幅も水量も多いと感じた。この川では古くから禊の場として神事の度に用いられてきた。その後は、祭神である賀茂別雷命の母である玉依姫命と、彼女の父である賀茂建角身命が祀られている下鴨神社に向かった。和菓子好きの私は友人と加茂みたらし茶屋という店に入った。この神社が行う「御手洗祭」が語源となったみたらし団子は歩き疲れた私にとって絶品だった。

さらに、ネットで周辺地図を見ていたところ、五条大橋の近くに源融河原院の邸宅跡が残っていた。光源氏のモデルとなったとされる彼の邸宅跡は石碑と立札、そしてその背後に立つ榎の大樹は邸内にあった森の名残のものとされているが、前日に巡った清水寺や神泉苑よりも小さなものであった。邸宅跡と聞くとどうしても大きなものを想像してしまいがちだが、時代の移ろいと共に小さくなっていくその面影に寂しさを感じた。

### 〈3月1日(水)自修研修二日目〉

この日は朝早くからホテルを出発し、小野小町最後の場所とされる隋心院に向かった。六歌仙の一人であり、深草少将との恋物語伝説で有名な「百夜通い」の名残とされる「はねず踊り」や、糸に通して日数を数えた樞の実、化粧井戸や文塚が存在した。この寺内には小町の晩年の姿を模した像や彼女がつけていただろお面が所蔵されている。そこから宇治に向かい、「源氏物語ミュージアム」に足を運んだ。ここにはマネキンやジオラマを用いての物語のワンシーンを忠実に再現したものなどがあつた。また、当時の香料のサンプルも存在しており、物語に出てきた人物や実際の人々が焚き染めた物の香りを体験することが出来た。その後は宇治上神社を経て宇治神社で喜撰法師の歌碑を探した。僧侶ということもあり世を憂うその和歌はかつての宇治の情景を思い起こさせるものがある。そこからさらに周辺を巡り、宇治橋を渡った。その時は丁度ダムの放水中だったようで普段よりも水位が上がっていたらしい。『宇治十帖』の浮舟が入水したその川は現代のように河川設備が整っていないためこの時見た物こそ当時の川の流れだったため、命を落としてもおかしくないと推測した。

### 〈3月2日(木)自修研修三日目〉

自修研修最終日は嵐山方面散策を行った。朝は生憎の雨だったが、嵐山に向かい大覚寺に到着したころになると一転して青空が見えるようになった。大覚寺には藤原公任が詠んだ歌の「名古曾の滝」の跡が復元されている。現在において水は枯れてしまっているが、復元工事により滝跡や鍮水の跡も残されている。また、この滝は『源氏物語』において「滝殿」と紹介されている。しかし、『源氏物語』が書かれた時代にはこの滝は枯れていたと記載されており、紫式部はそれ以前に詠まれた公任の和歌を元に当時の光景を想像し、物語を完成させたと分析した。また、この滝のある大沢の池には「中御所築地塀跡」も残されている。嵯峨天皇の離宮の一部であつたこの庭には嵯峨天皇崩御の後、後宇多天皇が入寺し復興と共に院御所が営まれた時のものである。

さらに、大覚寺から少し離れた場所には「六道の辻」の石碑が置かれていた。この辻で大抵の人々は参議篁を連想するだろうが、大覚寺では一休禅師の句が詠まれている。

「門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」

この句は「新年を迎えられてめでたいと騒ぐのも良いが、時が経過し誰も死に近づいている」というものだ。「一休さん＝トンチ話」と考えついでしまいがちだが、僧という職に就いていたからこそ人の生死に敏感であり、身近に感じながらも儂いものだとして憂っているのだろう。

### 〈おわりに〉

今回の研修で気が付いたことは、京都には数多くの史跡や邸宅跡が残されている。しかし、それは時代の流れと共に忘れられつつあるもの、反対に色濃く残っているものなどの差が顕著になっていた。このような過去の歴史を忘れず後世に伝える事こそ我々にできることであり、するべきことだと再認識した貴重なフィールドワークであつた。

## 京都研修で学んだこと —小倉百人一首ゆかりの地を巡る—

1 部日本文化学科 2 年 2715172 花田 実咲

私は今回、5泊6日の京都研修を通して小倉百人一首にゆかりのある土地、また多くの歌人が過ごした街を実際に見て歩いた。なぜ百人一首をテーマに選定したかという点、2年次の人文学演習において百人一首を学んだことにより百人一首への興味が深まり、どのような景色を見て、どのような思いでこの歌を詠んだのか、また藤原定家がどのような場所で百人一首を編纂したのかを見てみたいと思ったためである。

まず、小倉百人一首とは藤原定家が息子為家の妻の父である宇都宮頼綱から依頼され、小倉山の麓にあった山荘で1人1首ずつ、計100人の歌人から和歌を選びそれをひとつにまとめたものである。現在は、歌かるたとして遊ばれる。遊び方は上の句を詠んで下の句をとるものや、下の句を詠んで下の句をとるものなどさまざまである。

私が自主研修の中で最初に訪れたのは、藤原定家が実際に百人一首を編纂した嵐山である。ここには「時雨殿」という百人一首の資料館のような施設があるため、まずはそこを訪れた。時雨殿は常設展示室に入ると最初にずらっと壁伝いに百首の歌が解説と共に刻まれた「百歌繚乱」が目飛び込んでくる。自分が好きな歌をそこから探すのがとても楽しい。また、順路を進めていくと歌仙絵を基に再現された「歌仙人形」が100体並んだコーナーがある。1体1体がしっかりと忠実に作られており、100体並んだ姿は壮観である。また、2階に上がると平安装束体験を無料で行っているコーナーがある。ここには平安装束だけではなく、御帳台などもあり、当時の雰囲気を経験することができる。装束は重く、じっとしているだけでも大変だった。また、裾が長く、歩きにくい服だと感じた。

時雨殿を後にし、次は二尊院へと赴いた。二尊院に入ると藤原忠平が詠んだ歌で百人一首にもとられた歌「小倉山峯のもみぢ葉〜」の立て看板があった。この歌は二尊院がある山、小倉山が歌に入っており、親子愛が素敵な歌である。さらに、二尊院の奥には藤原定家が小倉百人一首を編纂した山荘、時雨亭があったとされる跡地が残っている。ちなみに、時雨殿という名前はこの時雨亭からとったものである。時雨亭跡地は、とても高い場所に位置し、整備はされているものの山道と呼べるような道を過ぎたところにあった。現在は立て看板があるのみであったが、そこからは京都の街並みが一望でき、とても気持ちのいい場所であった。定家はこんな素敵な場所で京都の町を見下ろしながら百人一首を選んでいったのかと思うと羨ましく思ったが、当時は恐らく道の整備がされていないため、険しい山道を登って山荘まで来ていたのかと思うと苦勞の末の賜物なのだった。

そして、二日目は京都御所を訪れた。京都御所は明治まで使われていた皇居であるが、その様式は平安時代に使われていたような雰囲気を持つものが多くあった。例えば、紫宸殿は1855年に建てられたものであるが、その造りは伝統的な儀式が行えるように平安時代の復

古様式で建てられている。見学に行ったときは修理を行っていたため近寄ることは不可能であったが、平安時代の貴族はこのような場所で儀式を行っていたのかと雰囲気をつかむことができた。また、清涼殿は平安時代中期以降天皇の日常のお住まいとして定着した御殿であり、政事・神事などの重要な儀式も行われた。伝統的な儀式を行うために平安中期の建築空間や調度が整えられていた。中をのぞくと、平安時代の絵で見るような調度品が並んでおり、実際にこのような生活をしていただと目で理解することができた。また、御所の中には蹴鞠の庭という場所があった。思った以上に狭い空間で、貴族はここで蹴鞠をして遊んでいたのかなと思うと貴族はあまり走ったり広い空間で体を動かしたりしなかったのかなと思った。御常御殿の襖に描かれている蹴鞠の絵では 9 人ほどの貴族が蹴鞠をして遊んでいたが、実際は複数人数で蹴鞠をするのはとても窮屈なのではないかと思った。さらに庭は大きな池があり、橋がかかっており、たくさん木々が植えられて、とても広々とした自然あふれる景色であった。昔の貴族はこのような景色を眺めながら時には蹴鞠などで遊び、後世に残る和歌を詠んでいたのかと当時の雰囲気を感じた。

その後宇治へ赴いた。宇治では宇治神社に喜撰法師の「わが庵は～～」の歌碑がおかれていた。また、百人一首の中の 64 番の歌「朝ぼらけ～～」では、「宇治の川霧たえだえに」と宇治という言葉が詠み込まれている。宇治にいる時はあいにくの雨であったが、この歌を詠んだ権中納言定頼は朝川にかかる霧を見ながらこの歌を詠んだのだろうなと思うと風情があつて素敵だと思った。また、余談ではあるが和歌つながりということで源氏物語ミュージアムも見学をした。ここでは牛車が再現されており、また垣間見などの再現もされていた。平安時代の人々がどのような環境で歌を詠んでいたのかという雰囲気がより深く理解できた。

最終日は上賀茂神社と下賀茂神社を訪れた。上賀茂神社は一つ目の鳥居と二つ目の鳥居の間に「ならの小川」と呼ばれる小川が流れている。これは百人一首にも詠み込まれている。しかし、歌は実景を詠んだのではなく、屏風絵を見て詠んだものとされている。また、ならの小川の近くには百人一首に歌がとられている藤原家隆の歌碑が置かれていた。上賀茂神社を参拝したあとは、上賀茂と親子で祀られている下鴨神社へも赴いた。ここは百人一首と深くかかわるものは見つけられなかったが、日本の国家や古今和歌集にも詠み込まれている「さざれ石」を見ることができた。石というにも関わらず岩と呼べるほどの大きさの塊であった。なぜこの石がさざれ石として祀られることになったのか不思議であった。

以上が私の 3 日の研修で学んだことである。主に学んだことは、平安時代の歌人がどのような生活を送り、その中でどのような景色を見ながら歌を詠んだのかということであった。様々な京都の街並みや植物、景色を眺め、当時の歌人たちは歓声が豊かであったのと同時に京都は思わず歌を詠みたくなるような素晴らしい場所がたくさんあるんだということがわかった。様々な土地を訪れ、より一層京都のこと、和歌のこと、平安時代の文化のことなどが好きになった。また京都を訪れさらにこれらの良いところを見つけていきたい。

## 京都って、すばらしい。 ——一度は行ってみたい京都の魅力って？——

1 部日本文化学科 2 年 2715111 平尾 優作

京都は素晴らしい街であった。今回の研修旅行を総括するとこの一言がふさわしいと思う。しかし、想像していた京都像とはやや相違点があった。いや、この想像は後々考え直してみればおかしかったことなど容易にわかることではあったのだが、京都に到着する直前まではいわゆる THE 京都の幻想を抱いていた。私が考えていた京都は、町の至るところに和服を着ている舞妓さんが歩いているようなところだと私はなんとなく考えていた。そんなわけないのだが。そして、当たり前だが実際の京都は違っていた。大阪から京都に入って最初に見えたのは大手の回転すしのチェーン店だった。ガソリンスタンドもあった。意外と建物も多く、大型商業複合施設も平然としてあった。

「意外と普通だな、京都。」と思った。そして、バスは岡崎公園のすぐそばにあるホテルに到着した。動物園も近かった。日本で上野の次にできた動物園だそう。このときも、動物園あるのかよ。って心の中でつぶやいた。無いと思っていたからだ。その後はご飯を食べに外に出たら色々あって翌日団体で回るはずだった箇所に行ってしまうという珍事があったが、そこは割愛して初日は終わった。

二日目は二条駅周辺から東山周辺を講師の方々の話を聞きながら団体移動でまわり、夕食は外国人観光客向けのショーを行う和風のレストランで食べた。講師の方々のお話は大変興味深く、勉強になり、とてもありがたかった。自分一人では到底得られなかったであろう知識を話して頂いたことは貴重な経験となった。講師の方々には感謝の辞を伝えたい。食に関しては北海道のレベルが高すぎるため、それに慣れてしまった私には物足りなかった。しかし、ショーは最高であった。日本人の観光客でも楽しめる内容と迫力、パフォーマンスであった。ここは推しておきたい。

三日目から五日目は自主研修であった。自主研修初日は、平安神宮、京都御所、聚楽梯跡、二条城、本能寺を散策した。平安神宮では神苑の中にも入り、庭園の景色を楽しんだ。平安神宮をはじめ神苑は伊勢物語や古今集、古今和歌集にもゆかりがある地であるとされ、これらの中で登場する木々や植物などが多く管理されていた。平安神宮を出て、京都御所へ徒歩で向かった。御所の中はとても趣深く、私は圧倒された。それまでの疲れがなくなるほどに感動した。この中で一つ気づきがあったのだが、御所の中の建物の屋根には檜皮葺のものと瓦葺のもの二種類があることに気が付いた。この二つの違いはおそらく建物の場所によって違うものだと考えた。天皇が住まわれていた建物は檜皮葺で、それ以外の建物は瓦葺なのではないかと考えた。しかし、確証は得られていないので、今後調べることにしたい。事前学習で学んだものは可能な限りではあるがほとんど見ることはできたため、充足感を感じた。その後は聚楽梯跡を見て、やや迷いながら昼食をとり、二条城へと向かった。ここでは二条城がどのように使われていたのか、どのような造りであるのかを学ぶことができ

た。連歌的な造りというものを実際に見ることができてとても感動した。この後は本能寺を拝観し、宝物殿で本能寺の変等について学ぶことができた。

自主研修二日目は妙心寺、龍安寺、鹿苑寺金閣、北野天満宮を散策した。この中で特に記憶に残っているのは龍安寺へ向かう途中の龍安寺商店街である。この商店街はまさしく龍安寺へ向かう観光客をねらいにしたものであると考えられる。規模は大きくはないが、食事処やお土産屋などが並んでいた。清水周辺でも同様であったが、有名な観光スポットの周辺にはこのように観光客をターゲットにした産業が盛んになるということが今回の京都研修で強く思わされた。

自主研修最終日は伏見稲荷大社、上賀茂神社、下鴨神社を散策した。特に上賀茂と下鴨では多くのことを学んだ。上賀茂神社は京都の中でも特に古い神社であり、紫式部の歌が刻まれた石碑があるなど歴史のある神社である。また下鴨神社は隣接する河合神社において『方丈記』のゆかりの地であり、また、鴨長明は下鴨神社の神職の子弟であったために下鴨神社と鴨長明はかなり関係が深いことがわかった。また、「賀茂」という言葉は古代の国名のことであって、さらに「鴨」は鴨川から来ていることが両神社の立て看板からわかった。下鴨神社の境内の中には他に、鴨の七不思議の一つである相生の社や尾形光琳の「紅白梅図屏風」が描かれた場所とされている箇所などがあり、大変興味深かったため、私のもう一度行ってみたい所の一つとなった。

以上に今回の研修で訪れたところを簡素ではあるがまとめた。実際のところここには書ききれないほどに多くのことを学んだ。そして、今回の京都研修で強く感じたことは、少なくとも私が考えていた京都像とはかなり違っていたということである。冒頭に述べたことに加え、はんなりゆったりイメージのあった京都は、バスは札幌のバスよりも運転が荒く（私の私的見解）、縁結びの神様は至る所にいらっしやり、ごはんはあまりおいしくなく（個人的意見）、京都らしさをふんだんに装飾した観光都市というイメージが刷り込まれた。しかしながら、京都は素晴らしいところであると言える。それは、私の個人的な感想になってしまうかもしれないが、二点挙げられる。一つ目は京都の歴史、地誌を学べば日本の歴史を学ぶことと同然となる点である。京都は長くの間日本の都として栄えてきたため、多くの歴史上の著名な人物となんらかの縁がある。そのため、京都の名所について学ぶことは歴史上の人物についても学ぶことにつながり、さらには日本の歴史について学ぶことにもなるのではないだろうか考える。二つ目は、景観が良いという点である。私が見てきた中で、高い建物は京都駅と京都タワーの二つだけである。札幌や東京と違い、高層の建物がない分閉塞感がないように感じた。これは京都で生活する人には住み心地の良さにつながり、観光客には開放感や足取りの軽さにつながるのではないかと思う。また、観光地へのインフラの充実も京都の観光産業を支える一つの要因となっているのだろう。以上より、私は京都という街は良いところばかりではなく意外と悪いところや期待外れなところがある街で、しかしそれが京都の愛すべきところで、京都の魅力なのではないかという思いに至った。本当はまだ書きたいことはたくさんあるが、字数の関係上、ここで筆を置かせて頂く。

## 京都研修を終えて

1 部日本文化学科 2 年 2715178 福島 沙希

今回の研修旅行は、一日中京都に関する色々な事柄に触れることができたとても有意義なものだった。このレポートでは特に印象深い三日間の自主研修について述べていきたい。

私の当初のテーマは「百人一首に選ばれた歌や歌人ゆかりの地を巡る」というものだった。しかし、実際に現地を回ってみると目的地以外にも興味を惹かれるものも多くあった。そのため、百人一首にゆかりのある場所を基点として初めの予定にない所でも可能な限りめぐることになった。

自主研修一日目は、京都御所、廬山寺、上賀茂神社、下賀茂神社、河原院跡を主に見て回った。

京都御所は、敷地や建物の大きさ、建物内のふすまに描かれている絵や手入れの行き届いた庭園の美しさに驚いた。また檜皮葺の展示物があり、めったに見ることのできない檜皮葺というものをじっくりと、断面まで見る事が出来たのはとても良い経験になったと感じる。

藤原家隆「風そよぐならの小川の夕ぐれはみそぎぞ夏のしるしなりける」に詠まれているならの小川を見るために行った上賀茂神社では、ならの小川も家隆の歌碑も見ることができ、家隆はこの小川での光景を思い浮かべながら歌を詠んだのだと考えると、少し不思議な気持ちになった。

河原院跡は前日の夜に私がネットで見つけ、百人一首にも関係があるし見に行きたいと班員にお願いして見に行った場所である。河原院とは光源氏のモデルの一人と言われていた源融の別荘であり、源氏物語の中にも登場している。当時は今の京都御所とほぼ同じくらいの規模の大邸宅であった。しかし、実際に河原院跡に行ってみると、道端に榎の木が一本と説明の立て札がひっそりと立っているだけだった。もう少し目立つようになっていると漠然と考えていた私は少しショックだった。ただ、今残っているものの何倍もの規模の邸宅があったのだと思うとその広さが際立つように感じられた。

自主研修二日目は、随心院、源氏物語ミュージアム、宇治上神社、宇治神社、平等院を主に訪れた。

随心院は、今回の研修旅行で一番行きたかった場所で、百人一首の「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」の歌を詠んだ小野小町が暮らしていたと言われている。随心院は、小町のもとに毎夜、雨が降っていても雪が降っていても通い続けたが、九十九日目の夜に雪と発病によって亡くなってしまったという深草少将の百夜通の話が有名である。建物の中を見て回る間ずっと靴下でいたため、足先からじんわりと冷えていく感覚や、日の当たる場所に出た時の柔らかい暖かさを実際に感じる事ができ、小野小町もきっと同じような経験をしていたのだなと思うと感慨深かった。

源氏物語ミュージアムは、百人一首とはあまり関係は無いが、古典文学としては外せないものということで訪れた。作者の紫式部の生きていた当時の貴族の生活を再現していたり当時よく用いられていた香の匂いを嗅ぎ比べることが出来たりと源氏物語について理解を深めることが出来た。

宇治神社には喜撰法師の「わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうち山と人はいふなり」の歌碑があり、神社を出るとすぐに宇治川を見ることができた。

自主研修三日目は大覚寺、時雨殿が主な目的地だった。

大覚寺には「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」と藤原公任に詠まれた名古曽の滝跡を見るために訪れた。大覚寺内も見学し、見学した時はちょうど雨が降っており、お寺の屋根から雨どいの代わりに垂れている鎖樋に雨水が伝って落ちていく様子を見ることが出来た。

名古曽の滝跡は少し奥まったところにあり、跡とされるように滝の姿は見る影もなかった。しかし、滝が流れていた名残は感じられたので実際に滝が流れているところを見てみたかったと非常に残念に感じた。

大覚寺を見た後は渡月橋のあたりまで移動し、人力車に乗ることになった。俣夫のお兄さんたちに渡月橋の名前の由来、竹林やそこに出没する動物の話、野々宮神社の鳥居がちょうど新しくなったこと、宝篋院についての詳しい説明などをしていただき、自分たちだけでは知ることが出来なかったことを知ることが出来た。もっとたくさんの事を知りたいと感じることが出来た。

時雨殿では百人一首の事について今まで見てきた歌や歌人の説明を読み、復習をしつつ、さらに知識を得ることが出来た。また、平安貴族の衣装を着ることのできるコーナーがあり、女性用の十二単は簡略化されているけれど、それでもそれを着た班員は動きずらそうにおもえた。簡略化されていない十二単を毎日着て過ごしていた昔の貴族の娘たちは、あまり動かないと言ってもかなりの負担がかかっていたのだなと改めて思った。男性用の狩衣は、十二単ほど簡略化されていなかったため着るのにも時間がかかった。しかし、着てしまえばそこまで動きずらそうには見えなかったように思った。御簾の中でほとんど過ごす女性と、出仕して仕事をする男性との生活スタイルの違いが衣服にも表れていると感じた。

今回の研修旅行を通して、研修をする前にはただ有名な歌や歌人に関係のある、昔の日本の名残がある場所としか認識していなかった様々な場所も違う角度から見るとまったく違うものに見えるということを実感することが出来た。その中で「京都らしさとはなにか」ということを考えると、改めて今までよりも深い所から考え直す必要があると思った。また、この「～らしさ」の探求ということは、私の暮らしている北海道や札幌にも関係のあることだと考える。今回の研修旅行の経験を活かし、自分の身近な場所の「らしさ」について考えることを今後の課題にしていきたいと思う。

# 京都研修レポート

## —和歌の舞台を巡る—

1 部日本文化学科 2 年 2715181 藤田 沙織

私が京都研修に参加した理由は、小倉百人一首や古今和歌集で詠まれた和歌の舞台、風景を実際に見たいと思ったことがきっかけである。修学旅行や個人の旅行で京都を訪れたことがなく、今回の研修が初めての関西、京都であり、言葉、料理、風景ともに新鮮な体験ができた。関西と北海道の街や食べ物の違いなども含め、以下のレポートでは訪れた場所の紹介と、印象に残ったことを述べる。

まず研修 2 日目について述べる。2 日目は立命館大学の教授に導かれ、様々な視点から二条駅を中心とした京都の街を歩いた。視点としては、主に「京都観光の今昔」「京都の災害史」「都市再開発」の三点である。現在人気の観光地を巡りつつ、その場所が平安・鎌倉・江戸時代にはどのような場所であったか、時代ごとの観光名所を巡ったり、京都の路地裏を歩いては再開発された住宅地の様子を立命館大学教授の解説を聞きながら歩くことができたのはとてもいい経験になった。その中で特に印象に残ったのは、「京都らしさ」を意図的に残していくという都市景観づくりの話である。京都らしさとはなにか。それは、狭い石畳の路地裏や、木造建築の長屋であったり、いわゆる観光客が京都を思い浮かべた時にイメージする風景である。もちろん現在もイメージするような家屋や路地、風景は残っていることは確かである。しかし、中には景観を人工的に作って残しているという事実にとっても驚いた。

3 日目から 5 日目は各々のグループでの自由行動となる。私は百人一首を主とする和歌についてテーマを定めていたため、まず百人一首についての展示がある時雨殿を訪れた。時雨殿は嵐山に建てられている「見て」「感じて」「学ぶ」百人一首ミュージアムである。時雨殿という名前は、百人一首の歌人、また選者でもある藤原定家が、歌を選定した場所と言われている山荘の名が「時雨亭」であることに由来する。館内には百人一首歌人 100 人の人個性あふれる人形や、歌合せの様子を模した模型、様々なかるたなど、百人一首に関する貴重な資料が展示されている。また、2 回には羽織るという形ではあるが、着物を着て写真撮影ができる空間がある。ここではボランティアの方が着付けをしてくださり、撮影をすることができる。本物の十二単衣ではないものの、その衣装もずっしりとした重みがあり、本物は 10 キロを超えるとのこと座っていることが多い当時の女性ならではあると感じた。この体験で当時の女性たちの生活を少しだけ垣間見ることができた。次に二尊寺を訪れた。二尊寺には先に述べた定家の山荘、時雨亭跡がある。実際に私もその跡地を訪れた。二尊寺から少し階段を登り、山道に近い道を歩いた先にその跡地はある。現在は看板と岩の台座が置かれており、その場から京都の街並みを一望できる見晴らしの良いところでもある。当時の道や風景は今と違っているのだろうが、定家がこの高いところに登って山荘から京の街並みを眺めていたのだろうかと感じ、百人一首の選ばれた場として深く感動した。ところで、

小倉山は現在も紅葉の名所として知られているが、平安時代にも紅葉の名所として歌枕になるほど知られていた。百人一首の中にも藤原忠平の、「小倉山 峰のみみじ葉 心あらば今ひとたびの みゆき待たなむ」という歌が詠まれている。この歌の訳として、「もし小倉山の紅葉よ、あなたに人間の情がわかる心があるのならば、もう一度天皇がおいでになるまで散らずに待っていてくれないか」というもので、親が子の心を想う気持ちが込められている。もし次に京都へ行く機会があれば紅葉の時期に訪れたい。

また、自由研修3日目には上賀茂神社と下鴨（下賀茂）神社を訪れた。上賀茂神社では神主さんの説明を受け、2つの神社の成り立ちの歴史や関係、名前の由来を知ることができた。また、上賀茂神社では百人一首歌人の藤原家隆の歌「風そよぐ ならの小川の 夕ぐれはみそぎぞ 夏のしるしなりける」が書かれた木の看板と歌碑が立てられている。この歌は平安の昔に神職がみそぎを行っていた情景を詠んだ歌である。実際にこの看板の下には小さな小川が流れており、この辺りを「ならの小川」と称するという。小さな橋がかかっており、渡ると涼しい水音を感じることができる。また、下鴨神社を訪れると古今和歌集の歌で、藤原敏行が詠んだ「ちはやぶる 鴨の社のひめ小松 よろずよふとも 色はかわらじ」の看板が、実際の媛小松の前に建てられていた。これは葵祭にて催される東游は日本最古の歌舞であり、この松は歌の2番目で「ひめ小松」とうたわれた松である。京都を巡り全体を通して感じたことだが、神社、寺院の中にこうした和歌が詠まれた場が残っているということにとっても感動し、歴史の深さを感じた。また、下鴨神社には国家で歌われる「さざれ石」と呼ばれる岩が置かれていた。国家の元となった歌と考えられているものが古今和歌集に残されており、この歌にもさざれ石は登場する。神社の入り口に置かれているこの石に向かって拝礼する参拝客の姿も多く見ることができ、石が象徴する生命力と不思議な力への畏敬の念が込められていると感じた。

今回の京都研修で最も印象に残っているのは百人一首の歌碑巡り、また歌が詠まれたと伝わる場所に実際に訪れたことである。普段教科書や本の中でのみ触れていた歌だが、その風景や舞台を実際に見ることができたのはとても感動し、これからの学びにも生かすことができる経験であった。また、余談ではあるが、京都で食べたものの味が北海道の味とは多少異なっていたことも大きな経験であった。味噌汁の味は北海道のものよりも甘く、また名物の豆腐も甘く感じる不思議な感覚だった。また、お店の店員さんが店を出るときに「おおきに」と送り出してくださったのもうれしい衝撃だった。

この経験で学んだことを、今後の日本文学の研究に生かしていきたい。また、機会があれば、春ではなく別の季節でも京都を訪れて、景色の違いを感じていきたいと思う。

## 小倉百人一首の言葉と自然を体感する

1 部日本文化学科 2 年 2715183 保木本 結菜

2 月 26 日から 3 月 3 日の 6 日間にわたって行われた日本文化特別演習では、自分が関心のある分野について、実際に肌で感じることで理解を深めることが出来た。また、知らない土地を歩くということそのものが私にとって重要な経験となり、新たな視点を得ることが出来たため、この 6 日間は非常に密度の濃い時間だったと感じている。

自由行動では主に、嵯峨野・嵐山周辺、京都御所、近江神宮、逢坂の関址、そして上賀茂神社を訪れた。まず初めに、百人一首の撰者、藤原定家の山荘がこの付近であるとして建てられた、時雨亭の跡がある常寂光寺を訪れた。常寂光寺は日蓮宗の寺院であり、小倉山の中腹に建てられている。辺りは閑散としていて、本殿の後ろに位置する多宝塔の前まで山を登ると、京都市街を一望出来、とても清々しい空気を感じる事が出来た。

次に訪れたのは、私が以前から行きたいと思っていた、小倉百人一首殿堂時雨殿である。時雨殿は、百人一首に関する貴重な資料や歌人百人を模した人形、さらに 960 年に村上天皇の主催で行われた「天徳内裏歌合」の様子を再現したジオラマなども展示され、十分に見ごたえのある施設だった。特に私が心を惹かれたのは四季をテーマとした歌の世界や場面をジオラマで再現した展示である。私が訪れたときは冬をテーマとしていて、私の好きな歌の一首である、第 6 番「かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける」(中納言家持)が展示されていた。この歌は中国の七夕の伝説から想を得たものであると解説されており、このジオラマでも、かささぎが天の川に架かる橋となって並んで飛んでいる様子が表現されている。歌の中のイメージを立体的に表現するというのが斬新で面白く、また美しく再現されているその展示を見て、私の中の歌のイメージも広がった。また、競技かるたを題材とした漫画「ちはやふる」の主人公が作中で当館を訪れていることから、登場人物たちのパネルや作者のサイン色紙が飾られており、「ちはやふる」の読者としても見どころのある施設だった。

次に訪れたのは歌や歌人にゆかりのある場所ではなく、おかきの専門店である小倉山荘竹生の郷本館だ。このお店は平安時代の王朝文化の優美さをテーマとしていて、小倉百人一首をモチーフとしたおかきなどのお菓子が商品として並べられている。お店の外には平安情緒を表現した庭があり、第 26 番「小倉山 峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ」(貞信公)、第 40 番「しのぶれど色に出でにけりわが恋は ものや思ふと人の問ふまで」(平兼盛)、第 61 番「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな」(伊勢大輔)の 3 首の歌碑も建てられている。百人一首の世界をお菓子で表現しているというのが斬新で興味深かったため、このお店を訪れたが、お菓子の種類も豊富で百人一首に詳しくない人も興味が湧くのではないかと思う。このお店ではお菓子という分野で百人一首の世界を広げており、文学が観光や経営と結びつく具体例を知れて、とても勉強になった。

次に訪れたのは京都御所である。京都御所については事前学習で学んでいたため、様々な細かいところにも目を向けて注意深く拝観することが出来た。檜皮葺で精巧に作られた屋根の曲線美や、庭師によって常に美しさが保たれている松など、一つ一つに丁寧な技術と繊細な美的感覚が込められていることを、自分の目で見て実感した。前述した第6番「かささぎの」で詠まれている紫宸殿では、家持が天の川に架かる橋と見立てた橋も実際に見ることが出来、その情景をより鮮明に想像することが出来た。

そして私は滋賀に向かい、近江神宮を訪れた。近江神宮には小倉百人一首の巻頭歌である「秋の田の仮庵の庵の苫をあらみ わが衣手は露にぬれつつ」を詠んだ天智天皇が祀られている。「自然を感じる」という自分のテーマとは少し異なるが、天智天皇が小倉百人一首の巻頭歌の歌人であるということで、境内には百首の歌が飾られ、板かるたも展示されており、実際に訪れて初めて近江神宮と百人一首の関係の深いことが実感できた。

そして京阪電車京津線の大谷駅を降りて5分ほど歩くと、道路の脇に逢坂の関址がある。逢坂の関は、山城国と近江国の境にあった関所であり、歌枕として多くの和歌に登場する。小倉百人一首では第10番「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」(蝉丸)、第25番「名にしおはば逢坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな」(三条右大臣)、第62番「夜をこめて鳥のそらねははるかとも よに逢坂の関はゆるさじ」(清少納言)の3首で詠まれている。逢坂の関址は木造の柱が2本ずつ左右に建てられていて、当時の関所を思わせるような作りとなっていた。ここは人通りも少なく、観光地というような場所ではなかったが、逢坂の関を解説するパネルが建てられていたり、上記の3首の歌碑が建てられていたり、関心がある人にとっては十分に見ごたえのある場所であると思う。逢坂の関址のすぐ近くには第10番の歌人、蝉丸を祀った蝉丸神社もあり、この土地が歌枕としての逢坂の関を大切に守っていることが感じられた。

そして私は京都に戻り、最後に上賀茂神社を訪れた。上賀茂神社には、私の好きな歌の一首である第98番「風そよぐ ならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける」(従二位家隆)で詠まれている御手洗川が流れている。実際に行ってみると辺りはとても静かで、川の流れる音だけが聞こえるような場所だった。川の近くを歩いていると、心が浄化されるような感覚になり、歌に込められた清涼感をたっぷりと肌で感じる事が出来た。

私はこの日本文化特別演習では「小倉百人一首の言葉と自然を感じる」ということをテーマとして様々な場所を訪れ、実際にその土地に着いて初めて、文献資料では読み取る事の出来ない情報を得ることが出来た。当時とは周りの風景や環境などは変わってしまっているが、その中でも跡地として大切に守られ、当時からその場所にあったという事実をしっかりと残そうとする、先人たちから現代にまで伝わる強い意志が感じられた。また、文学を違う視点から見ることで得られる発見もあるということを改めて学ぶことが出来た。とても充実した有意義な時間を過ごすことが出来たので、この経験と知識を今後の自分の研究に活かしていきたいと思う。

## 世界遺産と京都の街を巡って

1 部日本文化学科 2 年 2715185 前川 史帆

私は『世界遺産を巡る』というテーマで研修を行った。テーマをそのように設定した理由は、北海道に住んでいると世界遺産というものを見る機会がなかなかないため、自主研修で様々な世界遺産を巡りたいと思ったためである。

京都には 17 個もの世界遺産があるが、私は自主研修では金閣寺、仁和寺、龍安寺、天龍寺、西本願寺、平等院、宇治上神社を回った。その中でも特に印象に残ったのが平等院である。平等院は私たちの身近にある 10 円玉の裏に描かれているということで生で見てみたいとずっと思っていたため自主研修の中でも特に楽しみにしていた。

外観はネットで見た画像をイメージしていたため、色鮮やかなものであると思っていたが実際自分の目で見るとそれほど鮮やかさはなかったため少し残念だった。平等院内には菩薩像などが展示されている博物館があり見学した。伝帝釈天立像という像はすべて桧木からつくられており、筆のようなものや巻物などを持っていて、一体一体が微妙に表情が異なり、細かいところまで丁寧に作られているという印象であった。雲中供養菩薩像という像は雲の上に菩薩が乗っていて、琴などの弦楽器、小太鼓などの打楽器、縦笛などの管楽器を持っていて博物館内には 52 体中 26 体が展示されていた。これらも桧木で作られていて、像自体小さめであるが楽器の細かいところまで精巧に作られていた。

鳳凰堂内も見学することができたため見学した。鳳凰堂は経典に描かれる浄土の宮殿をイメージしてつくられている。堂内にある巨大な阿弥陀如来坐像も桧木からできていて、頭や胴体など体の部分部分をそれぞれつくり、それらを組み合わせてその上に金箔が貼り合わされていることで光り輝く状態になっている。壁扉画は今ではもう一部分しか残っていなかったが、博物館内で復元されていて見ることができた。意図的に粗暴さを残すことで立体感を出しているという。平等院には二体の鳳凰がいて、鳳凰が二体いる寺院は珍しいのではないかと思う。この点や菩薩像、阿弥陀如来坐像の豪勢さから藤原氏の権力の強さを身をもって感じることもできた。また、平等院は抹茶で有名な宇治にあるので抹茶アイスを食べたが、濃厚ですごく美味しかったので是非おすすめしたい。本場の京都でしか味わえない味だと思う。

その他にも印象に残ったのは、龍安寺である。枯山水の石庭が有名であり、石が 15 個あるがどこから見ても 14 個に見えると言われている。それを確認するためには現地で自分の目でしか確認することはできなので 15 個見つけようという思いで行った。実際私は 13 個しか見つけられなかったが、石庭の居心地の良さをすごく感じることもできた。友人と一緒にいったがお互いあまり話すこともなく 15 分くらいずっと縁側に座って石庭を眺めていられるほどであった。その日はまだ桜は咲いていなかったが、次は桜が咲くころに行ってみたい。方丈の裏側に行くと水戸光圀が寄進したとされているつくばいがある。自然の中に溶け

込んでいて古き良き日本を感じさせるものであったと思う。石庭以外にも鏡容池はとても自然の美しさが際立っていて心が落ち着くような感じであった。北海道に住んでいるとなかなか古き良き日本を感じることはない気がするが、枯山水の石庭では特に感じる事ができた。よく趣があるというように表現することがあるが、まさにそれを感じることができたのではないかと思った。

世界遺産以外にも嵐山や祇園に行った。2日目の全体での研修で学んだことに注目しながら巡った。京都の大学院生の方や大学の教授による二条駅界隈の市街化について、京都観光についてや京都の文化遺産防災についての解説が行われた。そこで現在の京都では古い建物が流行であることや京都は文化遺産を守るために景観を守りつつ消火栓が至るところにあることを学んだ。

これらの学んだことをもとに観光地としての京都という視点で巡った。まず、京都に来て感じたことは道が狭いことである。観光客がたくさん訪れる場であっても歩道のすぐ横を車が走ったり、歩道は二人で並んで歩くのがぎりぎりなくらいであった。そして、観光客がたくさんいるところでも車が通行可能であることに驚いた。祇園の花見小路では最初は車が通ることができる所ではないと思っていたが、結構車通りもあり美しい景観であるのに少し残念であった。これらの点が京都の観光地としての欠点であるのではないかと考える。

それに対し、クーラーの室外機が木で囲われていて景観を崩さないように施されている点や嵐山の竹林では途中にごみ箱が設置されてポイ捨てされないようにしている点は観光地としての意識の高さを感じた。コンビニも京都の景観に合わせてつくられているため屋根が瓦でできているものやマクドナルドも景観を損なわないように黒めで入口付近に木が施されていたり、全体的に街灯も少なめであるように感じた。街全体で京都の美しさを守ろうとしているということがわかった。

『世界遺産を巡る』というテーマで自主研修を行って感じたことはどの世界遺産も自然との共存がなされていて、趣というものを身をもって感じる事ができた研修であった。北海道とは違った、日本古来の自然の美しさを感じた研修であった。世界遺産という数少ないものを五泊の中でたくさん見ることができたのは本当に貴重な体験になったと思う。また、二日目の院生の方や教授の話聞いた後に自主研修を行うことができたため、高校生の時に修学旅行で行った時とは違い、ただ単に観光するだけでなく、観光地としての京都という新しい視点から京都を見ることができて良かったと思う。街全体が一体となって観光地であることを意識している点では札幌とは違った観光のかたちを見ることができたと思う。京都にはまだまだたくさんの文化遺産があると思うが、桜が満開の時期にまたもう一度行ってみたい。今回の研修は大学生活でもとても思い出に残るものになったと思う。また、京都の魅力を大いに感じる事ができた研修だった。

# 京都の街並み・景色

1 部日本文化学科 2 年 2715187 前田 涼音

## 1.はじめに

私が初めて京都を訪れた時、全てが北海道とは異なり唖然としたことを今でも覚えている。雪が降ることがほとんどないからこそ、昔ながらの木造の家や塀などが保存されておりとても興味深かった。高校の修学旅行では決められた箇所しかいけなかったため、今回の研修旅行では神社・お寺を含めた京都の景色を学ぶことを目的とした。

以下には研修旅行で特に印象に残ったものについて述べる。

## 2.京都御所

主に内裏と呼ばれる天皇の住居とされるもの。現在でも天皇の即位の際に使用されるものが保管されている。

御所内はとても広く、建造物も敷地に見合うほど大きなものばかりだった。事前学習で見た映像では小さく感じたので驚いた。見学者用の入り口付近は柱や屋根に朱色の塗装を施していて当時としては華美であるように感じたが、中に入っていくと色の使い方は落ち着いたものになっていった。御所の周辺は塀と木々で囲われているため、それらの色ととても合っていた。

小御所は儀式などに使用される御殿で、明治維新の際に開かれた小御所会議が行われた。この小御所の隣には回遊式庭園の御池庭がある。回遊式庭園とは名前の通り、敷地内を回遊しながら庭園を見て楽しむものを指す。この池は地図で見るとより大きく、かなり先まで伸びていた。小御所や御学問所から池を見ることが出来るため、昔の天皇はこの景色を見て歌を詠んだのだろうかと思惟することができたので楽しかった。

## 3.大雲山・龍安寺

妙心寺・義天玄承を開山として創建されたもので、現在では古都京都の文化財の 1 つとして世界遺産リストに登録されている。有名な石庭は、禅における無になりきったことで出てくる仏や神、すなわち禅の極致を表現していて新しい庭と評価されている。

この石庭は塀の外に見える木と石が上手に合い、侘び寂びというものはこのようなものを指すのかと思った。庭に配置されている 15 個の石はどの角度から見ても 1 つ欠けて見えるように作られていると聞いたので、実際に動いてみた所本当に 1 つ欠けたのでこれを考えた人は大層頭が良かったのだろうと感じた。

15 個の石すべてを見るにはどうしたら良いかと考えてみると、庭の上から見る方法しか思い至らずその視点で見ることのできるものは、飛行技術の無かった日本では神のような存在しかいないため、この庭の制作者はその点を考えていたのではないかと思う。

#### 4.高山寺

奈良時代末に光仁天皇により創建されたとされる。高山寺中興開祖・明恵上人は華嚴宗を興隆し、「鳥獣人物戯画絵巻」などの文化財の集積に繋がった。龍安寺と同様に古都京都の文化財の1つとして世界遺産リストに登録されている。

今回訪れた際には裏参道から高山寺に入ったのだが、階段がほとんど整備されていなかった。地上からかなりの高さがあるにも関わらず、手すりや柵もなかったため本当に怖かった。研修旅行で訪れた場所の中で、この高山寺が一番自然が多く空気が綺麗で心が洗われる思いであった。鳥獣人物戯画絵巻を象徴にしているだけあり、缶バッジやタオル、御朱印帳にもその絵があしらわれていた。

建物や階段がない場所には木が植えられていて、道に大きな木の根がむき出しているの、普段見ることのない部分を見ることができた。朝早くに参拝したのだが、木漏れ日や視界いっぱいの緑の景色を感じられたので、早起きしたかいがあったと思う。北海道のように街中に突然あるようなお寺よりも荘厳な雰囲気を感じられて、良い経験ができた。

#### 5.伏見稲荷大社

至る所に狐をモチーフにしたものがあった。初めて千本鳥居を見たのだが口がふさがらないほど感動した。美しいという言葉がしっくりくる景色にたくさんの鳥居が連なって、最初の鳥居を抜ける時わくわくしたほどだ。運悪く雨が降ってしまったのだが、すぐやんだことで狐の嫁入りのようだった。小雨で晴れ間がさしてとても綺麗な景色だったので雨が降って良かったと思っている。

#### 6.三十三間堂

1000体の仏像は圧巻で、あまりにもたくさんあるので少し恐ろしかった。自分に似た顔の像があると学んだが、全て同じ顔に見えて飽きなかったし、身長が自分よりも高く驚いた。1000体の仏像だけでなく、外は広大で見どころも多かった。池があることや小石が敷き詰められていること、塀の外の景観などから京都御所と似た雰囲気があった。

#### 全体を通して

主に神社やお寺と街並みの景色を見ていたのだが、歴史ある場所だと感じた。教科書や文章だけでは京都の素晴らしさを知ることは難しいと思うので、京都を訪れたことがない人に行ってほしいと思う。

歴史ある風景と現代の風景が上手に溶け合っていて、都が置かれていた場所だからこそ成立しているのだ。現在も家を建てる際に景観を壊さないよう、家の高さを決めたり、派手な色の使用を禁止したりと伝統を守ろうとしている。

これらのこと以外にも学ぶことができたので、普段の生活に生かしていきたい。

## 京の魔界巡り

1 部日本文化学科 2 年 2715190 松田 莉那

今回の研修旅行にあたって私がテーマにしたのは「京都の魔界的側面を辿る」ということであった。従って、自主研修の三日間は主に怨霊や魔物の伝説が残る地へ赴いた。

一日目の研修で一番印象に残っているのは養源院だ。養源院はもともと豊臣秀吉の側室・淀殿が父・浅井長政の供養のために建てた寺であった。しかしその後火災で焼失し、淀殿の妹で徳川二代将軍秀忠の正室である江が再建する。その際徳川と豊臣は互いに滅ぼしあった関係であり、豊臣側が建てた寺をすんなりとは再建出来なかったため「伏見城の戦いで敗れ、自害した徳川軍の兵を弔う」という形を付け加えた。

そのため、養源院の木材はそのほとんどが伏見城から持ってきたものであり、特に「血天井」と呼ばれる天井は伏見城の廊下をそのまま天井に移したもので、徳川軍が自害した際の血がそのまま残っている。事前学習として読んでいた本の中では印刷の都合上よく写っていなかったのが、勝手に少量のしみが残っている程度かと思っていたのだが、実際の天井を目にすると、黒くはっきりとした男性の手形や足の跡、指をずらしたような線などが残っていてとても驚いた。その中でも、頭から足の位置まで、全身がはっきりと残っているものがあった。お寺の方の説明によると、その跡は徳川軍の総大将であった鳥居元忠と考えられるようだ。総大将は自ら敗北を悟ると、自分の軍に自害を命令し、全員の死を見届けてから一人自害したという。血の跡からは刀のような線も発見できた。天井を見上げながら、この木の上で沢山の人が亡くなったこと、そしてそれを最後まで見届け、かつ誰からも介錯されず一人亡くなった総大将のことを考えると、「怖い、恐ろしい」という気持ちよりも「切ない、寂しい」気持ちになった。

このような歴史の解説や血天井の話以外にも、供養のために描かれた俵屋宗達の襖絵が部屋の配置まで綿密に考えられて描かれていることなどを実際に目で確認しながら話を聞けるので、養源院での時間はとても充実したものとなった。

二日目で印象に残っているのは貴船神社と鞍馬寺だ。

貴船神社には丑の刻参りの伝説が残っている。実際に足を運んでみると、貴船神社は山の奥にあり、周りは木や水といった自然であふれていて、本当に丑の刻参りが行われていてもおかしくないような場所を感じた。私達は日が昇っている間に行ったが、夜だとこの美しい自然が不気味さを帯びるのだろうなどと考えながら辺りを歩いた。その中で、小さな社を発見した。そこには「牛鬼」の文字があってひどく驚いたと同時に勉強不足だったのが恥ずかしくなった。牛鬼というのは頭が鬼で胴体が牛や蜘蛛のような妖怪（頭と胴体が逆という話もある）であるが、それが貴船の神の従者であったことは全く知らなかったため大変勉強になった。

その後山道を一時間ほど歩き、鞍馬寺へ向かった。道中は表面へ這い出た木の根が階段の

代わりをしている場所があり、普段なかなか見ることの出来ない景色に感動しながら進んでいった。地元の方の話によると、その場所は土の中に石が多く含まれているため、下に伸ばせなかった根が土の上へ出てきているという。

そうして辿り着いた鞍馬寺はまた自然に囲まれた美しい風景と本殿の堂々とした風格が素晴らしかった。鞍馬山というと、大天狗が牛若丸（後の源義経）に兵法を教え、平家を滅ぼすように伝えた伝説がある。辺りを見渡してみると高い木がところどころにあり、天狗がいてもおかしくないように感じさせる力があって一人感動してしまった。

三日目で特に印象に残っているのは北野天満宮と一条妖怪ストリートだ。

北野天満宮は学問の神様とされる菅原道真を祀っているが、その経緯にかつて京が魔界と隣り合わせにあったことが垣間見える。学識豊かであった菅原道真は右大臣にまで上り詰めるも貴族の嫉妬を受け、無実の罪を着せられると九州の大宰府に左遷され、そこで失意のうちに亡くなってしまう。その後、天皇や左大臣が病に倒れ、御所に落雷がおきるなどよくないことが立て続けに起こり、それが道真の怨霊の仕業だと考えられたため、北野天満宮を建立し道真を天神として祀った。今では学問の神様として学生やその保護者が多く参拝に訪れていたが、その経緯を考えるとなんとも言えない気持ちになった。

午後は一条妖怪ストリートと呼ばれている商店街へ向かった。一条妖怪ストリートでは「京都の一条通りではかつて百鬼夜行の行進が行われていた」という伝説を元に妖怪を使った町おこしを行っている。そのため、商店の前には手作りの妖怪の置物が置かれており、中には妖怪グッズを作って販売しているところや妖怪コロッケ、妖怪ラーメンなど独自に生み出した商品を販売する店もあった。

さらに私が驚いたのは、一条通りの伝説だけがきっかけで妖怪をモチーフに町おこしを行っているのではなく商店ならではの考えもあったことだ。というのも百鬼夜行を行っていたとされるのは古くなって捨てられた道具が化けた「付喪神」という妖怪たちだと考えられている。そうした付喪神の由来を元に、長年「物」を扱う商店が消費者に「物を大切にしよう」と訴える心が込められているようで、そこまで考えた上で町おこしを行っているのは純粋に凄いと感じた。

また、商店街では妖怪ストリート限定で使える妖怪カメラというアプリも作っており、カメラを起動したまま歩いていると画面に様々な種類の付喪神が現われる。全 24 種類あり、それらをコレクションする楽しみもある。私は友人が協力してくれたおかげで、そのうち 21 種類まで集めることが出来た。こうした商店街の取り組みは「京の魔界」として長らく畏れられてきた文化を現代風にアレンジし「時代の変化に対応しつつ昔から続く文化を大切に守る」という見習うべき取り組みだと感じた。

今回の研修を通して、どこも京の魔界伝説をそのままに放置しておくのではなく、時には現代に適応する形に変え、それらを保護した上で私達に伝えているのがわかってとても勉強になった。今回の学びを忘れず、さらなる知識を蓄えた上でもう一度京都へ足を運んでみたいと思った。

## 「金閣寺」と聖地巡礼 —周辺に目を向ける重要性—

1 部日本文化学科 2 年 2715196 元地 崇暁

今回自分は事前レポートの目的通り三島由紀夫の小説「金閣寺」の舞台や三島が小説を書くにあたって訪れた場所、そして京都の町の移り変わりとして近代以降に完成した建造物を中心に回ろうとした。しかしそれだけでは日程を消化することは難しく訪れた寺社の周辺の寺社や建造物で気になった場所についても時間の許す限り訪問することとした。

そして迎えた自主研修 1 日目。まずは全員が訪問することになっていた京都御所へ班員全員で訪問した。京都御苑並びに御所建礼門までは全員で、それ以降は個人行動でそれぞれ御所の外周や内部を拝観した。自分はそのあと行動を共にする予定だった金木君と拝観し、御所内部では建物の豪華さや壮大きさに圧倒されていただけでなく美しい庭園にも魅了された。御苑と御所合わせて 2 時間とたっぷり時間を使い自分も金木君も満足することができたので御所を後にし次に金閣へと向かった。鹿苑寺金閣は高 2 以来二度目だったが、今回の研修テーマに沿ってじっくり見たため高校生の時に見逃していた部分や新たな発見があり訪問してよかったと思った。特に最終日の報告会でも話したが作中に出てくる場面や風景を実際の光景と重ね合わせてみることができ普通に拝観するのとはまた違った見方ができた。昼食をとったのちに高校時代にも拝観しており徒歩で行ける距離の竜安寺を訪問することとした。竜安寺は石庭や蹲が有名ではあるが庭園も美しく魅力の一つだと思う。しかし今回の訪問で自分たちが一番驚いたのは太平洋戦争の時にビルマに派遣された軍の戦没者の慰霊碑として作られたパゴダが存在したことだ。慰霊碑などという木や石でできたものが多く実際それをイメージする。しかし、竜安寺の場合庭園の順路案内にパゴダと明記されており興味を惹かれ拝観した。矢印に従い向かうと東南アジアの仏教の聖地にあるような白いモニュメントが存在し、真ん中に一対の仏像が祀られておりその前には焼香用の穴があった。手を合わせることもしかなかったが京都に居ながらにして異国の雰囲気を感じることができた。その後も高校の修学旅行の訪問ルートをつとどり、次は自分の目的地でもあった妙心寺にたどり着いた。妙心寺は三島が小説を書く上で実際に取材した寺で作中の主人公や坊主の普段の生活のモデルとなっている。高校時代に訪れたときは法堂や明智風呂などを見て回る拝観ツアー的なものに参加したのみで中をあまり見て回ることは出来なかったが、今回は寺院内を時間をかけて回ることができ高校時代とは違い南門から出ることとなった。小説の内部での描写に注目して拝観していたが、そのために庭園を失念して 5 班の発表で庭園の存在を知ることとなったため次の訪問の時の課題として残った。妙心寺からは高校時代のルートから外れ仁和寺に訪問することとなったがその道中で気になるものを発見したので寄ることにした。そこまで訪問してた寺社のように生垣の中だったため寺社の部類なのかなと思いついてみると、「鳥羽皇后陵 花園西陵」と書かれていた。

神聖な場所のためさすがに中に入ることはできなかったが柵のところまで行き手を合わせた。その後、仁和寺を拝観した。仁和寺は徒然草にも出てくる有名どころの寺院であるが高校時代の自主研修ルートに組み入れようとしたところ却下されたのでぜひ行きたいと思っていた。まず敷地の広さに驚き日以後の山とのコントラストの美しさにひかれた。石庭も個人的には竜安寺に劣らず美しかったし建物の大きさも大きくスケールに圧倒されていた。拝観時間ぎりぎりでも満足に見れたわけではなかったが、その中でも時間を最大限に有効活用でき自分としては最大限に楽しむことができたと思う。その後個人的な用事で京都駅に向かい夕食を食べた後、事前レポートの時点で行く予定だった京都タワーが近いことに気づき急ぎよ訪問することとした。報告会とこのレポートでは京都の移り変わりについて書かないことにしたので触れるのは軽くだが、函館や神戸といった明かりが中心の夜景と違ってちらほら見える明かりとライトアップされた寺院がとてもきれいに見えた。

2 日目は個人的な用事で大阪に行き趣味に費やしたためここでは触れないが遠くにいる友人に久しぶりに会えてよかった。

3 日目は「金閣寺」にも出てくる南禅寺と個人的に訪問したかった神社に行くことにした。南禅寺は金閣寺の作中で主人公に影響を与えた女を見た場所であった。作品に登場した天授庵については寺院内で迷い訪問することができなかったが、国宝である三門などが拝観できた。また、外れにあった琵琶湖疎水の水路閣も訪問でき個人的には南禅寺訪問は満足いくものであった。そして南禅寺からほど近い蹴上の駅から地下鉄に乗ろうと思いついたところ道の横に事前学習の映像で見た琵琶湖疎水の蹴上インクラインがあったので訪問した。現在でも草刈りなど手入れが施されておりハイキングコースにもなっていた。その後高校時代に行った北野天満宮に参拝した。学問のご利益で有名だが個人的にはアイドルの乃木坂 46 メンバーで自分の推しである北野日奈子の聖地としてファンの間では名高く、推し始めた当初から再訪したいと思っていたので来れてよかった。北野天満宮では宝物殿や梅苑など今しか見れない部分を満喫した。その後金木君と分かれ友人の勧めで天満宮からほど近い北野白梅町から嵐電に乗り車折神社へと向かった。車折神社には芸能神社という境内社が存在し数々の著名人の名前が書かれている朱塗りの柵があった。個人的には乃木坂 46 や AKB48 などのアイドル関係の名前を見る目的で訪れたが、境内にはジャニーズや LDH のファンも多くメンバーの名前の部分と一緒に写真撮影している光景もちらほらとみられた。車折神社を後にして自分は桃山の乃木神社へと向かった。乃木神社というと乃木坂 46 の名前の由来となった六本木の乃木神社やその分社の函館の乃木神社が有名であるが京都にも存在することが偶然分かったため訪問した。メンバーの生写真と訪問記録で写真を撮り賽銭を 46 円入れるというファンの間での参拝方法で参拝した。その後友人に報告すると全国に乃木神社が存在することが分かった。

今回の自主研修では設定したテーマとは違う場所も訪問したが、その結果聖地巡礼などレポートに書くことが増え寄り道して予定外の場所に行つてよかったと思った。

## 戦国武将ゆかりの地を巡って

1 部 日本文化学科 2 年 2715111 森川 日菜子

自主研修を行うにあたり、私がテーマとして設定したのは「戦国の世に思いを馳せる」というものである。このテーマの通り、当日訪れたのは主に京都の戦国武将ゆかりの地であった。また、テーマに関わりのある場所以外にも、多くの観光名所を訪れることができた。以下、テーマに即した場所を中心とし、その他印象に残った場所についても記していきたい。

一日目は、主に友人のテーマである百人一首ゆかりの地を訪れた。そのなかにも、戦国期から桃山期にかけて活躍した人物との関わりを見ることができたものもあり、大変興味深かった。まず、最初に大覚寺を訪れた。大覚寺は、弘法大師空海を宗祖とする真言宗大覚寺派の本山である。正式名称は旧嵯峨御所大覚寺門跡で、平安初期に嵯峨天皇の離宮として建立された。写経の根本道場、いけばな発祥の寺院としても有名である。こちらの正寝殿は、桃山時代の書院造建築で、同時代に活躍した絵師・狩野山楽の障壁画も見ることができた。また、今回の研修で五度御御籤を引いたうち、唯一の凶以外を引くことができたのがこちらであったため、印象に残っている。

次に訪れたのは、常寂光寺である。常寂光寺は、藤原定家の山荘・時雨亭があったと伝わる地である。1595年に高僧・日禪が開創した。静寂に包まれたなかに生えた苔や生い茂る木々、一望できる嵯峨野の景色に心が洗われた。また、本堂は小早川秀秋の助力を得て、伏見桃山城客殿を移築したものであるという。戦国武将との思わぬ関わりを伺うことができた。その後、小倉山を散策し、渡月橋を渡った。北海道では未だ咲かない梅や、竹林などを見ることができた。また、さらにこの日は太秦映画村などといった観光地を訪れたため、「京都らしさ」を体感することができた。

二日目は、主に自分のテーマに沿って行動した。まず訪れたのは、京都御所である。京都御所には、豊臣秀吉が造営した御常御殿がある。天皇の日常生活の場として、1589年に建てられた。また、秀吉は同時に紫宸殿の修築も行ったという。事前学習のビデオで観た通りの檜皮葺が印象的だった。

次は、織田信長ゆかりの地を訪れた。まずは、本能寺である。本能寺といえば、1582年に起こった本能寺の変だ。織田信長が家臣の明智光秀に裏切られ、炎の中自害したといわれている、歴史上あまりに有名な大事件の舞台である。豊臣秀吉の命で、現在の場所に本堂が移されたという。境内の信長公廟は、三男信孝の命によって建てられた。信長最期の地として有名だが、実際信長は最期以外にも数度本能寺に滞在しているという。また、宝物館には信長所持の物品が多数保管されている。信長と本能寺の縁の深さを感じた。その後、本能寺の変で焼失した際の本能寺跡地にも行ってみた。ただ「此付近 本能寺址」と書いた石碑が建っているだけで、周りは住宅である。しかし、この場所で信長が最期を遂

げたと思うと、大変感慨深かった。写真を撮り立ち尽くしていると、通りかかる人に奇異な目で見られたため、少し恥ずかしかった。続いて、船岡山にある建勲神社を訪れた。建勲神社は、明治天皇が信長を称え、1869年に創建した。織田信長が、国家安泰・万民安住の大生の神として祀られている。信長は、現在でも大人気の武将だが、100年前といえどもその評価は同じで、その姿が尊ばれたのだと感じた。

次に、血天井で有名な養源院を訪れた。養源院は、豊臣秀吉の側室・淀殿が父・浅井長政の供養の為に建立した。程なく焼失してしまったが、徳川秀忠の正室・お江与の方の願いで伏見城の遺構を用いて再建され、現在に至る。血天井とは、関ヶ原の戦いの前哨戦である、伏見城の戦いで自害した徳川軍の家臣たちの血が染みついた板の間を天井として貼ったものである。本堂は、解説員の方の案内に従って見学した。本堂内には、俵屋宗達と狩野山楽の襖絵があり、それらについても詳しく解説して下さった。血天井には、生々しい手形や足形、ちょんまげ形までもが残されていた。これらの襖絵も血天井も、どれも兵士の霊の弔いのためのものである。血天井は、今でこそ黒々としているが、再建当時は真っ赤で、より生々しいものだっただろう。それを、兵士の供養のために寺の天井に貼るというお江与の方の慈悲深さに、目頭が熱くなった。研修全体を通し一番印象に残り、心を動かされた場所だった。

三日目には、京都文化博物館で開催されていた「戦国時代展」を訪れた。本展では、武将の姿を後世に伝える歴史資料や、戦国期の美術工芸品などが展示されていた。国宝や重要文化財などの貴重な資料も多く、大変見応えがあった。なかでも、洛中洛外図屏風上杉本は、ずっと見たかったものであったため、印象に残っている。また、毛利元就や織田信長、武田信玄など有名な戦国武将の肖像画や、合戦で使用された道具もあり、北海道にはどれもなかなか見ることのできないものであると感じた。戦国時代について知識を深めることができ、さらに、貴重な資料も見ることができたため、大満足であった。常設展示を含め、じっくりと数時間閲覧した。

また、ホテルのすぐ近くにある、粟田神社にも立ち寄った。この神社の境内にある鍛冶神社には、三条宗近と粟田口藤四郎吉光といった刀工が祀られている。どちらも名工として名高く、豊臣秀吉や上杉謙信、織田信長など、有名な戦国武将も所持したという。何気なく立ち寄った場所だったが、テーマとの関連性を感じた場所だった。訪れたいと思っていた場所には二日目までに大方訪れることができたため、最終日は悠長に楽しむことができた。

自主研修を行った三日間を通し、平日頃から訪れたいと思っていた戦国武将ゆかりの地を訪れることができ、単純に幸せだと感じた。また、戦国時代についての知識を深めることもでき、大変勉強になった。さらに、実際に訪れることで、文献などで読むよりも様々なことが分かった。まさに百聞は一見に如かずで、フィールドワークの重要性を理解することができた。この研修期間は大変充実したものであり、有意義な時間を過ごすことができた。卒業研究について考えていくうえで、今回の研修を大いに参考にしたい。また、今後もし京都を訪れる機会があれば、同様のテーマで、さらに多くの場所を訪れたい。

## 積み重ねられた京都の歴史

1部日本文化学科 2年 2715199 八木 一馬

はじめに

まず私は京都を探索するうえでなるべく徒歩で回ることによって現在の京都の街並みや人々に触れることを大切にしたい。また、交通網が発達していない時代の人々がどのような気持ちで寺社仏閣を巡っていたのかを少しでも感じたいと考えた。その結果、感じたことはやはり京都の人は観光客に慣れているということである。道に迷っている人がいると地元の人が自ら話しかけたり、外国の人にも親切に対応したりしていた。また、それぞれを見学して感じた事を述べていきたい。

次に、立命館大学の先生方がお話ししてくださった京都の街並みを批判的に見るという話に興味を持ったのでその点も意識して研修を行った。

本文

まず、私が行った場所は拝観時間などの都合上詳しくは見れなかった場所も含め1日目：知恩院、高台寺、清水寺、五重塔、八坂神社。2日目：神泉苑、清水寺。3日目：平安神宮、京都御所、聚楽第址、二条城、本能寺。4日目：妙心寺、龍安寺、平野神社、金閣寺、北野天満宮。5日目：伏見稲荷大社、豊国神社、方広寺、智積院、養源院。である。主に、私が見て回らなかったのは豊臣・徳川時代にまつわる地である。また、京都の名所にもできる限り足を運んだ。時代の権力者が行った数々の出来事が京都のどのような場所で行われていたのかを見ることができた。

まず、本能寺を見ていく。本能寺は、豊臣秀吉の主君である織田信長が死んだ本能寺の変であまりにも有名であろう。しかし、当時の本能寺の場所は別であり、現在の場所には秀吉の都市計画の際に移されたとされている。さらに、現在の場所に移転された後も何度も焼け落ちている。現在の建物は、町中に無理やり残っているというようにたまたま信長最後の地という売り文句でどうにか頑張っているように映ってしまい少し残念である。ここで、印象に残っているのは大寶殿宝物館で見た信長はアルコールアレルギーで茶道を好んだという話である。展示物の説明に載っていた情報だが信憑性に欠けるように感じた。

次に、秀吉の栄華期に移る。秀吉も茶道を好んだとされ北野天満宮で「北野大茶湯」を開催したのは有名な話である。実際に、北野天満宮に行ってみるとその痕跡はないものの、10月に開催されたことを考えると紅葉や生い茂る木々を見ながら茶を楽しんだことが想像できた。次に、京都御所から聚楽第跡地に徒歩で向かった。後陽成天皇を聚楽第へ招くなど朝廷の権力を上手く利用していた秀吉がどのような気持ちでこの場所に聚楽第を建てたのか想像して楽しんだ。御所から聚楽第址までは、徒歩15分ほどでついてしまう。秀吉は豪華絢爛で金色を好んだとされているが天皇の邸宅のすぐ近くにそのようなものを作れる当時の秀吉の権力の強さや天皇との親しさを感じることができた。秀吉は御所の拡張も行うなど良好な関係であったこともうかがえる。少し、御所の話をすると事前学習で学んだ

御所の入り口である建礼門や鬼門の方向を守る猿ヶ辻、天皇の即位の際に用いられる高御座、その天皇の位置からみて右にある右近の桜の木などを見ることができた。

次に、豊臣秀吉が母の健康を祈願するために伏見稲荷大社を参拝したとされているので、実際に参拝してみた。ここは、千本鳥居で有名であるが、真っ赤なイメージのある鳥居は思っていたよりも色が薄めだった。途中からメジャーではないコースから山頂に登ってみると地元の人に「滅多に人が通らない道だよ。まだ長いけど頑張る」と励まされて交流することができた。あまり整備のされていない道もあり、昔の人もこのような道を歩いていたのではないかと想像すると楽しく登ることができた。参拝が終わると、秀吉が妻の祢々の字を取り名付けたとされる「祢ざめ家」というお店で昼食をとった。HPを見ると秀吉の話が載っているのに、実際は、終始せわしなく店員さんがお客さんを回しており、秀吉をもてなしたという雰囲気はまったくなかった。

次に、秀吉が祭られている豊国神社について。豊国神社の周りには幼くして亡くなった子の棄丸の墓があった智積院がある。智積院は、秀吉の時代に焼き討ちにされており、場所を何度か映している。現在の場所には、家康の好意で再興されたとされている。他にも、側室の淀殿の父浅井長政を供養する養源院がある。少し離れたところには正室であるねねの眠る高台寺などもある。また、本人の墓である豊国廟もある。豊国神社は、後陽成天皇により祀られたとされているが、その後徳川氏により破却された。現在の神社は明治時代に出来たものである。その隣には、方広寺鐘銘問題で有名な鐘があるが、修理中で拝見できなかった。豊国神社の人に尋ねてみると、「まったく話はきいていない」ということだった。この地は、豊臣家と徳川家により短い期間で多くの変化が起きていることが分かった。また、宝物殿には秀吉ゆかりの品がいくつかあった。その中でも一見興味を引くのは「豊太閤御歯」というもので、秀吉の実際の歯とされている。それだけ秀吉が尊ばれていたのか、一度神社が廃れていることを考えると本物か疑わしいものである。

最後に、二条城について。家康により築城された二条城は、豊臣秀頼との会見の場になり、その後の大阪冬の陣・夏の陣の際には家康がこの場所から出陣したとされている。時代が流れ、大政奉還が表明されたのもこの場所で、その後は離宮となる。このように、豊臣家から徳川家、そして天皇家へと覇権が移る瞬間を見てきたのがこの二条城なのである。最後に

このように京都の町を見ていくと時代の流れにより、姿形は変わっているものの歴史の節目で重要な役割を担っているのは間違いないだろう。そのようなことを意識しながら、京都を歩くのはとても有意義な時間だった。実際に、残っているものではなく歴史の中に埋もれてしまったものを掘り起こして想像することは容易なことではない。しかし、実際にその場所を歩きその当時の人々の気持を想像することは歴史を学ぶ上でとても重要であるように感じた。京都らしさや日本風により観光客を招くことは、決して悪いことではなく、それだけ影響力や積み重ねてきた歴史があると捉え、それらの歴史をしっかりと見極める目を養うことが大切だと感じた。

# 「源氏物語」の世界に触れる

1 部日本文化学科 2 年 2715202 山口 真里菜

## はじめに

京都へは、高校時代の修学旅行で行ったきり、自分の知らない土地で一人で歩くのは、ほぼ初めてだったので（個人行動といっても、私の場合、一人で行動したのは、自主研修 1 日目の後半の半日ほどだけであったが）、とても緊張した。しかし、「知らない」土地という分、驚きや発見も多数あり、有意義な体験をすることができたと思う。今回の研修旅行の自主研修で、私は「源氏物語」に強く関心があるので、「源氏物語」に関連する様々な施設を見学してきた。

本文では、その中でも特に強く印象に残った、蘆山寺、宇治源氏物語ミュージアム、風俗博物館について記述していく。なお、今回の研修で、私はほかにも、「源氏物語」に関連する施設として、下鴨神社と野宮神社へ訪れた。しかし、下鴨神社は「源氏物語」<葵>の巻で、葵祭の日に光源氏が行列に参加し、光源氏の正妻葵上と彼の愛人である六条御息所とが激しいバトルを繰り広げた、ということよりも、縁結びの方を推していた印象があり、野宮神社は光源氏と六条御息所が最後に会った場所として推していたが、私の下調べが足りず、訪れたときはすでに閉まってしまっており、あまり詳しく見学することができなかった。したがって、これらの両施設については今回のレポートでは割愛する。

## 蘆山寺

冒頭で挙げた 3 つの施設のうち、最初に私が訪れたのは蘆山寺である。

ここは、紫式部の邸宅跡として有名な場所であるが。もともと蘆山寺は、「日本蘆山」と号する圓浄寺の大本山で、正式名称は蘆山天台講寺という。938 年に建立された。紫式部の生年には諸説あるものの、おおよそそれより 30 年くらい前のことと考えていいだろう。ちなみに、現在残っている建物は、1788 年の「天明の大火」の後に建てられたものである。

自主研修 1 日目、班員全員で京都御所へ訪れた際に、敷地が隣ということで、私一人だけ離脱し、蘆山寺へ走っていったことを覚えている。というのも、地図上では、京都御所と蘆山寺は、先ほども述べたように、道路を一本挟んで隣のため、非常に近くに見えるのだが、実際にグーグルマップで検索してみると、その距離は 1.1km あったからだ。

蘆山寺につくと、まず目を引いたのは百人一首にも選ばれている、紫式部の「めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲隠れにし夜半の月かな」の歌碑であった。また、式部の筆塚もあり、彼女との関わりを感じさせるものがあった。しかし、それだけではなく、初めて源氏物語を英訳した、アーサー・ウェイリーについての展示もなされていた。また、本堂庭園（源氏庭）には白砂とコケに桔梗が植えられていた。残念ながら時期ではなかったため、桔梗は咲いてはいなかったが、それでも美しかった。次回はぜひ、桔梗の咲く秋ごろに訪れてみたいと思った。

## 宇治源氏物語ミュージアム

次に、宇治源氏物語ミュージアムについて記述する。恥ずかしながら、私は地図を見るのがすごく苦手なので、前章でも触れたグーグルマップを確認し、歩いていたのだが、ミュージアムへの道が、私の住み暮らす札幌のそれよりもとても狭く、本当にこの道であっているのか不安になったが、その狭い道から、西洋風の顔つきをした人が 2, 3 人出てきたため、確信をもって進むことができた。

最初に私が見たのは、企画展示「江戸時代の源氏物語」である。ここでいう「江戸時代の源氏物語」とは、井原西鶴が著した「修紫田舎源氏」のことである。この作品はしばしば「源氏物語のパロディ」と言われることがある。展示場には、歌川国貞、豊国の筆の錦絵やかるたが展示されていた。もちろん、江戸時代に描かれたものなので、その絵柄は絵巻物でなく浮世絵に近いと感じた。

また、源氏物語終盤の、宇治十帖を人形劇にした映画も上映されていた。正直な所、私はその人形があまり可愛いとは思えなかったが、楽器を演奏するシーンや男女の逢瀬のシーンまで巧みに表現されていた。

常設展示は、丁寧に粗筋から説明されており、源氏物語についてあまり詳しく知らない人でも楽しめると思った。

## 風俗博物館

最後に、風俗博物館について記述する。当初は行く予定ではなかったが、調べてみると、丁度源氏物語に関する展示がされているということで興味がわき、急遽訪れることにした。「博物館」と名前がついているものの、ビルのワンフロアで、あまり大きくないところではあるが、展示物はとてもハイクオリティであった。

光源氏が、自分のお気に入りの姫君を住ませた「六条院」の「春の御殿」がミニチュアで再現されていた。また、源氏物語がメインではあるが、それに限定せず、竹取物語でかぐや姫が月に帰っていくシーンだとか、年中行事や身だしなみや遊びといった当時の貴族の風俗が再現されていた。また、十二単の着物の重ね方、「重ね目」について展示されていた。春夏秋冬の代表的な重ね目に加え、源氏物語に登場する代表的な姫君の重ね目が解説付きで展示されていた。

私は人形やミニチュアが大好きなので（この人形は非常に可愛らしかった）、私の他に誰も見学者がいなかったこともあり、歓声を上げながら写真を撮ったことを覚えている。

## 終わりに

これらの 3 施設を巡ることを通し、オリジナルの源氏物語だけでなく、その時代にその時代の人が見たであろう風景を見て、空気を感じられ、後世につながっていった源氏物語、日本の外に出ていく源氏物語のことも知ることができ、とても素敵な体験をさせて頂いた。

# 日本文化特別演習での学び —京都らしさに目を向けて—

1 部日本文化学科 2 年 2715204 山田 凌也

平成 29 年 2 月 26 日から 3 月 3 日に日本文化特別演習が行われた。この期間の中でも、自分の興味・関心を追えた自主研修で学んだことについて述べていく。

私は今回の自主研修にあたり、多くの人にある京都のイメージである寺社仏閣などの歴史ある建築物とその裏に隠れたモダン建築といわれるような西洋の文化を取り入れた近代以降の建築物、この二つの共存が京都の観光都市としての成功している理由なのではないかと着目し、自主研修の計画をたてた。そこでの学びを建築物の年代を二つに分けて述べていく。

まずは、歴史ある建築物から述べる。最初に述べたいのは京都御所である。ここでまず、自分の目で確かめたかったのは特別演習の事前ガイダンスで DVD から学んだ檜皮葺の屋根である。京都御所では紫宸殿や清涼殿で檜皮葺の屋根が見られるが後述する上賀茂神社や、北野天満宮でも同様に見られる。この檜皮葺の屋根は 30 年ほどで張替が必要であり、今では少なくなった職人の技により再生される。全国各地でこの檜皮葺の屋根は見られるものの、京都が一番多く檜皮葺が見られる地である。そのような事前学習を踏まえ、実際に京都御所のなかにある檜皮葺屋根実物模型を見てみると、その細かな作業に驚かされた。竹釘で打たれた何重にも重ねられた檜皮の屋根をまじかで見ることができ、普段近くで見ることのないものなのに、高い技術と労力をかけて、作られていることに改めて驚いたと共にそれを現代まで維持している点で、やはり、文化財の保存の観点ももちろんあるだろうが、観光都市として、上手く利用しているなども思わされた。

北野天満宮でも檜皮葺が使われていたのだが、コケが屋根一面に生えていて同じ檜皮葺でも劣化によってこれほど受ける印象が変わるものなのかと驚いた。

同様に上賀茂神社と下賀茂神社にも訪れたが、この二つはどちらも、檜皮葺の張替を迎えており、檜皮葺の奉納をすることが出来たので、実際に下賀茂神社の方で奉納した。自分の納めた檜皮葺が実際に屋根に使われて、後 30 年ほど使われていくのかなと思うと、言葉を選ぶと感慨深いな、と感じたし、言葉を選ばないなら興奮した。

また、当初の研修の予定にはなかったのだが、通り道にあり特別拝観が出来るということで、妙法院に寄ったのだが、ここは本当に良かった。学生のアルバイトなのか、ボランティアなのかは分からないが各所で説明をしてくれて、今回の研修で見た建築物の中では一番理解が深まった。特に印象に残っているのは庫裏の上に広がる建築であった。庫裏とは寺の台所のことで、その煙を逃がすため上には空気の通る穴があるのだが、加えて階段があり、この高い天井は、物見やぐらのような意味を持ち、そのためにあるものだと教えてもらった。これは、あくまで余談だが、京都では様々な人種や年代の人と会い、そこも魅力的に映って

いたが、この妙法院では 5 人ほどのグループごとに説明を受けるのだが、同じグループ内に、きれいな格好をしたオネエ様(変換ミスではない)がいらっしやって、それには驚いた。

次に、近代の建築物について述べていく。一つ目に、現代の建築を感じさせてくれた陶板名画の庭。ここは 1994 年に安藤忠雄氏によって作られた陶板に描かれた有名な絵画の数々が飾られた場所である。安藤氏は昨年完成した札幌にある北菓楼の本館も手掛けた人であり、この陶板名画の庭はすべてで作品は 8 点なのだが、その作品の見せ方が独特で壁と壁の間から見ることができたり、絵画の真下からみたりと、絵画を様々な見方をすることが出来るような作りになっており、とても 20 年ほど前に作られたものとは思えない近代的な建築物となっていた。

他の近代建築物では、明治時代に作られた京都文化博物館がある。ここは、旧日本銀行京都支店を利用している。周囲は京都市の中心に近いので高いビルや近代的な建物が多量の中、中期の建物が目を引く。この中期の建築物を現代の観光地に利用し、時代の違いを感じさせることで、その展示物と共に魅力を増幅させているのだな、と思った。

そのほかにも、京都駅は近代の建築物の代表と言えるものであろう。東西に長く、その西側には 171 段の大階段があり、駅の上方は大きな空洞が広がっている。他に見ない未来的な建物の作り方はあの独特な形の札幌ドームを作った原広司氏がデザインしており、納得するところがあるが、京都らしさといわれる古き良き日本の建築様式からはかけ離れているように思われた。しかし、実際には、高さの制限やガラス張りで広々と感じさせられる作りなどを考慮した、周りの景観を損なわないように作られたものであることが分かった。

以上のように京都には、古くからある歴史ある建築物と近代にできた新しい建築物が両方多く見られる。この特徴は私たちが住む北海道でも多かれ少なかれ見ることはできるが、京都のような限られた空間のなかでその両方が見られる点において、京都は大変優れており、観光都市として、成立することに大きく一役を買っていることを学ぶことが出来た。

私は公務員を目指しているが、札幌市、延いては北海道が発展していくうえで欠かせない「らしさ」の発見、そして、その「らしさ」を進展させるための方法はどのようなものなのか、残りの大学 2 年間で自分なりに見つけるために学びを深めることが必要であると感じたことが今回の日本文化特別演習で私が得た一番のことである。

最後になるが、今回引率して下さった井野先生、村中先生、ガイドの丹治さんや大学の先生方には本当にお世話になり感謝の意をここで書かせて頂くとともに、この報告書を読んでいる来年度以降の日本文化特別演習を受けようかと迷っている学生の方にはぜひ、参加を勧めたい。勿論、教養は深まる上に、大なり小なり今後の大学生活やその後を変えるきっかけの一つとなるものであると日本文化特別演習に参加した一人として述べさせていただきます、最後の言葉とする。

## 怨霊飛び交う都 京都

1 部日本文化学科 2 年 2715206 横田 健太郎

今回の自己研修では京都に数ある神社の中でも、特に妖怪、怨霊に関係のある神社・寺を中心に巡った。話には聞いていても実際に行ってみるとまた別の側面からそれらの場所を見ることができたので、自主研修一日一日を振り返りながら研修をまとめる。

研修三日目(自主研修一日目)は御所に行った後、晴明神社、北野天満宮、上御霊神社、下御霊神社を訪れた。晴明神社は平安の陰陽師安倍晴明を祀る神社であり、魔除け、厄除けなどにご利益がある。境内には本殿のほかには晴明公が湧出させた井戸、厄除けの桃など御利益のあるもののほか、晴明公が式神を封じていたとされる一條戻橋のミニチュア(現在の一條戻橋は晴明神社の近くに架けられている)、晴明公の逸話が書かれたパネルなどが展示されており小さな博物館のような感じを受けた。

晴明神社の参拝を終えた後北野天満宮へとバスで向かった。北野天満宮は菅原道真を祀る神社であり、学業成就に御利益がある。菅原道真は死後、怨霊となり、天変地異を引き起こし、その御霊を鎮めるために北野天満宮が建立されたとされるが、現在の北野天満宮にはそのような感じはあまりなく学問の神様としての道真公を祀っている感じがした。ちょうど梅の花が咲く季節だったため境内には梅の花がきれいに咲いていた。ここには本殿のほか豊臣秀吉が築いた御土居の跡や宝物殿などがある。宝物殿では、期間限定で太刀「鬼切安綱」が展示されている。鬼切は元々髭切のいう銘だったが源頼光四天王の一人渡辺綱が鬼(諸説あり、後述する橋姫ともその配下の鬼神ともいわれている)を切ったことで鬼切になったといわれている。

その後は上御霊神社・下御霊神社に向かった。かつて疫病の流行は御霊(非業の死を遂げた人の霊)が原因であると考えられ、それらを鎮めるために二つの神社は建立された。その為どちらの神社も早良親王、橘逸勢、吉備真備など都を左遷され非業の死を遂げた人物を祀っている。上記二つの神社とは違い観光客はおらず、聞こえるのは風の音や、木々の揺れる音のみだった。空気もまた上記二つとは違っており、騒いではいけない神聖な場所であると感じた。どちらの神社も、老朽化が進んでおり、建て替えのための基金を集めていた。地元の人ではないので基金の寄付は出来なかったが、歴史を絶たないためにもこういう神社も残していくべきと感じた。

研修四日目(自主研修二日目)は鞍馬寺、貴船神社、橋姫神社を訪れた。鞍馬寺まではホテルから岩倉方面へ向かうバスから叡山電車に乗り、鞍馬駅から鞍馬山を登ることでたどり着ける。本殿へ向かう道は坂ではあるがそこまで急ではなく、いろいろ見ながらでも1時間くらいでたどり着ける。本殿に祀られているのは尊王であり尊王は千手観音、毘沙門天、語法魔王尊を指す。本殿から奥の院に向かう道中に霊宝殿があり、現在は鞍馬山博物館として鞍馬山の文化財と自然に関する展示がある。源義経と鞍馬天狗に関する展示もあり、奥の院に向

かう前に見に行くと損はないといえる。奥の院までには源義経ゆかりの場所が多くあり、義経公が山を下りる際離れることを惜しみ、背を比べたとされる背比べ石、鞍馬天狗と義経公がはじめて会ったとされる僧正ガ谷不動堂などがある。奥の院では語法魔王尊を単独で祀っている。非常に静かな場所であり、鞍馬山が修行の場というだけあり瞑想している人が複数いた。私もここで少し目をつむり休憩したが、心が静まり、とてもいい気持ちになれた。

貴船神社は五日目にも訪れたため、後述する。橋姫神社は叡山電車で出町柳まで行き、そこから阪急電車で宇治駅まで行き、宇治橋を渡ったところにある。この神社に祀られている「橋姫」は水辺を守護する神とも、嫉妬に狂った女が貴船神社で神託を受け(貴船神社は丑の刻に参拝をすると願いがかなうとされる)、宇治川の水に二十一日つかり生きたまま鬼に変化したものとも言われている。縁切りに御利益があるのでカップル、夫婦がここを訪れるのも、目の前を通るのもタブーとされている。今まで訪れた神社では一番小規模であるが、鬼神を祀ることで鎮めているとするならば小さな神社も大事なのかなと考えた。

研修五日目(自主研修三日目)は崇道神社、首塚大明神、前日に引き続き貴船神社を訪れた。崇道神社へは岩倉方面へ向かうバスから、大原へ向かうバスを乗り継いでいける。ここに祀られている早良親王は桓武天皇の弟で上御霊神社・下御霊神社にも祀られているがここでは単独で祀られている。早良親王は藤原種継暗殺の首謀者の罪を兄にかぶせられ淡路に流罪になる際無実を訴えながら絶食死したとされる。その後兄桓武天皇の親族が次々と謎の死を遂げ、都では洪水が起き、疫病が流行した。桓武天皇はこれを早良親王の祟りとし、都を長岡京から平安京に都を移し、早良親王の御霊を鎮めるために崇道天皇の追称を与えた。崇道神社は朝にもかかわらず薄暗く、静かではあるが妙に息苦しい場所であり、長居はできないと感じた。観光目的では訪れない方がいいといえる。

崇道神社の参拝を終えた後、叡山電鉄に乗り、貴船神社に向かった。貴船神社は水の神タカオノカミノカミおよびイワナガヒメノミコトを祀り、心願成就、縁結びに御利益がある。水の神様を祀るだけあり、本宮では御神水をくむことができ、水に浮かべると結果が出るおみくじがあった。中宮には貴船神社に復縁を願った和泉式部の歌碑がある。奥宮は前述の橋姫が参拝した場所で、橋姫誕生にも関係があるが、そういったことを願うのは人であり、貴船神社はあくまで願いをかなえたに過ぎないのではと感じた。

自主研修の最後に向かった首塚大明神は京都市と亀岡市の境にある神社で、平安の大妖怪酒吞童子の首が祀られている。酒吞童子は死の直前自分の行いを反省し、首から上に病を持つ人を助けたいといったことから首から上に御利益がある。ここも崇道神社同様重苦しい空気が流れ長居はできない場所であると感じた。

今回巡った神社、寺の中には異界とつながっているような、理由はわからないが長居できない場所が何か所かあった。しかしそういった不思議な場所があるのも京都の魅力の一つであり、千三百年の歴史を持つからこそ、そういった場所の魅力が増すのだと感じた。今回訪れた場所以外にもそういった場所はたくさんあるので次京都を訪れる機会があったら、祟りに気を付けながらそれらの場所も訪れたいと思う。

## 京都の神様に会いに行く

1 部日本文化学科 2 年 2715111 吉川 圭祐

私は今回の研修旅行のテーマを、「京都の神社を巡り、その神社についての理解を深める」こととし、3日間の自主研修で京都の主要な神社を巡った。そこで私は神道における信仰の形、神様という概念について深く考えることができた。本来であれば参拝した神社についてひとつひとつ仔細に述べていきたいところではあるが、参拝した全ての神社を紹介することはページの都合でできないので、今回は私が訪れた中からいくつか選定して述べさせていただきます。

まず伏見稲荷大社について。京都の主要な観光地ということもあり、平日にも関わらず駅を降りたところからすでに多くの観光客で賑わっていた。境内までの道のり、また境内にも多くの出店があり、観光地としての有力さを物語っていた。境内も多くの観光客で賑わっていた。海外からの観光客も多く、ろくに拝殿を拝むこともなく鳥居の写真を撮りまくっている人の方が多数派であった。もしかすると信仰上の都合があるのかもしれないが、郷に入らば郷に従え、拝殿を拝むくらいはしてもいいのではないか。多分宗教上の理由ではなくて、参拝という考え自体知らないだけだとは思っているのだが。

人混みと耳から入ってくる他国の言語にもみくちゃにされ、危うくなを目的にここまで来たか忘れるところだったが、本殿を超えて稲荷山をしばらく登っていくと、先ほどまでの混雑は嘘のようになくなり、神社に本来あるべき静謐さが現れてきた。

山頂までの道程は、階段こそあるもののほぼ登山のそれであり、道一杯に立ち並ぶ鳥居も最初は珍しかったものの、ウン百ウン千の鳥居をくぐるうちに次第に有り難さを感じられなくなってきたりもしたが、山頂までの道のりで山に宿る神様の存在は強く感じる事ができた。伏見稲荷大社を訪れる前は、すっかり観光地化してしまっているとはばかり思っていたのだが、実際に境内を隈なく散策することで、ここも神をまつる社であることを実感したのだった。

八坂神社も、広い通りに面していることもあって観光客の姿がたくさんあった。だがやはり、ご祭神にまで興味を持ってきている人というのは、外国人日本人問わず少なかったように思う。

日本人の場合は興味の問題としか言いようがないが、外国人の場合はどうだろうか。

もちろん日本の神道や仏教やらに興味を持って日本に来ている人は少ないだろうが、境内を見てみると、だいたいどの神社、あるいはお寺でも、その寺社の大まかな成り立ちなどは英語の記載があっても、摂末社や小さな拝殿などの説明は日本語のみのものが多かった。日本人すらろくに読まないものを外国人がそこまで読むことはないだろう、という話なのかもしれないが、それゆえにそれがなんなのかもよくわからないまま写真だけ撮って終わり、という状況が生まれているようにも思える。

たとえ読まれることがないとしても、振る舞いとして海外にも自国の文化を知ってほしいというスタンスをとるのは、とても大切なことなのではないか、と私はここで感じた。

ちなみにここの御祭神は有名な素戔嗚尊（すさのをのみこと）と櫛稲田姫命（くしなだのひめのみこと）、そしてその二人から生まれた八柱の御子神であった。撰末社にも有名な話に登場する神が多く、楽しんで参拝することができた。

菅原道真が祭られている北野天満宮にも足を運んだ。境内には梅や桜がすでにちらほらと咲き始めており、また牛をかたどった像が多く見られた。これは北野天満宮で牛が神使となっているためだという。

学問の神様として広く知られている道真であるが、農耕、芸能、厄除け、さらには冤罪を晴らすというもので、実に様々な神徳を持っていた。こんなにも多くの神徳を持つようになったのは、人々の信仰、祈りが少しずつ形となった結果なのではないかと考える。

また境内の撰末社にも、道真について知ることのできるものが多く存在していた。例えば、菅原道真の母を祭った伴氏社。道真の母親は名のある人物ではないと思われるが、道真と共に境内で祭られ、子供の成長と大成を願う母親たちに信仰されているという。また道真が告げた「私の魂を祭るべき地には一夜にして千本の松を生じさせる」という言葉から、一帯に生えた松に宿る神霊を祭った一夜松神社も存在した。このように、信仰というものは、主の祭神だけでなく、その周囲の人間や物、言葉にまで及ぶのだということを知ることができた。

上賀茂神社では、いろいろと興味深いものを見ることができた。その一つが立砂である。立砂とは、神代の昔に祭神である賀茂別雷神が最初に降臨した神山に因んだものであり、細殿という拝殿の前に、砂で作られた円錐状の山が二つ並んでいる。信仰の対象を模したものを設けてそれに向け祈りを捧げるのは、仏教やキリスト教などをはじめ、実に多くの宗教で見られるものである。だが神道では御神体に直接お目にかかれることは少ないので、こうした形ではっきりと信仰の対象を見ることができたことを新鮮に感じた。

もう一つ気になったことが、上賀茂神社内の末社の一つ、梶原神社である。祭られているのは瀬織津姫神で、下の病の神様とされていた。なぜこのような神徳があるのか、その時スマホで調べてみたが、詳しいことはよくわからなかった。また、あの有名な天照大御神との関係があるとされている一方、日本書紀や古事記には登場しないなど、なにかと謎の多い神様であった。瀬織津姫神については、いずれじっくりと調べてみたいと感じた。

そのほかにもこの神社には、一つの根より大樹が何本も伸びていることから、家族の絆や家内安全に神徳のある睦の木や、陰と陽が融合し実った姿を現す願い石（陰陽石）など、ほかではあまり見られないような珍しいものが祭られていた。

今回様々な神社を巡り、私は、信仰の幅広さ、そして神道の懐の深さを改めて感じる事ができた。この経験は今後の学習にもしっかりと役立てていきたい。

## 体感する京都

1 部日本文化学科 2 年 2715211 唐澤 実央

京都演習の自主研修としての3日間を自分の興味関心があるものを中心に、京都の昔ながらの文化や歴史を体験することができた。

1 日目はまず京都御所へ行き、その広さと美しさに驚いた。紫宸殿に足を踏み入れた瞬間には空気が神聖なものに感じ、静かにしていると砂利の上を歩く音や、水が流れる音が気持ちを落ち着かせ、心が安らぎいだ。庭の美しさも加わり日本の美がすべてつぎ込まれているように思えた。代々の帝が、今自分が歩いた道を歩き同じ景色を見ていると思うと、非現実的でありながらそれが今も受け継がれている現実感との両方で実に不思議な気持ちだった。

その後は宇治市にある源氏物語ミュージアムへ向かった。私は源氏物語にあまり詳しくなかったが、わかりやすい展示パネルや模型、演出展示のおかげで、物語の舞台や背景となっている平安時代の文化について理解することができた。実物大の人形模型で物語の有名なシーンを再現している展示では、当時の建物のつくりや着物、道具なども一緒に再現されており、まさにタイムスリップしたようだった。源氏物語の知識が少なくても、当時の暮らしを垣間見ることができ、源氏物語について学ぶきっかけにもなると思う。そんな中、私が一番興味を持ったのは源氏香という組香である。当時から続く貴族の遊びのルールを詳しく知ることができ、さらに源氏香の図とそれについての源氏物語の段の名前は初めて知ることだったので興味深かった。それぞれのお香の配合や効果も詳しく載っていたので、是非、香りや組み合わせを覚え自分の知識としたい。

初日の最終日には稲荷大社へ行った。日が暮れる前に到着し、千本鳥居の朱色に圧倒された。奥まで続く鳥居を写真ではなく自分の目で見て歩くことができたことに感動した。また、わりと最近に奉納された鳥居がたくさんあったので、今でも愛され続けている神社であることも実感することが出来た。一周し、ふもとまで降りてきた後に稲荷大社付近を見て回り、暗くなって灯籠が灯されるのを待ってから再度千本鳥居の中へ入った。空が明るいとときは雰囲気が一変し静かで幻想的だった。灯籠の明かりに照らされた鳥居は昼間とは違う影のある朱色を見せ、その美しさは息を呑むほどだった。稲荷大社は今回の京都演習で私が最も訪れたい場所だったので昼と夜で異なる姿を堪能し満足できた。次回は山頂まで登ってみたい。

2 日目、「変身処 舞香」で舞妓体験をした。おしろいをしてカツラをつけて花飾りをつけてもらおうと本当に舞妓さんのようで、成人式で振袖を着たときとは全く違い新鮮だった。プロの方にしてもらおう撮影が1回と、そのあとに60分間の自由撮影ができる時間があり、お部屋のセットや小物を使い、舞妓体験を楽しむことが出来た。メイク落としは各自だったのだが、おしろいを落とすのは本当に大変だった。一回では落ちないし、顔全体なので

量も多い。昔からの文化をそのまま受け継いでいる現役の舞妓さん達を尊敬する。

体験が終わって現代風に化粧をし直したあと、京都国立博物館へ向かった。1日目の源氏物語ミュージアムで絵巻物の復元方法についても少し学べたので、そのあとに博物館の展示で実際に復元された色鮮やかな絵巻物や屏風を見ると、当時も同じように色鮮やかであったのだろうなと思うと同時に、当時のまま繊細な色を見させてくれる復元師の方の技術は本当に凄いものだなと思った。他に、仏像の玉眼がどのような構造になっているかを解体しながら理解できるものと、当時使われていたものを再現した筆を使い水墨画を描くことができる二つの体験ブースがあった。他の場所では絶対にできない体験をさせて頂いたので足を運んでよかった。事前に調べていた雛祭りについての展示をメインに見るつもりだったが、予想以上に学びと発見が多く充実させることができた。

3日目は金閣寺へ行った。雨だったのでホテルの近くからタクシーで向かったのだが、到着するまで運転手の方にたくさん興味深いことを教えて頂いた。特に八坂神社のお正月の伝統的なお祭りのをけら詣りは初めて聞いたので面白かった。移した火を消さないように火縄をくるくると回しながら持ち帰った「をけら火」を神棚の灯明に灯し、雑煮を炊くなどして新年を祝うそうで、人生で一度は京都で新年を過ごしてみたくなった。

金閣寺に着く頃には雨も止み、綺麗な姿を見ることが出来て感動した。ここまでひたすら黄金に輝く寺はこの他には無いと実感した。3日目までにみた色々なお寺や神社を見てどこの庭もすごく丁寧に手入れがされていて抜かりがないなと思っていたが、金閣寺ではそれをさらに強く感じた。滝の音までが自然な人工物のように、完璧だなと思った。雨が降ったあとで木々の匂いも増していたように感じ、心地よかった。

さらに、最終日なので思い切って人力車にも乗ってみた。30分を2人で9000円と、やや高めのように思っていたが実際に乗ってみると車夫さんの知識量が物凄く、話も面白いので30分も一瞬で値段の倍以上の時間を過ごすことが出来た。私達が北海道から来ていることを話すと、札幌の円山公園は京都の円山公園に似せて作られていることを教えていただいた。円山公園と動物園と神宮の位置関係、さらには碁盤の目という共通点に気付かされた時には大興奮だった。札幌は京都の都を再現したものだと聞き、京都をより近いものと感じた。ルートの最後には、今も尚舞妓さんの街である宮川町へを通ってもらった。当時の空気と、舞妓本来の仕事を守るために観光客を寄せ付けないよう地図には載っていないらしい。運良く舞妓さんの後ろ姿を見ることができ、とても貴重な体験ができた。車夫の武田伸也さんには、改めてお礼の手紙を送ろうとおもう。

たった3日とは思えないほど濃く充実した研修になった。実際に京都にきて確実にあった知識、新しく知った知識をこれからさらに学び、日本の美しさについて理解を深めていきたい。

## 京都研修の振り返りと京都ならではの気づき

2部日本文化学科 2年 2815109 大西 雪乃

今回の日本文化特別演習は、例年より人数がとても多く、空港からホテルに送迎するバスに乗り切れない事態となった。私含め9名はキャリーケースを運びながら公共交通機関を使いホテルに向かった。乗り換えが大変であったが、バスでは見られない景色や、並走する電車を見ることができたので、良い思い出となった。1日目は移動で終わった。

2日目は、立命館大学と平安女学院大学の先生方と共に、二条駅周辺の開発や東山南部の歴史や魅力を学んだ。北海道に住んでいるとなかなか知ることができない、とても新鮮で貴重なお話を聞いた。私がこの日感じたことは、現代では利点がなくとも歴史を伝えるものは残しているということだ。それがいわゆる「京都っぽさ」につながるのだが、長い間天皇が暮らしていたという深い意味がある歴史を持つ京都だからこそ可能なのだと考えた。京都はどこで写真を撮っても美しく写ると思ったので、街全体が観光地化していると感じた。この日の夕ご飯は、「Restaurant NINJA」で過ごした。店員さんは皆忍者になり言葉遣いは忍者らしく、忍術という華麗なマジックを披露したりと、忍者が好きで日本にやってきた外国人の方は絶対感動するであろうと思った。お店の名前から、私は和食のメニューなのだと思い込んでいたが、今まで食べたことのない和中洋織り交ぜた多彩な料理が出てきてとても新鮮な気持ちになった。

3日目から5日目は自由研修であったので、事前調査の結果、無駄な時間無く過ごすことができた。3日目はまず陰陽師で一番有名な安倍晴明を祀る晴明神社へ行った。晴明神社は堀川通にある二条城を北に過ぎていくとぽつんと現れる。鳥居をくぐると晴明グッズを販売する小さな小屋があり、そして細い道路を挟み、本殿がある。この神社のあらゆるところに五芒星や四神が描かれていたり厄除けの意味がある桃の実の像がおかれていたり、安倍晴明にかかわるものが全身で感じられる場所であった。次にアーケード街で有名な錦市場に行った。海外からの観光客でひしめきあっていた。錦市場には、京都らしい和風のアクセサリ屋さんや、わらび餅のような甘味処はもちろん、生魚を売っているお店もあった。ここでは私は食べ歩きをすることにした。串に刺さったかまぼこや天ぷらなど片手で食べやすいものが多く、目についた美味しそうなものをたくさん食べてしまった。錦市場で特に印象に残っているのは、八百屋さんに売っている野菜や果物の産地が全国から来たものであったことだ。北海道で売っている野菜は北海道産の食材ばかりなので、愛知産や長崎産のものが同じ棚に並んでいる光景はなかなか見れないと思った。続いて京都駅に行き、生八つ橋以外のお土産を買いそろえた。次に徒歩で京都国立博物館に行った。お土産などの食べ物は館内に持ち込み禁止でロッカーに預けなければならなかった。さらにメモするために持っていたボールペンも使用禁止で、鉛筆でないとだめだそうだった。しかし入館料は260円と意外と安かった。閉館の2時間前に行ったので人が少なく、ゆっくり

見る事ができた。陶磁と絵巻物の展示が主で、ほとんど京都周辺で発掘されたものらしい。北海道の博物館ではなかなか見れない銅鏡や銅鐸がたくさん展示しており、ここでも歴史の深さを実感した。この日の最後は祇園に行き、八坂神社に参拝した後、念願だった抹茶のパフェを食した。抹茶の濃さに驚いたがとても絶品であった。

4日目は移動距離が凄まじかった。最初に伏見稲荷大社に行き登山をしながら転々と立っている祠を見物した。途中まではスロープで歩きやすかったのだが、後半になると階段ばかりで急に疲労感が増した。写真でしか見たことがなかった千本鳥居を目の前にして、稲荷山のパワーに圧巻された。次は京都御所に行った。御苑から御所に入るまでの距離がとても長い砂利道で、その時点でかなり疲れた。しかし、御所に入って天皇が過ごした御座や御殿を見物し、スケールの大きさに驚くばかりであった。是非とも御殿の中も見てみたいと思った。次に北野天満宮を参拝した。ここは観光客で溢れかえっており、期間限定の梅の庭が有料で拝庭可能であった。北野天満宮は私が必ず行きたかったスポットの1つである。なぜなら、期間限定で有名な日本刀が公開されていたからである。昨年、「刀剣乱舞」という、日本の刀剣が美青年に擬人化されたゲームが大ヒットし、キャラクターの元になっている本物の刀を観に博物館や寺社に出向く若い女性が急増した。北野天満宮の宝物殿で刀が展示されていたのだが、有料にも関わらず、境内ではあまり見かけなかった若い女性が宝物殿に集まっていた。宝物殿の入り口には公開されている刀が擬人化されたキャラクターのパネルが置いてあった。次に金閣寺へ行った。天気は少し曇っていたが、池に映った綺麗なさかさまの金閣寺が見ることができた。入場券がお札なので、普通の入場券に比べてかなり存在感のあるものだと思う。この日の夕ご飯は河原町のお好み焼き屋さんで様々な具のお好み焼きを食べた。

5日目の最初は私がとても行きたかった東映太秦映画村に行った。私は時代劇をよく観るので外せない場所であった。高校の見学旅行でもここに来たのだが、その時よりお客さんが何倍もいた。その理由としては私も含まれるが先ほどの刀剣乱舞のアニメ版のイベントやパネル展示が行われていたからだ。村内のお土産ショップでも日本刀関連のグッズが揃えられていた。村内の食事処ではアニメとコラボしたメニューがあり、それを頼むとオリジナルグッズがもらえる。お客さんのほとんどが若い女性であった。もちろん映画村独自の殺陣シーンが体験できるイベントや時代劇撮影の裏側解説など、すべて東映の俳優さんが行っているのも、ファンにはたまらないものであった。次に嵐電嵐山本線に乗り、嵐山へ行った。この嵐電も刀剣乱舞とコラボしており、主要駅でスタンプラリーが行われていた。このスタンプラリーは京都に行ってから知ったのでスタンプはすべて集めることができなかつたのが心残りだ。嵐山では竹林に少し踏み入り、声の響き方の違い気づいた。

6日目の発表会はかなり緊張してうまく話せなくとても後悔している。空港へ向かう際もタクシーと電車を使い移動し、トランプをしながら楽しく過ごした。

私が京都で学んだことは、歴史を取り入れた現代の作品を介しての街の活性化がしやすいということだ。と同時に昔ながらの街並みを守っていることにとっても感動した。

## 聖地巡礼における観光 PR とオタク文化

2部日本文化学科 2年 2815110 大森 俊

今回の私の京都研修でのテーマは聖地巡礼であった。本稿では聖地巡礼を映画、小説、アニメーション、漫画に登場する場所を訪れるという意味での巡礼であり、決して宗教上の聖地や聖域を参拝するものではない。このテーマを選出した理由は京都に聖地が多いという点と、近年、アニメや漫画の聖地巡礼がオタク文化の中ではかなり浸透してきており、それをターゲットにして聖地である地域が町おこしの一環として聖地ということをして PR して観光地化を図ろうとする市町村はどのようなことを実践しているのかを観光客という視点から見られると考えたからである。

今回私が訪れた京都の聖地は清水寺、金閣寺、龍安寺、嵐山、伏見稲荷大社、出町柗形商店街、北野天満宮、下賀茂神社及び周辺の聖地巡礼を行った。

研修期間は2月26日から3月3日までであったが、自由行動が許された期間は2月28日3月2日の3日間であったが、清水寺のみ研修生全員で参拝したためそちらから見ていきたい。

清水寺は、「やはり俺の青春ラブコメは間違っている」、「ゆるゆり」、「ソードアートオンライン」などのアニメーションに登場している。アニメーションで登場したような見た目、境内の造りもほぼ同じだったため映像再現が正確になされていた。

上記の作品の共通点は主人公や登場人物が学生であることだ。学生であると物語の進行上、修学旅行に行く描写が必要不可欠である。一般的な学生の国内の修学旅行は京都を訪れ、京都の名勝地で最も観光客の訪れる清水寺を参拝するだろう。京都及び清水寺は修学旅行の象徴ともいえる地である。上記に挙げた作品以外でも学園モノの作品には清水寺が描かれていることが多く見られる。誰しもが訪れたことのある場所を作品に登場させることにより、読者や視聴者が共感や想像しやすさなどを誘導している。

現在清水寺は境内の修復工事を行っている為、清水寺から望める眺望が少なからず阻まれているが後世や歴史保存のためには致し方ない。しかし山の東山付近に位置するせいか京都の街を一望できたのはよかった。曇り空でもなく晴れていたおかげで町並みがよく見えた。清水寺の最初の門とそこに近くで咲く梅はすごく綺麗だった。

金閣寺も清水寺同様に、学園モノの修学旅行のシチュエーションの際に登場する。社会現象を巻き起こした「けいおん！」のアニメーションで金閣寺が描かれている。また登場人物が金閣寺に関するうんちくを述べる為そういった豆知識が覚えられる。

金閣寺の色の鮮やかさは心を奪われた。遠目から池の上に佇む姿、そしてその姿が池に映し出されており幻想的な雰囲気を出していた。また近くから金閣寺を見上げると表面の金色が神々しいものがあった。池の中島には鳥が止まっており自然も感じさせる。

龍安寺、嵐山は先ほど述べた「やはり俺の青春ラブコメは間違っている」で描かれている。龍安寺の石庭や嵐山の竹林など細かく、鮮やかに映像再現されている。しかし、龍安寺の廊下で登場人物4人が話す場面があったが、実際にあの場所で4人で話すとなると多少狭く感じられるなという印象を受けた。そういった点はアニメーションならではの改変

が行なわれているのだろうと感じた。

龍安寺の石庭に行った際は偶然にも人があまりおらず、間近で見ることが出来た。渦のような模様や波のような線が均等に綺麗になっていた。また、この石庭に置いてある石の正確な数と視覚的に見られる石の数が合わないことで知られ、試しに様々な角度から石庭を眺めたが噂の通り数が合わず感動した。

嵐山を散策した時は渡月橋から桂川を登る道を行ったが川が広く、向かいにある中之島の木々が一望でき、北海道の自然にも劣らない景色が見られた。桂川を登ると自然公園が隣接しておりそこから竹林へ向かった。竹林を歩いていると曇り空が少し晴れて日が出てきて竹林からの木漏れ日と、風で揺れる木々の音を聞いていると心が現れたような気持ちになった。

次に伏見稲荷大社であるが、ここは「いなり、こんこん、恋いろは」の舞台となっている。この作品は稲荷大社に住まう神様と普通の女子高生が遭遇し物語が進行していくのだが、漫画、アニメーションの両方とも伏見稲荷大社の構造を理解し描かれている。稲荷大社の千本鳥居を主人公が駆け抜けていくシーンがあるが道のりの出てくる順番が正確に、改変が極めて少なく描かれているため非常に感動した。

伏見稲荷大社のシンボルとも言える狐の像は写真や絵画で見るとは違う雰囲気を感じた。じっと見ているとこちらが吸い込まれてしまいそうな神秘的なものであった。そして山の方へ上ると千本鳥居があり、別世界に来たように感じた。行けども行けども鳥居をくぐり続け、このまま気付かないうちに自分が世界から消えてしまうようだと思った。そうした気分であるといつの間にか出口に到着しており、そこでやっと現実感が戻ってきた感覚になった。

次に出町柵形商店街について語ろうと思う。出町柵形商店街は「たまこまーけっと」の主人公たちが住む場所のモデルになっている場所である。この商店街には「たまこまーけっと」の観光PRとしてキャラクターのポップがあり、街全体がアニメーションを受け入れている状態である。

出町柵形商店街の映像と比較したときの一致の仕方が面白かった。様々なお店が作品にも登場するが、お店の形や色がまったく一緒で違うのは店名のみで完全に再現されているなと思った。「たまこまーけっと」を制作するkyoto animationはアニメ業界でかなり有名な制作会社であり、安定した作画で知られている。その名の通り京都に制作会社があり、やはり地元である京都を舞台にしているだけあって再現率がどこの聖地よりも高かったと感じた。

当初、北野天満宮へ赴いた理由は「けいおん！」の中で修学旅行の場面で使用されていたからだったが、北野天満宮には「刀剣乱舞」のキャラクターのポップがあって驚愕した。ポップとして立っているキャラクターのもとになった刀が北野天満宮の宝物庫にあり、そこには比較的他の場所より人の平均年齢が低いように見えた。また、たまたま刀剣乱舞のキャンペーンが行われているという効果も相まって人が多かった。

北野天満宮では梅が咲いており、梅苑も開かれていた。北野天満宮ではまだ北海道では感じられない春の兆しを感じた。白い梅と紅い梅がいたところで咲いており、残念ながら満開の梅ではなかったがそれでも梅の綺麗さに心奪われてしまった。

下賀茂神社ではこれから「有頂天家族」のアニメーションの2期が始まるためか、宣伝

のポップが立っていた。「有頂天家族」の1期が放送されていたところに、下賀茂神社が舞台であると聞いて訪れたが、タイミングがとてもよかった。

また下賀茂神社の近くにある鴨川の中州、所謂鴨川デルタも見てきた。「四畳半神話体系」に登場するので行ってみたが、季節柄が悪いのか水が非常に冷たく困惑した。次の機会があったら夏などの温かい季節に行こうと思った。

私は今回の京都旅行で自転車を使い観光した日があったが「たまこまーけっと」の主人公たちが通うモデルの学校から出町栞形商店街まで概算で30分を要した。

アニメーションで通学路のシーンを描いているときに自転車などで通学しているようなキャラクターを見ると以外に体力あるんだなと感じた。アニメーションだから、と思っけていても現実で行動してみるとまた違う思いがあり、それは非常に興味深かった。そして京都は北海道に比べ交通マナーが悪いと感じた。

冒頭でも述べたように近年、アニメや漫画の聖地巡礼がオタク文化の中ではかなり浸透してきており、それをターゲットにして聖地である地域が町おこしの一環として観光PRが行われている。それは観光地として有名な京都でも例外ではなかった。観光地として盛り上がり続けているのはごく一部のみで他の地域は住民の高齢化や観光地としての魅力が出せずにいるのだと感じた。最近では刀を擬人化した「刀剣乱舞」の影響があり擬人化されている刀の所在地が聖地となり、新たな観光客を生んでいる。

しかし、ただの聖地では観光客も飽き、時代も進み廃れていく可能性がある。観光客が増える要因を得た新たな聖地や寺社仏閣などはその観光客を途絶えさせない新しい魅力をPRするのが今後の課題であると感じた。

以上が私が京都で感じ、学んだことである。



## 伏見稲荷大社の構造と今日の観光について

2部日本文化学科 2年 2815112 岡村 知昌

伏見稲荷大社が創祀された発端は、日本書紀によると、欽明天皇が即位された6世紀初めに起こったとされている。欽明天皇は幼い頃、「秦の大津父を登用すると天下を治められる」という夢を見た。そこで彼は使者を遣い、山背国紀伊郡深草里という場所に秦の大津父という人物がいることを知った。欽明天皇はすぐに秦の大津父を呼び出し、これまでに変わったことはなかったかと尋ねた。すると秦の大津父は「特にはありませんでしたが、以前商いの帰り道に通った稲荷山南麓の谷で二匹の狼が争っていたのを見ました。私は乗っていた馬から降りて、『あなたたちは貴い神だから争いを好むのは仕方がないが、狩人が来たら捕まってしまうのでおやめになってください』そう言って狼の命を救ったことがあります」と話した。この話を聞いた欽明天皇は感銘を受け、私がこの人に出会えたのは神の御業だろうと考え、自分が天皇に即位する際に彼を現在でいう財務省の一員に任命した。

稲荷大神様をご鎮座されたのは711年2月の初午の日、秦伊呂具によるものとされている。この頃は気候不順で五穀が育たず不作が続いていた。そこで当時の天皇が名山大川に遣いを出したところ、「山背国の稲荷山に大神を祀りなさい」といった神のご教示を受けたという。そうした結果作物が育つようになった。

先ほど述べた秦の大津父を輩出地、秦氏族が住んでいた深草里は稲荷山の南西に位置している。この関係性は明らかにされていないが、無関係であるとは断定できないだろう。真偽はともかく、このような経緯で伏見稲荷大社が創祀されたのである。

次に、伏見稲荷大社の大まかな構造の説明と、実際に私が見たきた感想を述べていく。大社の南にある鳥居を通して待ち構えている楼門をくぐると本殿が見える。本殿は下社・中社・上社に加え、主祭神である宇迦之御魂之大神様と縁のある神様が祀られている二つのお社、田中社と四大神の計5社が横並びの構造・一宇相殿となっている。これら一つ一つに祀られているご祭神名は稲荷大神様のご神徳の神名化されたもの、つまり神様が私たちに与えてくださる特別な力を神の名前としていることになる。

この本殿から北東に進むと、かの有名な千本鳥居に入る。千本鳥居に限った話ではないが、伏見稲荷大社の建物が基本朱塗りで統一されている理由は、魔力に対抗する色であることと、稲荷大神様の持つ力を表していることに起因する。私はこの研修中と過去合わせて三度ここを訪れた。どの時間でも息をのむほどの異様な雰囲気があるのだが、特に早朝に来ると急に暗くなった視界に鳥居の朱色が映えて、違う世界に迷い込んだかのような気持を味わえる。この先何度来ても、この風景と雰囲気は慣れることなく感動させられるのだろうと思う。

ここはちょうど山の入り口になっていて、私たちが暮らす現世と神々のいる幽界をつな

ぐ門としてとらえられている。今では山全体で1万基もの鳥居が建てられているのだが、ここまで多くの鳥居が建設されているのは単に門としての役割だけではない。ここに参拝した者が願い事をし、それが叶った際にお礼として鳥居を建てるという風習が江戸から明治期に行われたためである。鳥居は通るものであることと、願い事が通ったという言葉遊びのようなものから今では数多くの鳥居が存在し、なお増え続けているというのだから面白い。伏見稲荷大社と稲荷山は昔から民衆に信仰されていたようで、このようなところからもそのことがうかがえる。

千本鳥居を通ると、毎年1月5日に大山祭が行われる奥社奉拝所に出る。そこから道のりに進んだ先に新池のほとりに立つ熊鷹社が見えてくる。自然に囲まれて日差しが差し込む大変神秘的で私の印象に強く残っているため、本レポートに添える写真に選ぶことにした。

四ツ辻と呼ばれるところは京都南部が一望できる絶景スポットとなっている。四ツ辻からはのんびりと休憩できる場所がほとんどなくなってくるため、ここで十分に休んだあと登山を再開すると良いと私は思った。

山頂・一ノ峰には末広大神が祀られているお社と、稲荷大神様のご眷属である狐の石像が広がっている。千本千鳥を通った時に感じた異様で不思議な雰囲気があり、幽界に誘われてしまうのではと思うほどだった。

伏見稲荷大社は参拝・登山だけでなくその周辺のグルメも盛んである。名前の由来となっているいなり寿司は北海道（というよりは関東）と形からすでに異なり、狐を模した三角形の見た目をしている。中には酢飯だけでなく黒胡麻と刻みごぼうが入っているため、甘さと同時に香ばしさが口の中で広がって一風変わった味になっている。私個人の感想としては京都のいなり寿司のほうが断然美味しく感じられた。

他には焼き団子や焼きポン、おかきなども有名だ。焦げ目がついた団子もいなり寿司同様ただ甘いだけでなく、おこげの風味と食感が楽しめる。焼きポンは栗本来の香ばしさと香りがたまらなく美味しい。おかきは色んな種類があり、好みによって選ぶ味が違ってくるが私のお気に入りには濡れおかきだ。そのまま食べてもいいのだが、電子レンジで温めるとさらに柔らかい食感となり口の中で溶けていく。

伏見稲荷大社は境内でもその道中でも出店が出ているため、食べ歩きをしながら観光するスタイルで楽しむことが出来る。実際に出店を出している方に話を聞かせてもらうと、この辺りは年中出店を出していて、どの時期でも数多くの観光客が来るために開店している限りどの日でもにぎわっているという。

五穀豊穰、商売繁盛、家内安全、諸願成就を願う場所として、伏見稲荷大社は地域のみならず多くの観光客から強い支持を得ている。参拝や登山、風景が魅せる独特の世界観、そして独自の食文化、これらの要素が来る人々が後を絶たないのだからこの研修を通して私は考えた。この研修で感じたことや思い出をこれから人に話し、少しでも多くの人が伏見稲荷大社に興味を持ってくれたら嬉しく思う。

## 京都の歴史や文化を体感して

2部日本文化学科 2年 2815116 小玉 沙織

梅花祭りが2月25日にあったこともあり、様々な梅が所々で美しく咲いていた。演習を通して、現地でしか体験・体感できないことを学ぶことが出来た。天気や時間で移り変わる京都街並みを見て、益々四季折々の表情を見てみたくなった。是非、また足を運びたい。

自主研修1日目には京都御所へ伺った。今の北海道では絶対に体験できないことを学ぶことが出来た。踏みしめた砂利の音や、小川のせせらぎがとても心地よく、閑散とした空気に思わず声を噤んでしまうほどだった。左近の桜と右近の橘を実際に拝見することができ、初めて見たしだれ桜の木は今にも桜が咲きだしそうで、その現実離れした木の下に光源氏が現われてしまうのではないかと錯覚してしまった。実際に事前学習でもあった猿ヶ辻を見に行ったが、網に囲われ、初めは猿だと認識できなかった。インターネットで検索し、確認をとってからやっと烏帽子をかぶった猿のようだと確認することが出来た。また、道喜門もみてみたが、他の建物とは違い、看板も解説もなく、また他の場所にもある門とあまり変わりがなく、建礼門の隣にあることから辛うじて道喜門だと認識できた。また、瓦が菊の紋章だったのが気になり調べてみると、十六八重菊の菊花紋章は天皇や皇室を表す紋章だということが発見できた。この発見により、他の神社の瓦の家紋の遅配に築くことが出来た。御池庭では、立った状態で一番美しく見られるように計算されており、どこからみても飽きさせない庭造りがされていた。

宇治の源氏物語ミュージアムでは、牛車の大きさを知ることが出来た。十二単を着た姫が乗っている再現がされているため、ある程度の広さが必要なことが分かった。他にも、御簾から空蟬を覗く光源氏を見ることが出来た。御簾のつくりや、光が入り込んだときの見え方を知ることができ、作品への理解を深めた。六条院のミニチュア再現もあり、源氏物語の世界に一步踏み込めたように思った。香物についても展示があり、源氏香という競技についても知ることが出来た。私は宇治十帖にあまり関心がなかったが、宇治十帖物語シアターでも分かりやすく物語のあらすじを説明され、とても興味を持った。『薫の垣間見』を見ることもでき、この視点のこの距離で薫が恋に落ちたのかと思うと、新しい情景が広がり、宇治十帖を読み直すのが楽しみになった。

最後には、夕方から夜にかけて伏見稲荷神社に訪れた。木漏れ日をうけた鳥居の美しさももちろんのこと、日が落ちて暗闇に包まれた鳥居に小さく光がともり鮮やかな赤が浮かんだ姿もとても美しかった。

2日目には、特集展示のひな祭りを目当てに京都国立博物館へと行ってみた。ひな人形は京都以外ではお内裏様は右、お雛様は左に置いている。だが、京都は上座の北にお内裏様を置くため、お内裏様が左、お雛様は右である。なぜ位置が逆になったかという、西ヨーロッパから左手で女性を護り、右手で剣を持ちモンスターを倒すという文化が伝来し、天皇皇

后陛下がそのように並んだことがきっかけだったという。実際にその配置を見たことで、他の神社などでの狛犬や植物の配置関係にも理解が深まった。また、教科書に載っているようなものを間近でみることで、その表現の細やかさが良く分かった。無料で体験できるコーナーがあり、実際に参加してみた。一つ目は玉眼という像の目に水晶をいれ彩色をする事で本当に生きているかのような目を再現する手法がどうなっているかを解体、組み立てが出来る体験だった。私が解体したのは仏様の玉眼の解体で、竹の釘で固定されており、和紙・青い和紙・水晶と重なっていた。なぜ青い和紙が重なっているのか聞いてみると、仏様は人間ではないため赤い血が流れていないからだという。逆に、赤い目をした仏さまは怒りの仏様なのだという。次に、水墨画を書いてみる体験をした。すぐに乾く紙と徳川家基も使っていたというお店で特注した筆を使い、鳥獣戯画を書いてみた。そのことで、見ていた展示の水墨画の数々がいかに技巧を凝らしたものか実感した。

次に、舞妓体験が出来るお店『舞香』に訪れた。ここは人通りが少なく、普通の人でもなかなか知らない本当の舞妓さんのいる路地だという。実際に舞妓学校があり、歩く舞妓さんも目撃した。大きな声を出すことは憚られ、一見さんお断りのお店だということが良く分かった。インターネットで検索する時もなかなか見つけることができず、直接住所を入力してやっとでてきたという具合だった。実際に白粉を塗り、紅を刺し、鬘をかぶり、飾り帯であったが着物も着てみた。白粉は化粧落としでもなかなか落ちず、これを毎日しなければならぬ舞妓さんは大変だと思った。鬘もかなり重く、着物も裾を気になってなかなか歩くのに苦労した。舞妓さんは義務教育課程が終わると舞妓学校に入り、住み込みで舞妓さんを目指すことになる。一年目は仕込みさんで、二年目からやっと舞妓さんになれるという。舞妓さんは十代までの少女の事で、二十になるとこのまま続けるのか、芸妓さんになるかを選ぶのだという。舞妓さんは365日毎日お仕事で、実家に帰れるのは二日だけ。また、厳しいところでは電話も禁止だという。舞妓さんのお店にも特徴があり、舞が上手なお店、お琴が上手なお店といったようにそれぞれの売りがあるらしい。舞妓さんは芸妓さんになると姉さんから名前の一部を貰い名前をつけられるため、お店には一部がすべて同じ名前が並んでいた。

3日目には金閣寺を見に行った。高校生のとき、修学旅行で一度見た覚えがあったが、改めてみるとその金閣寺の作り物めいた煌びやかさを感じた。実際、金閣寺は当時の再現ではなく、このように計画していたものをせっかくなら再現しようと作られたものだという。

清水寺の街並みをもう一度見てみようと思ふと、人力車の客引きがあり、乗ってみることにした。建仁寺近くで人力車を降りると、まるで掛け軸のように見える勅使門と応仁の乱の弓の痕を見て、唐蠟梅の香りを感じながら、北野天満宮へと向かった。北野天満宮では梅苑が公開されており、美しい梅の花が見ることが出来た。夜には美味しい京野菜をいただき、先斗町の小道を眺め、景色と学びと、様々なことを体感し、充実した演習を過ごすことが出来た。

## 京都を巡る

2部日本文化学科 2年 2815118 木幡 珠佑

今回、私が京都へと訪れたのは高校2年生以来で、2回目となる。その初めて京都へ訪れた際、私は京都の景色や雰囲気がとても好きになった。北海道では見ることのできない景色や、京都ならではの建造物。いつかもう一度京都へ行きたいと思っていた。今回の研修旅行は、そんな私の夢が叶った5泊6日の出来事だった。

京都研修1日目、多くの先生方と共に1日かけて京都を回り、それぞれの箇所にある歴史や見所を学び、前半では主に二条城付近を見て回った。物資の流通に使われていた川や、駅が建てられた場所の意味など、様々なことを学んだ。中でも私が記憶に残っているのは、区画整理によって造られた町並みである。どこからが整理されているか、されていないかがはっきりと町並みに表れていたのだ。左を見れば長い歴史を感じるような古い建物ばかりなのに対し、右を見るとまだ新しいビルなどの綺麗な建物。他にも、交差点や路地にもそれが現れていた。整理がされている箇所の交差点は角が丸く、自動車のことを考えて造られているが、整理がされていない箇所の角はそのままであった。路地を見ると、整理がされている箇所までは道幅に余裕を持って造られていたが、それが終わるととたんに道幅が狭くなっている。この極端さが、私の記憶に残っている理由だろう。

後半は清水寺周辺へと移った。清水寺へ訪れたのは私にとって2回目のことだったが、何回見ても圧倒される景色で、清水寺に入ってからはもちろんそこに至るまでの道までもが趣のあるものだった。自由時間ではおみくじやお祈り、音羽の滝で手のお清め、みたらし団子を食べたりと清水寺を満喫した。清水寺を出た後も様々な場所を巡っていったが、中でも記憶に残っているのが、実際の映画である『ラストサムライ』にも使われたという知恩院である。実際にその場所を見てみたかったが、残念ながら見ることはできなかった。これを機に『ラストサムライ』を観て、どの場所が映画で使われたのか確認してみたいと思った。そして研修最後には鴨川へと訪れ、その景色や行われる行事、よく耳にする「カップルが等間隔で座っている」という場所をみてきた。この日は気温も低く風が強かったせいかそのようなカップルは見当たらなかったが、もしもその中に一人で座っていたらどうなるのだろうかという私は1人考えていた。

京都研修2日目、この日から完全な自由行動となった。私の京都研修の大きな目的は多くの寺や神社を巡ることであるため、まず始めに下鴨神社へ訪れた。この下鴨神社は写真でも少ししか見たことがなかったため、その神聖な雰囲気に圧倒された。訪れてから知ったことだが、下鴨神社には相生社という縁結びの神が祭られている。もちろん私はお祈りをしっかりとしてきた。効果が現れるのを期待しておきたい。それから奥の方へと進むとおみくじがあり、先ほど祈った効果の運試しと言うことで私はおみくじを引いた。そのお

みくじは珍しくも水占いというもので、下鴨神社に流れるお神水に浸けると結果が浮かび上がるというものだった。占いの結果はあまり良くないもので、すぐさまおみくじを結んでしまうと共に、これから回っていく場所すべてでおみくじを引いていく決意をした。下鴨神社の次は上賀茂神社へと向かい、おみくじを引いた後は嵐山の野宮神社へと向かうことにした。野宮神社へと向かうバスの途中、太秦映画村という言葉が聞こえ、私は前日の夕食のことを思い出した。京都研修 1 日目の夕食は NINJA という場所で、外国人目線で日本とはどのように売られているのか学ぶというものだった。このことを思い出した私は、映画村もこれと同じ、外国人目線で日本を学ぶ良い場所ではないかと思い、急遽予定を変更して映画村へと向かった。中に入ると、まるで時代劇の世界に迷い込んだような錯覚を起こした。わかりやすい口調に特徴的な格好、外国人の想像する日本人像をそのまま表わしているようだった。いろいろな場所を見て回っていると小腹がすいてきたため売店に寄り、アイスクリームを食べていた。すると「寒いだろうからこれを食べな」と言って売店のおばあさんからフライドポテトを頂いた。身も心も温まるいい出来事で、あの方には感謝しかない。映画村を出た後は、野宮神社へと向かうが、丁度工事中のため参拝することはできず、竹林をみて京都研修 2 日目は終わった。

京都研修 3 日目、京都の観光場所でもポピュラーな箇所を回っていくことにした。始めに金閣、次に龍安寺、仁和寺、北野天満宮という様に人が多く集まる場所を参拝して回った。私の目線から見ると、金閣と北野天満宮は賑やかさがあがり、龍安寺と仁和寺には落ち着いた雰囲気があった。また、北野天満宮へ向かった時は丁度お昼時だったため、近くの定食屋に入った。偶然にもその定食屋は長い歴史を持った店で、今現在 3 代目まで受け継がれ、82 年もの間続いているとのことだった。当時はこの店が近辺の学校に出前を届けたりしていたなど、昔の話も少しお聞きすることができた。それから私は伏見稲荷大社へと向かった。伏見稲荷大社へ向かう頃は丁度雨が降っており少し残念に思っていたが、着くころには雨も上がり綺麗な景色も見ることができた。雨上がりと夕暮れの中にある伏見稲荷大社は、前日も含めて一番の景色だったと私は思う。その後奥に進んだところにある千本鳥居を潜り、十分に堪能したところで京都研修 3 日目を終えた。

京都研修 4 日目は、これまで回ってきた中でやむなく行くのを断念してしまった箇所に回っていく日だった。始めに、ホテルを出てすぐにある平安神宮、次に八坂神社、二条城、八木邸、東寺といった箇所を参拝していった。4 日目ともなるとさすがに足の疲労が溜まり、少々大儀に感じていた部分もあったが、それぞれの箇所の神聖な雰囲気やその景色を見ると、不思議とその疲れも忘れていた。人とは単純なものだと改めて感じてしまった。しかし、単純だと感じたのはこれだけではない。下鴨神社で決意した通り、私は参拝したすべての場所でおみくじを引いた。そしてその結果を見るたびに一喜一憂し、足取りが軽くなったり重くなったりしていた。

京都を見て回る際、様々な場所でおみくじを引いて回るというのも、またひとつ京都の楽しみ方なのではないかと私は思う。

## 日本文化特別演習事後レポート —テーマ「陰陽師ゆかりの地へ」—

人文学部日本文化学科 2年 2815121 佐藤 圭佑

私が今回の人文学特別演習に参加する際にテーマとしたものは、陰陽師について関連のある地へ赴くというものであった。したがって自由行動の三日間はテーマに準ずる場所に赴いた。

一日目は三時ごろから、自由に行動できたので、学部と同じ男子数人でホテルの周囲を散策した。二日目にも触れるが京都の街並みや北海道にはない景観が存在した。まず道が狭く、一方通行の道が多かったように感じられる。車一台と人間一人分の道幅しかない道路が入り組んでおり、私事だがスマートフォンなしでは散策できないと感じた。大きな通りから一本でも道路が違うと、すぐに路地になるところが非常に興味深かった。

二日目に訪れた神泉苑の景色はのどかな雰囲気と湖に架かる橋でまさに風情のある場所であった。また砂利道の踏みしめる音も素晴らしいものであった。二条駅周辺において立命館大学の方々との散策はとても興味深いお話ばかりであった。区画整理や土地利用、自動車学校の経緯など都市開発についての話は一日目のホテル周辺の散策での疑問が解消されたほかその後の自由行動の時も違った角度から市内を散策することができた。

三日目は、今回のテーマであるところの貴船神社を訪れた。貴船神社へは、手前のバス停で降車し、山道を登って行ったが、道中の小さな谷の景色が幻想的な道りで神聖な場所に赴くのだとわたくしに告げているようであった。貴船神社の境内にたどり着くと、鳥居をくぐったすぐに灯籠が一段事に連なる階段を上り、本殿にたどり着く。

貴船神社は水徳神、タカオカミノカミを祀る場所で、祈雨、止雨の神として崇められていた。和泉式部の逸話の場所として有名な場所である。

本殿でお参りをした後、おみくじを引いてみたがこの貴船神社のおみくじは白紙の神を御神水に浮かべて浮かび上がる文字を見るというものであり、水の神様を祀っているという特性を生かしたものである。その後鈴鹿橋のある奥居にいき、そこからの眺めを目に焼き付けることができた。山を下りて一度京都駅に赴き、駅の外観をみたあと晴明神社に東山駅から徒歩で参拝しにいった。晴明神社は名前の通り、安倍晴明を祀る神社で当時の晴明公の邸宅跡に建立されたと言われている。厄除けの桃をかたどったオブジェが鎮座しておりまた、晴明井と呼ばれる、古来より湧き出ていたとされる名水が汲みあげられていた。安倍晴明は陰陽師として京都に貢献した人物で、晴明神社には安倍晴明の逸話をまとめたパネルがあり、数々の伝承があることがわかる。そして晴明神社のすぐ近くに一条戻橋があり、訪れた時間が夕方ごろであったので風情ある景色を楽しむことができた。

ホテルまで徒歩で帰る途中、護王神社という神社に立ち寄ってみた。護王神社は白い猪を祀る神社で、足腰に加護が受けられるという神社であった。本殿の隅にイノシシのグッ

ズが大量にあり、とても興味深い神社であると考えられる。聞いた話では、和気清麻呂にゆかりのある土地であるらしい。三日目（自由行動一日目）はかねてより行きたかった場所に行けて充実した日であった。

四日目は、伏見稲荷大社に赴くことを計画していたが、友人のアドバイスによって夕方に訪れることにしたため、午前中は平安神宮に立ち寄った。巨大な建物が連なり、また敷き詰められた砂利の音が趣ある景色を楽しむことができた。また今回は神苑も拝観したため風情ある庭園を歩くことができた。水音と草木、そして石の景観は静かな癒しを与えてくれた。平安神宮の茶店で一息ついた後、下鴨神社に向けて歩き出した途中、知恩院に立ち寄った。知恩院の階段は傍目にみるよりも長く、一息で登るのは難しい人もいるのではないかと思われる。院の中にも「知恩院に伝わる七不思議」の解説がありとても興味深かった。八坂神社に立ち寄った際にお参りをし、下鴨神社にたちより、お参りをしてから、伏見稲荷大社に訪れた。本殿の近くにある外拝殿<sup>げはいでん</sup>という建物には、軒下からつられている灯籠には黄道十二宮をかたどったものであった。ここでは名物の千本鳥居があり、幻想的な空間に驚嘆した。神賽宮でお参りをしたあと、山頂を目指して山を登って行ったが、この山道がとても険しく、まさに巡礼と呼ぶにふさわしく、また道が入り組み分かれており私は半ば迷子のような状態になり山の隅々まで見たと言えるだろう。しかしそのおかげで完全に日が落ち切った稲荷山の山頂を見ることができたため怪我の功名であった。暗闇の中で灯籠の光だけで見るお稲荷様は、恐ろしくあり同時に神々しくもあり、信仰される所以を垣間見た気がしたのである。また祠に建てられた無数の鳥居も闇の中で見るものは昼間とはまた違った捉え方をせざるをえなかった。登っている間は夕暮れ時できれいな夕焼けを映していた鳥居も、降りるときは灯籠の灯から見えるだけでありロマンチックな道になっていた。

五日目は大阪に行って通天閣やその周囲の発展した部分を見学した。街並みや、人の雰囲気を見てみたかったためである。かねてより行きたかった場所によって、友人や親せきへのお土産を買って自由行動を終えた。

今回の特別演習は、わたくしの京都で行ってみたい、また行きたいという場所のほぼすべてに赴くことが出来たので大変充実したものとなった。テーマの陰陽師ゆかりの地はこのほかにも点在しているので、いつの日かまた京都を訪れたいと思う。今回私は人々を引き付ける京都の魅力をその身にしっかりと受け、京都を守っていこうとする行いの発生源のようなものに共感することができた。ぜひもう一度京都に赴きたいと思う。

## 京都と大阪の景観

2部日本文化学科 2年 2815123 佐藤 実和子

3日間ある自主研修のうち初日を大阪、残りの2日間を京都で行った。このレポートでは京都宇治市と大阪の比較、とりわけ、景観に焦点を当てて論じる。

### 〈大阪編〉

1日目は京都から地下鉄、京阪を乗り継ぎ大阪へと向かった。大阪では珍しい寺社を巡るというサブタイトルを基に歩いた。最初に訪れたのは天王区にある一心寺である。四天王寺前夕陽ヶ丘駅から徒歩10分ほどの場所にある寺である。ここは遺骨を集めて作った仏像「骨仏」が祀られている。これまで200万人以上の遺骨で作られているという。一見、遺骨で仏像を作ることは薄気味悪いように思われるが、遺族としては遺骨で仏像が作られることで、まさに仏となり成仏できる、という信仰が芽生えるのだと考えられる。また、骨仏がある寺社と言うマイナスイメージを伺うが、一心寺の門は現代アートのようなもので、そこにたたずむ仁王像は平安・鎌倉の文化と現代文化が混ざり合ったものであると考える。

続いて平野区にある全興寺に向かった。平野駅から15分ほど歩いた狭い商店街の中にある。ここには境内に地獄を模した「地獄堂」がある。当時、中高生の自殺が社会問題となったため、地域住民の「昔、悪いことをしたら地獄に落ちる」という言葉をヒントに作られたものである。地獄堂で閻魔大王が「命を大切に」と言っているのは自殺が頻発していたためだと言われている。地獄堂を出たところに地獄の窯の音が聞こえるという穴の空いた大きな石がある。また、仏足石というお参りをすると今までの罪が消えるというものもある。地獄をテーマにしつつも、極楽浄土へと誘うための工夫も為されている。全興寺は平野本町通商店街と連携している。そのため観光客よりも住民の参拝者の方が多く目についた。商店街側の入り口と、地獄堂側の入り口の2箇所があるが、それぞれ周囲の佇まいと同化していることが景観を損ねない工夫だと考える。

次に難波へ向かい道頓堀付近を散策した。左右に密集した建物が並ぶ通りから狭い路地に入ると法善寺に辿り着いた。法善寺には苔まみれの不動明王が祀られている。お参りの仕方も一風変わったもので、中央の不動明王と、その左右にいる仏像に柄杓で水をかけるというものであった。道頓堀川沿いからは建物の裏側が見える。換気扇や半分だけ開いた窓など、賑わいを見せている通りのもう一つの顔が見られる。建物の表と裏で雰囲気が一転するという面も含めて難波・道頓堀を創り上げる景観の一部なのではないかと考える。

最後に梅田へと向かった。本来は訪れる予定がなかったのでどこを巡るかノープランだった。梅田駅を歩いて行くとグランフロント大阪に着いた。後に調べてみるとJR貨物梅田貨物駅跡地、“大阪最後の一等地”の「うめきた」の再開発エリアであることが分かった。オフィスや研究施設、ショッピングモールなどが入る大型複合施設であるが故に、時間に

追われる感覚が芽生えたが、水をあしらったモニュメントが中心にあるおかげで空間にゆとりが感じられる景観であった。一方、JR の高架下を歩くと少し寂れた飲食店が広がり、日中の都会の喧騒とは一味違う賑わいを見せていた。

#### 〈京都宇治市編〉

京都では 2 日目に伏見稲荷大社や北野天満宮など主にメジャーな寺社仏閣を巡ったが、頁の都合上、今回は割愛し、最終日に訪れた宇治市について論じる。宇治市には宇治川を挟み 2 つの駅がある。宇治川の手前が京阪宇治駅、川を越えて JR 宇治駅である。宇治市は紫式部が書いた源氏物語後半の「宇治十帖」の舞台であり、宇治川は浮舟が入水自殺を図った場所でも有名である。宇治川は普段も流れが速いが、この日は天ヶ瀬ダムが放流していたため、より一層流れが速かった。

最終日は抹茶巡りと称し、伊藤久右衛門本店、中村藤吉本店、辻利兵衛本店を回った。この 3 つに共通することは抹茶専門店以外に景観である。これらは日本家屋風の店構えであり、小さな庭を持っていた。勿論、抹茶のお店は京都市内にもあるが「宇治＝抹茶」という本場にいる雰囲気も景観にプラスされることで、第六感で堪能する醍醐味であると考えられる。これは日本人だけでなく外国人観光客にとっては、京都を満喫するにあたって宇治市は欠かせないものなのではないかと考える。味覚で楽しむだけの観光ではなく、平等院鳳凰堂と言うまさに「景観美」についても触れるからである。

#### 〈まとめ〉

大阪と京都の景観を比較するにあたり「日本人観光客」という視点と「外国人観光客」という視点で考察した。大阪は「日本人観光客」が楽しめる場所であるということ。上記で述べたように 1 箇所に様々なコンテンツが集合しているからである。その顕著な例が道頓堀である。日本人受けするモノがなにかを理解したカオスさ見受けられる景観であると考えられる。

一方、京都は「日本人観光客」も「外国人観光客」にも楽しめる場所である。日本人側からの視点では日本文化に触れるというテーマで訪れるのが主流だと考える。外国人側からの視点では日本そのものを感じるために京都を訪れるのではないかと考える。

大阪と京都を「観光」に着目した時、それぞれの景観の違いがよく分かる。大阪は日本人をターゲットに集客をしているが、京都はインバウンドに力を入れている。そのためスマートな景観とともに、町全体が歴史を守り伝えまた新たに創り上げていくのではないかと考える。日本人とは違う視点で見る外国人こそ、日本の景観美に対し関心を抱き、些細な変化に気づき、また日本を好きになるきっかけを自ら作るのだと考える。

## 日本文化特別演習を終えて —京都の神社仏閣とさまざまな神—

2部日本文化学科 2年 2815128 千葉 萌子

〈はじめに〉

高校の修学旅行で初めて京都を訪れてから、またもう一度訪れたいと常々思っていた。そして今回、また学校の研修という形ではあるが、それが叶ったことをとても嬉しく思う。今回の研修は、団体研修とグループまたは個人で行った自由研修があったが、このレポートではより心に残った自由研修を取り上げ、3日それぞれに分けて報告しようと思う。

〈自由研修 1日目 (2月28日)〉

私個人の研修テーマとして、「京都の神社仏閣に祀られているさまざまな神について」というものを設定し、これを軸としてまわる場所を考えた。この日と自由研修最終日は、私を含め2人でまわっている。テーマにあまり関係ないスポットは省いている。

まず最初に、有名な陰陽師・安倍晴明を祀る晴明神社を訪れた。晴明神社は街中にあり、さほど敷地も広くないため少し見つけにくいと感じた。入り口には四神が描かれた柱や安倍晴明を象徴する五芒星のマークがついたのぼりなどがあった。ここでは厄除け・魔除けの役割として桃の像があったり、安倍晴明の逸話をまとめたパネルが見られた。

そして次に、錦市場と錦天満宮に行った。錦市場に行った時、ちょうどお昼時だったので、食べ歩きをしつつ最後に錦天満宮を参拝するという流れになった。市場では特に練り物系のものが多かったように感じる。錦天満宮は、市場をまっすぐ進んだところにあるという少し珍しい立地である。主祭神は北野天満宮と同じ菅原道真で、知恵や学問、商売繁盛などの御利益があるそうだ。そして、ここには珍しい「からくりおみくじ」があった。近づくと音楽が鳴り出し、お金を入れると機械仕掛けの獅子舞がおみくじを取ってきてくれるという、なかなか面白いものであった。

次に訪れたのは京都国立博物館。ここでは展示物別に陶磁、考古遺物、絵画、書跡、彫刻、染織、金工、漆工というブースに分かれている。今まであまり見たことのなかったような染織品や書跡が見られて、より京都の歴史について理解が深まったように思う。

最後に訪れたのは、八坂神社である。通称は「祇園さん」。主祭神は素戔鳴尊、櫛稲田姫命、八柱御子神。さまざまな祭事が行われている場所で、有名な祇園祭もここで行われている。この日は人の神を中心に神社仏閣を巡った。

〈自由研修 2日目 (3月1日)〉

この日は、京都御所を訪れるためグループ全員で行動した。最初に訪れたのは伏見稲荷大社である。ここは個人的に一番行きたかった場所だったので、訪れることができるととても嬉しかった。有名な千本鳥居は稲荷山の頂上にまであるというので、頂上まで登るといのが

自分の中での目標であった。高校の時にも行ったのだが、時間がなく山頂まで登れなかったのが心残りであったため、リベンジを試みたという訳である。実際に頂上まで登ってみて分かったのは、山頂にまでびっしりと鳥居があり、社も多々見られたことだ。等間隔で並ぶたくさんの鳥居は、今思い出してもすごく迫力のあるものだった。

そして次に、京都御所を訪れた。ここは事前学習で知ったことを実際に目で見て確認するという趣旨の元、見学した。DVD で見た紫宸殿や清涼殿、御池庭などを見てまわった。それぞれの場所を見る時に、当時の帝がここでどんな風に暮らしていたのかということ想像しながらまわると、さらに楽しさが増したように思う。事前学習で特に印象に残った道喜門も実際に見ることができて良かった。

3 番目に行ったのは、北野天満宮である。ここは学問の神様・菅原道真で有名な所でもあるが、私が見たかったのは境内に点在する「撫で牛」だ。これは神の使いである牛を祀っているもので、撫でると知恵がつくという言い伝えがあるそう。そのため受験生などに人気のスポットとなっているようだ。私ももちろん知恵がつくようにしっかりと撫でさせてもらった。

そして、この日最後にまわったのが金閣である。正式名称は「鹿苑寺」と言い、臨済宗相国寺派の禅寺で、世界文化遺産にも登録されている「京都と言えばこれ」というようなところだ。ここにも動物が祀られている。「白蛇の塚」というもので、弁財天の使いであった白蛇がおり、家運を盛んにしてくれるという御利益があるそうだ。この日は前日と比べ、動物を中心とした場所を多く巡った。

〈自由研修 3 日目 (3 月 2 日) 〉

この日はあまり神社仏閣系をまわっておらず、比較的行きたいところに行った日なので簡単に記述しようと思う。まず最初に、東映太秦映画村を訪れた。実際に俳優さんたちの演技を見たり、時代劇で使われている舞台装置の裏側を見学したりと、かなり充実したところであった。1 日いても退屈しないのではないだろうか。

そして次は、嵐山に行った。当初は、トロッコ列車に乗って渡月橋付近まで行く予定だったが、生憎時間が合わなかったため断念し、路面電車、通称・嵐電で移動した。その後竹林を散策し、渡月橋付近の土産物屋を巡った。夕暮れ時の渡月橋からの眺めは、とても素晴らしかった。

〈おわりに〉

今回の研修で、自分のテーマについての理解をより深められたと思う。やはり本で読んだり映像で見たり、講義で話を聞くよりも、実際に自分でその場に足を運び自分の目で見るのがとても大事だと強く感じた。今後は積極的にフィールドワークを行いたい。そして、何回でも訪れたいと思わせる京都という地は、本当に素晴らしいと心から思う。

# 日本文化特別演習レポート

## —私が感じた古都京都の魅力—

2部日本文化学科 2年 2815130 手島 慈英

以前私は高校二年のころの修学旅行京都を訪れていたのだが肝心な時に風邪をひいてしまい、お寺や神社仏閣を巡ることができなかった。今回の京都研修の自由研修では「絶対に高校で回れなかった分まで楽しんでやる」と心に決めていた。他班ではあるが木幡君と一緒に京都を散策したことで京都の古都としての魅力や町の人々の人柄にたくさん触れることができた。

今レポートでは私が感じた京都の魅力を書き綴っていこうと思う。

高校時代訪れることができなかった私はやはり金閣は別格で嬉しかった。まず岩に「世界遺産 金閣鹿苑寺」と刻まれていたのだが、「これどうやって刻んでるんだ」という疑問を抱きつつ金閣へ。水面に映る金閣がキラキラと輝いてとても魅力的ではあったのだが、個人的にすごいなと思ったのはその周りを囲む竹でできた柵である。まるでそこに当たり前のようにあるのだがよくよくみると縄以外全部素材が竹なのだ。それも周りの景観を損なわず雨にも強くするためかしっかりニスのようなものでコーティングしてあった。そのあと順路の道中で観光客が盛り上がっていたので柵の外を見てみると、三つの石の真ん中に鉢のような容器があって、そこに小銭を投げているようだ。どうやら鉢にうまく小銭を投げ入れられると幸運があるというものようだったのでチャレンジしてみたが、いかんせん私はものを投げるのが苦手なので鉢にすら当たらなかった。結局持参していた小銭入れが空になるくらい投げてしまった。こういった少し楽しめるアトラクション要素があるのも一つの魅力なのだろうか。

さて、金閣がきらびやかなのが売りであるならば、静寂が売りなのが龍安寺の石庭ではないだろうか。私は自分で言うのも恥ずかしいが小さいころから落ち着きのない子だと言われていたし、今でもうるさいと言われてしまうので、石庭では静かにしないと緊張していたのだが入ってみるとそれほど空気が張り詰めて「いるわけでもなく、眠くなっちゃうほど優しい日差しが石庭を照らしていた。いつもどこでもうるさく騒がしい観光客でもその魅力に飲まれて静寂に溶け込んでいるように思えた。その後龍安寺を一周していると鹿威しがあってお清めができるようだったのでやってみたのだが作法がわからず戸惑ってしまった。しかし私の後の観光客は丁寧にこなしていたので少し恥ずかしかった。先述も小銭を投げ入れる鉢や鹿威しなど日本の仏閣文化を手にとって触ったりできる体験型展示物はやはり人気があるし一つアクションを挟むと楽しめるものになることがわかってきた。

それでいうと下鴨神社(正しくは加茂御祖神社)の水みくじもそうじゃないだろうか。番号の書いてある棒の入った六角柱を振って出てきた番号を伝えてお金を収めて巫女さんか

らおみくじを受け取る。これだけでもいわゆる非日常でありドキドキするものだが、これに「おみくじを水につける」というアクションを付け足すことでよりドキドキ感を増しているように感じた。

北野天満宮に着くあたりでお腹が空いてきたので、近くの田舎亭という定食屋さんに入った。時刻は昼頃を過ぎていて店内は誰もいなかったが、メニューの豊富さ、メニューのボロボロ加減から「ここは古くからやっているに違いない」と感じた。しばらくすると一人のおばあさんが私の後ろのほうに座った。私と連れ(木幡君)は注文しようとして「すいませーん」と声をあげると後方に座っていたそのおばあちゃんが「はいなんでしょう」と答えた。いたずらかと思って笑っていたが、どうやらお店の店主だったようだ。驚かそうとしたみたいだったが、ある意味うまく観光客と距離をつめる技、といってもいいだろうか。私は奮発して鰻丼を頼み、連れはカツ丼を頼んだ。食べ終わった後、先ほどのおばあちゃんが話しかけてくれた。どうやら田舎亭は北野天満宮前の通りで最も古く、82年続いていて店主のおばあちゃんは三代目。店のおすすめはうどんと秘伝のつゆを82年間味を変えず守っているのだそうだ。「うどん食べればよかったなあ」という後悔とともにこのお店のことを発表しようと思った。こういった地域の人たちの人柄も「ああ本場の関西人だ」と感じるような人の懐にスルッと入る馴染みやすいものであることも魅力の一つと言えるのではないだろうか。

人柄というならば、八幡神社の入り口で観光客に「蟹肉棒」を500円で売っていた強面のおじさんを忘れない。その出店の前を連れと通ったとき「蟹の足なのかカニカマなのか」という議論が始まった。実際に食べないとわからないと思い並んだのだが観光客に抜かされてしまった。その時出店のおじさんがすごい形相で注意してくれて無事順番通り食べることができた。議論の内容なんてどうでもよく美味しかった。最後、食べ終わった串をどこに捨てたらいいか困っていたらおじさんが串を回収してくれるというので渡し「とても美味しかったです」と伝えたら強面だったおじさんが良い笑顔で「ありがとう」といつてくれた。人は見かけによらない。食べ物も然り。

私は京都出身のロックバンド 10-FEET の大ファンなので必ず見なければいけないところがあった。伏見稲荷大社である。10-FEET は2016年7月20日に「アンテナラスト」というシングルをリリースし、その記念にアーティスト写真を千本鳥居で撮っている(良かったら調べてみて下さい)。

指2本を重ねるようにして鳥居に見立てたポーズを撮るボーカルの TAKUMA がとても印象的だ。これは私も千本鳥居で同じポーズで撮るしかないと考えていた。しかし、あいにくの雨、さらに体力は削られ、さらに私は薄着で歩いていたため完全に体調を崩していた。しかし、友達に心配されながらも伏見稲荷に着いたときには雨はピタリと止んで綺麗な夕日が出ていた。あまり神秘の力や霊的なものを信じない私だが、さすがに伏見稲荷の神様が歓迎してくれている気がした。その時には悪かった私の具合はケロッと良くなっていて、心の底から綺麗だなと思う夕日を生まれて初めて見る事ができた。景色に対して

感動などを抱かない私だが、この夕日は死ぬまで忘れないだろう。

個人的に京都に来てすごいなと感じたのは瓦の屋根が一般的だったり、お寺や神社が多いといういわゆる「和風テイスト」を存分に出しておきながら、意外と近代的なものにも積極的に手をつけ完全に違和感がないまでに仕上げているということだ。屋根は瓦で暖簾があって一見古そうな外見でも中身はカフェや雑貨屋だったりというのが非常に多く古風な街というイメージが和らいでいく街づくりがされているように感じた。和洋折衷ってわけではなく、言い表すなら「外見ヨーロッパだけど関西弁話す人」みたいな感じか。

上のことに関係して書くわけではないが、最近若い女性を中心に人気の PC ゲーム、「刀剣乱舞」と京都の街のコラボレーションは素晴らしかった。このゲームに関して詳しいわけではないが、京都の街のいたるところに刀剣乱舞のキャラクター「刀剣男子」がいてそれを各地からきたであろう「刀剣女子」が写真をパシャパシャ撮っている光景が印象深い。例えば、東映太秦映画村では、ゲートを入れてすぐ右を向くと、プリキュアが、正面には刀剣男子が、という「あれ、ここ太秦映画村だよな？」という空間が広がっている。他にも嵐電と刀剣乱舞がコラボしていた。私は連れ二人とこれに乗ったのだが外観も内装も刀剣男子だらけで私達以外カメラをもった若い女性だったのを覚えている。私が立った後ろの壁に刀剣男子のイラストがあって、入ってきた女の子達が写真を撮ろうとするのだが、私は混んで身動きが取れないのでいちいち頭を曲げて写真を撮らせてあげなければならない何とも言えない空間だった。

最後に京都に魅力を感じた部分を書くとしたら、僕たちが住んでいる北海道、札幌とは全く別世界だということだろう。普段朝早く起きてバイトに行くので、研修中もなるべく早く起き、朝コンビニに行き朝飯のサンドイッチと牛乳を買い頬張りながら散歩をしていたが、札幌を歩いているのと京都を歩いているのはやはり違う。よく街並みを例えるのに「まるで映画のセットのようだ」という言葉が使われるが、まさに時代劇の町並みを歩いている感覚だった。

私は友達の家泊りにいたり、キャンプをしたり、旅行に行くことが多いが、正直言うとかかなりのホームシックだ。何日間か旅行に出かけても、初日には自宅が恋しくなってしまう。今回京都に 6 日間滞在する、というのも最初は不安と緊張で一杯だった。しかし、今こうして文字に起こしてみても、京都にまた行きたい、と感じている自分がある。これはきっと親切で面白かった先生方、信頼できる友達、美味しいご飯屋さん、地域の優しい人たち、優しく迎えてくれる街並み、全て揃ったからなのだろう。どうせ自由なんだから遊びまくれるじゃんなんて最初に思ってた自分がこんなに京都の魅力に染まることのできると思わなかった。また歳をとってから京都を訪れたときに大学生のとき一度来ておいて良かったと思えるような研修になったと思う。



## 日本文化特別演習 —オーソドックスな京都巡り—

2部日本文化学科 2年 2815132 棗 真聖

この、五泊六日に及ぶ日本文化特別演習であったが、私は、とても有意義な一日一日を過ごし、興味深い体験ができたと思う。

そもそも、私は、京都に来る前までは、京都らしさ、京都の景観については全く考えておらず、「京都＝有名な寺、神社」くらいに考えていた。しかし、二日目の巡検にて、井上先生をはじめとする他大学の講師方と二条、東山周辺を歩き、話を聞いていると、京都は市がお金を出し、景観を守っているという話を聞いた。私が特に、京都らしい景観だと思い感動したのは、「祇園新橋地区」だ。一面石畳が敷かれ、建物も古風にデザインされている。しかし、このような景観になったのは数年前からだという。確かに、神社や寺の回りが、現代風の建物に囲まれていたら、今ほどの感動は抱けないだろう。その点は、井上先生が言っていた、観光客を呼ぶには、日本らしさやその街らしさを大事にし、アピールするというのが、よくできているのだろうと思った。

その日の夜に行った「Restaurant Ninja」でもそう感じた。海外でも有名な、忍者という日本らしさを存分に押し出した題材であった。さらにはただ食事をするだけでなく、忍術でお客様をおもてなしするのである。我々でさえ非常に盛り上がっていたのだ、特に外国人観光客から、これがうけないわけがないだろう。私は、ここでの料理を食べ、満足した気持ちで自由散策を迎えることができた。

京都と言えばやはり、世界遺産にも多く登録されている寺や神社だろう。私は、自由散策の時間の多くを、それらを巡るために費やした。高校時代の修学旅行でも、京都へは来ているが、今回は、その時行けなかった場所へ行けたことがなによりもよかった。

一つは、仁和寺である。これは『徒然草』に収録されている、仁和寺にある法師に登場する寺である。仁和寺とは別に、石清水八幡宮も登場するが、そちらへ行く機会がなかったのも、また京都へ観光に来ることがあれば、ぜひ行ってみたいと思う。

この仁和寺であるが、正門である「仁王門」の迫力がすさまじい。左右に阿吽の像がおかれている。さらに敷地内には、東寺と同じように五重塔が建てられている。

さらにここは、春には桜の名所にもなるのである。その時期にも、仁和寺に足を運びたいものである。

余談ではあるが、仁和寺の向かいに、「御食事処 松風」というお店がある。主にそば、うどんの定食屋だと思われる。量は少なめなのが、少し残念だが、柔らかめの麺がすすりやすく、純粹においしい。また店員さんが、関西弁で気さくに話してくれるので、方言が好きな人には特におすすめしたい。

他には、伏見稲荷大社に初めて行き、千本鳥居を見ることができた。元より鳥居が数多

く並んでいるというものは二つとなく、それに興味があったのと、これは京都に行ってから気づいたことなのだが、私の好きなアニメーション作品に、伏見稲荷大社の千本鳥居が登場しており、聖地巡礼の意味も込めて赴いた。

千本鳥居の前に立ってみると、画像で見るとは全く違う迫力と、夕暮れ時に行ったため、先が見えない状況が重なり、とても神秘的な雰囲気であった。そのため友人とこのためだけに京都に来れる、と感動したのは、いい思い出である。

また寺、神社とは異なるのではあるが、嵐山へ行く途中のバスが太秦映画村を通ることに気付いたので、ついでに寄ってみた。

私はあまり映画や時代劇に興味がなかったのだが、中では、新選組の沖田総司を主人公とした、観客を交えてのチャンバラショーが行われていた。京都には、新選組屯所や池田屋事件の舞台である池田屋など、新選組にゆかりのある建物が多い。それによって最近流行りの幕末好きそうな若者が多く立ち寄っていた。

ショーが終わると、チャンバラを体験できる企画が催されていた。これには小さい子や、外国人観光客がとても食いついており、演者と参加者が一体となり良い雰囲気では会場が盛り上げられていた。こんなところにまで日本らしさが含まれており、私はなるほどと思わざるを得なかった。

さらにいうと、中にあるアミューズメント施設にも忍者などの日本らしいものがモチーフにされているのが、人気の秘訣なのだと気づいた。

私は、これらに加え、一般的に有名な観光名所である、金閣寺や、清水寺、北野天満宮、嵐山などを回って歩いた。これらは見た目祀られているものにあやかるなどして、日本人も、外国人の観光客も多く、非常に賑わっていたという印象が一番残っている。このような賑わいは、札幌では雪まつりくらいでしか見られないだろう。札幌らしい建物、景観というのは、ぱっとは思いつかないことが非常に悔しい。

これらを目の当たりにし、では北海道札幌で、日本らしさ、札幌らしさを出せるかと考えてはみたが、それは非常に難しいと思った。

そもそも北海道は、日本として数えられている年月が、京都に比べると短すぎるのである。また、京都は、長い間京が置かれていたために、周辺に歴史的建造物が多く建てられたと思う。

京都には京都の、他移動には北海道の良いところがあるので、京都と北海道を比べる、という野暮なことはしてはいけないと思った。今後もしつくりと北海道や札幌を見ていき、北海道らしさ札幌らしさに、日本らしさを重ね合わせて日本有数の観光地として豊かな街になっていけば良いと思う。

## 日本文化演習を終えて

2部日本文化学科 2年 2815141 藤橋 大雅

今回自分たちは2月26日～3月3日までの5泊6日にわたって、普段講義で学んでいる日本文化を今までの「耳」だけでなく、「目」や「肌」で実際に感じてみることで今までの印象とはまた違う日本文化を感じるといったところがこの旅行で一番大事な部分だと思い、この研修旅行に行くことを決断した。

実際、自分の両親が関西人であるため、小さいころから関西には祖父母に会うために度々行っていたし、大学に入ってから友達との旅行で数回京都には訪れていたため、京都の景色などを見てもとても感動することはなかった。

しかし、今回は単なる旅行に来たわけではなく、京都に研修しに来たわけで、単なる旅行の時とは違った視点から京都を見ることができ、少し違った京都を感じる機会もあり、そういった部分をここに記していく。

今回の旅行で一番今までの旅行とは違った京都を感じる事が出来たのは、2日目の立命館大学・平安女学院大学の教授や大学院生の方たちのお話を聞きながら二条駅から東山界限を散策した時である。

二条駅界限では都市周縁の市街化・再開発が進められていて、江戸時代から今に至るまでに交通・産業・企業がどのように移り変わり、どのように発展していったかなどの歴史を学び、さらには京都駅・二条駅周辺と札幌駅・桑園駅周辺を比較してみるなど、北海道の話と混ぜることにより、自分たちも親近感がわき、話がとても聞きやすく、理解しやすかった。

こういった視点で京都を見た事はなかったので非常に自分にとっては良い機会となり、今後自分が旅行する時なども少しでもこういう考えを持ちながら旅行してみると、より面白く、楽しい旅行になるのではないかと考えさせられる時間だった。

3日目以降は自主研修となり、大人数で動くより1人で行動したほうが自分の見たいものに自由に時間をかけることが出来ると思い、1人で京都を散策することにした。

自主研修中に京都御所・上賀茂神社・晴明神社・相国寺・二条城・下鴨神社・南禅寺・金地院・永観堂・銀閣寺・方広寺・豊国神社・万寿寺・勝林寺に行ってきた。

その中で上賀茂神社が自分の一番の思い出となっている。「上賀茂神社」という名は通称であり、本当は「賀茂別雷神社」(かもわけいかづちじんじゃ)という名で、この神社の御祭神の名が「賀茂別雷大神」であるため、この神様の名がそのまま神社の名前になったそうで、神様の名がそのまま神社の名前に使われるのはとても稀であるようだ。確かに伊勢神宮や平安神宮などもそうである。

京都にはもう1つ名前の似た神社がある。それは「下鴨神社」である。これも上賀茂神社同様通称であり、実際は「加茂別御祖神社」(かもわけみおやじんじゃ)という名である。鴨川という川があり、その下流付近にこの神社が建てられているため「下鴨神社」という通

称で呼ばれるようになったという説がある。

さて、この2つの神社、名前がとても似ていますがどういう関係があるのだろうか。

この両神社はもともと2つの神社を合わせて「賀茂社」と呼んでいて、もともこの神社の周辺は古代豪族であった賀茂氏の勢力地だった。そのため北にある神社と南にある神社を区別するためにこのような通称がつけられた。

そして、それぞれの神社に祀られている神様が親子関係であり、下鴨神社に祀られている「賀茂玉依比売命」（かもたまよりひめのみこと）が母で、上賀茂神社に祭られているのが息子の「賀茂別雷大神」である。

上賀茂神社の特徴としてはまず『延喜式』では名神大社に列し、のち山城国一ノ宮として尊崇され、明治以降終戦まで官幣大社として伊勢神宮に次ぐ全国の神社の筆頭に位した。

そして、二ノ鳥居を入った正面に円錐形に整えられたこの神社のシンボルでもある「立砂」を見ることが出来る。これは神山を象ったもので、頂に3本と2本の松の葉が立てられており、陰と陽の一对になっている。

上賀茂神社のいたるところに葵（二葉葵）の文様が刻まれ金具で飾られていた。葵は昔「あふい」と読み、「ひ」とは「神霊」を意味し、葵とは「神と逢うこと」であり、また「逢う日」でもある。御祭神降臨の際に「葵」を飾り、祭りをせよとの御神託があったことから、御神紋となり社殿を飾り、神と人とを結ぶ草として古来大切に護られてきた植物でもあるそうだ。

自分がこの神社に訪れた時に偶然特別拝観をやっていて、貴重な機会だと思い、拝観した。たすきのようなものを巫女さんに渡され、それを首にかけて奥の畳の部屋で少し待っててくださいというので、その通りに従った。このたすきは「浄掛」というもので、式年遷宮の際、御社殿の御屋根に使われていた檜皮古材で作られているようで、非常に貴重なものをいただき、これからも家で大事に保管しておこうと思った。しばらくすると、神主の方が来られて、この神社の由来・成り立ちなどのお話を聞き、最後にお祓いをしてもらい、普段は近づくことはできない本殿・権殿のすぐ傍に行くことが出来た。本殿とは普段神様がいらっしゃる建物のことを指し、権殿は式年遷宮や災害などで本殿に神様がいないことができない時の本殿の代わりとなる建物のことで、普段は神様もいないので空である。

今回ここに記したことは全て神主の方から聞いたものである。神主の方の話し方はとてもゆっくりでとても聞きやすく、他の神社やお寺でもお話を聞いてみたいと思った。

事前に詳しく調べたりせずに行った上賀茂神社でとても貴重な体験ができ、思い出に残った。その他の場所でも特別拝観などやっていたが、日時が合わず、できなかったりしたところもあったので、次回また京都に行く時は下調べをして今回よりも充実した旅行にしたいと思った。しかし、今回は研修旅行ということで今までとはまた違った感覚の旅行だったので、今回もとても収穫のある旅行になった。

# 舞鶴における引き揚げの歴史

1部 英米文化学科 3年 2914117 奥村 活弥

## I. はじめに

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日に日本の終戦以来、今年で 73 年目を迎えようとしている。今となっては日中戦争や太平洋戦争を直接経験した人はいなくなりつつある。そんな中、ここ数年でこの時代について関心が高まってきている。平成 25 (2013) 年から DMM.com が配信しているブラウザゲーム「艦隊これくしょん (略称 艦これ)」により、太平洋戦争期に登場した軍艦や戦闘機、軍港などの名称が多くユーザーに知れ渡ることになった。さらに、平成 27 (2015) 年に舞鶴市 (京都府) にある舞鶴引揚記念館 (以下、記念館) に所蔵された史料がユネスコ世界記憶遺産に指定されたことで、多くの人々に旧満州国や旧ソ連からの引き揚げ、特にシベリア抑留に関する事柄が知られることとなった。また、私が舞鶴を訪れたのは曾祖父が引揚経験者で、記念館を訪ればどのような思いをして日本に生還したのかを知るためである。

## II. 引き揚げ

戦争の話を見ると「引き揚げ」という言葉がたびたび出てくる。「引き揚げ」とは、昭和 20 年の終戦にともない、海外に残された日本人約 660 万人を早急に日本に帰国させることになった。これが「引き揚げ」である。多くの日本人は引揚船 (復員船) に乗って引き揚げてきた。私はこの船の多くが貨物船であることに驚いた。なぜなら私はその多くが元軍艦だと思っていたからである。実際、終戦直後は航空母艦「鳳翔」「葛城」、軽巡洋艦「鹿島」「酒匂」、駆逐艦「響」「雪風」など数多くの軍艦が引揚船として使われた。しかし、すぐに各戦勝国に賠償艦としてその多くが引き渡されたため、残った「高砂丸」「興安丸」などの貨物船が引揚船の役割を担った。また、日本が所有している貨物船だけでは足りなかったため、アメリカからも数多くの船を借用して「引き揚げ」を続けた。呉港や佐世保港、横浜港などかつての四大軍港を含めた数多くの軍港が数年で引き揚げの事業を取りやめる中、舞鶴港は日本で唯一昭和 20 年から昭和 33 年まで引揚港としての役割を果たした。そのため、引揚船計 346 隻、のべ 66 万人の引揚者を出迎えた。

## III. 世界記憶遺産

記念館に所蔵されている史料がなぜ世界記憶遺産に登録されたのか。それは、シベリア抑留の生活でどのような過酷労働を強いられたのか、またどのような思いで日々過ごしていたのかを鮮明に文字で記録された物が唯一現存しているからである。それが『白樺日誌』である。本来はこのような記録はもっとあったはずであるが、旧ソ連の収容所内では抜き打ちの持ち物検査が頻繁に行われ、日本語が書かれたものは全て処分されたからである。なぜなら、日本の文字による記録を嫌った旧ソ連人にとって、それはスパイ行為同然であったからである。仮に日本語が書くことが許されたとしても厳しい検閲の下、家族宛の手紙にはどこの収容所で暮らしているのか、どのような暮らしをして、何をしているのか、

収容所での様子を書くことは一切許されず、生存している様子を書くことしかできなかった。このような背景があり、持ち物検査で発見されないために『白樺日誌』は掌サイズの白樺の樹皮にススで文字が書かれていた。この史料の価値がさらに高まるのは、スス(墨)で書かれたという点である。記念館では西洋インクのペンで書かれた手紙も展示されているが、70年以上も経過しているため色褪せて非常に読みにくい状態であった。一方ススで書かれた『白樺日誌』は色褪せることなくはっきりと文字を読むことができるほどであった。また、『白樺日誌』の作者はもともと教師であったことから、五・七・五・七・七の和歌で書かれおり、より悲惨で過酷な環境下で生きる希望を捨てない人間の心が表現されている。

#### IV. 平和教育

今日の記念館では「引き揚げ」の記憶を後世に語り継ぐ活動を行っている。「引き揚げ」を実際に経験した90代の人々や記念館関係者が、来館者や京都府の小中学生に当時の様子を伝える活動を頻繁に行っている。当事者による当時の体験談や写真、映像、当時に身に着けていた衣服など様々な史料を見せながら語ることで、来館者に当時の様子を後世に伝えている。これは戦争を再びしてはならないということを願う平和教育の一環と言ってよい。将来教員(英語科・地歴科)を目指す私が考えたことは、小・中学校が行う総合的な学習の時間、特別活動、道徳教育の一環で学校と地域が連携をしていることである。特に道徳科の内容項目にある「生きる喜び」「愛国心・伝統文化の継承」などを考えさせることで児童生徒の道徳性の育成に繋がる。学校の歴史教育では、歴史を教える上で日本が関わった戦争について教えるには細心の注意が必要であり、解明されている事実のごく一部しか教えることが出来ない。この問題を解決するために舞鶴の平和教育が存在していると私は理解した。児童生徒は学校では教わるができない事柄を学ぶことができる。学びとは机に向かうことだけでなく、実際に現物を見て自ら考え、自分なりに答えを見出すことも学びである。物事に対して、柔軟な考え方ができる小中学生が歴史を通じて平和とは何かということ学ぶことで、戦争を繰り返してはならないことを実感し、平和を願う人々が増え、日本の平和が保たれると私は感じた。

#### V. まとめ

十五年戦争や「引き揚げ」を経験し、直接知る人は近い将来にいなくなってしまう。記念館に今も保存されている様々な史料は、その時代を物語っている。歴史はビデオのように巻き戻して再生できないが、語り継ぎによってその当時の様子をイメージし思い浮かべることが出来る。舞鶴で行われている平和教育は失われつつある記憶を瀬戸際で保っている。日本は憲法で平和主義を謳う世界でも珍しい国家であり、この意義を理解している都市の一つが舞鶴市ではないかと私は考える。近年「艦これ」の影響で、呉市や佐世保市、横浜市を聖地巡礼し、戦艦や航空母艦などの軍艦、ゼロ戦や隼などの戦闘機に関する歴史に触れることはもちろんいいだろう。しかし、日本の戦前・戦後に興味のある方は舞鶴に平和とは何かを考えるためにぜひ訪れてもらいたい。

# KYOTO'S TRIP

1 部英米文化学科 2 年 2915141 久保田 仁成

今回、2月26日から3月3日まで5泊6日の日程で日本文化特別演習が行われた。私自身、京都に行くのは高校の修学旅行以来で、2度目であった。そのときも、京都にはたくさん観光客でにぎわっていた。それを思い返し、出発前に私が掲げたテーマは、なぜ京都が国内、国外問わず人々に愛される観光地であるのかということを実地に行って見て理解することであった。

初日は、空港についた後、バスでホテルに移動した。また、ホテルについた後、京都の町を散策した。どちらの時も、京都の街並みを見て気付いたことは、札幌の建物とは外観が明らかに違うということである。のちにまた記述することになるが、普通の建物もそうだし、私たちがよく知っているマクドナルドやスタバなども外観がいかにも京都というような色合いの外観をしていた。

2日目は、まず二条駅へ行き、そこからグループに分かれて外部の講師のお話を聞きながら京都の町を探索した。まず、私たちのグループは二条駅界隈を歩いた。二条駅については、あまりイメージはできなかったが、先生の「二条駅はほとんど桑園に近いよ」という言葉で、イメージがしやすくなった。また、街を歩いている間、「なぜこんな場所にこんなものがあるのか?」ということを考えさせられる機会が多く、普段は特に気にしていなかったことにも着目することができ、これは今後も活かせるのではないかと考えた。二条駅へ行った後は神泉苑へ行った。余談ではあるが、様々な場所でおみくじを引いたものの、大吉を引いたのは神泉苑のみであった。途中休憩をはさみ、私たちは続いて観光名所の一つである清水寺へ向かった。そこで、清水寺についてのお話を聞いた。また、京都の町の災害史についても学んだ。そのあと、街並みを再び歩いた。その時も、京都独特の建物の外観や、石の道路があるのを目撃した。講師の先生は、繰り返し「京都の街並みの景観は京都“らしさ”を守るためにいろんな人が努力をしているんだよ」といっていた。確かに、京都の街並みの写真などを見れば、「あ、京都だ!」と想像することができる。こういった人々の努力というのは、京都が人気の観光スポットである所以の一つなのではないかと考えた。

また、二日目の夕食で行った“NINJA KYOTO”がとても印象的であった。店員がみな忍者の格好をし、料理を運んでくるというもので、火を使ったり見た目が変わったものであったりと、いろいろ趣向を凝らしたものであった。また、忍者さんによるマジックも披露され、料理だけでなく手品も楽しめるという素晴らしいものであった。

3日目は、班員全員で京都御所に行き、そのあとから各自自主研修を行うという日程であった。京都御所は、事前にビデオで学習していたが、そこからは想像できないような広さで、やはり実際に現地へ行き見ていくことが大切だなと感じた。御所へ行った後、まず私は銀閣寺へ向かった。銀閣寺が一番訪れたいと思っていた場所であった。というのはまず同じ有名

な金閣寺に比べて派手ではなく、落ち着いた雰囲気日本で日本の“わび・さび”を感じることができる日本の世界遺産であるからである。また、個人的に高校の頃に一度訪れた時に、実に気温が快適であったり、庭園の眺めがとても美しかったりと、居心地がよく非常に落ち着いた雰囲気であって、もう一度訪れたいという思いがあったためである。高校の頃に訪れた時は、9月の終わりごろだったので、そのころと比べるとだいぶ印象が違って見えた（銀閣寺に限らず他の場所もそうであったが）が、やはり高校の頃に感じた銀閣寺のわび・さびの雰囲気は変わることなく、やはり京都“らしさ”を感じるのであれば銀閣寺を見ることは欠かせないと感じた。

4日目は、そのほかの観光スポットを巡ろうと考え、金閣寺や伏見稲荷へ向かった。先に述べた通り金閣寺は銀閣寺と比べ、ピカピカで派手であった。この金に魅了されるのか、銀閣寺と比べ金閣寺は人が多く、特に外国人が多い印象があった。また、伏見稲荷は高校の頃に行ったことがなかったので、ぜひ行きたいと感じていた。写真でよく見る千本鳥居を見に行くと、想像以上に壮大な景色であり、何か神秘的なものを感じることができた。また、ホテルへ帰る際に近くにあったので平安神宮も立ち寄ってみた。正面の大きな鳥居は、とても壮大なものであり、その大きさに圧倒された。

この日だけでなくほかの日でも感じたことになるが、京都は非常にバスや地下鉄が多く走っており、それぞれの観光地へのアクセスが非常に楽であるということに気づいた。さらに、バスや地下鉄の一日乗車券などを利用すれば、安価で様々な観光地を回ることができる。こうした観光地へのアクセスのしやすさというのは、観光地にとっても重要であり、人気の理由の一つだと思った。

5日目、様々な場所に立ち寄ったのだが、一番印象に残っているのは梅宮大社という場所である。本来、この場所は訪れる予定はなかったのだが、少々時間があまりどこへ行こうかと悩んでいる中、ネットで「梅宮大社、通称『猫神社』』といわれているのを見つけ、興味がわいたので行くことにした。噂通り、境内には猫が普通に歩いており、非常に癒される空間であった。また、猫が目当てで行ったのであるが、実際行って見ると牡丹や梅の花が綺麗に咲いており、おそらくもう少し後の春に行くともっときれいな景色が見られたのではないかと考えた。

この日本文化特別演習でのフィールドワークを通じ、京都の町を散策し、様々なことを学ぶことができた。事前に得ていた情報よりも多くの情報を得ることができ、やはり現地へ赴き実際に目で見てみることは大切だなと痛感した。非常に有意義な6日間であったと思える京都研修であった。

平成28年度 日本文化特別演習報告書 第6号

---

発行日 平成29年3月17日

発行 北海学園大学人文学部

印刷 株式会社アイワード